静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第244集

青木原遺跡Ⅱ

平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第244集

青木原遺跡Ⅱ

平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

三島市内に流れる御殿川は、狩野川水系の一支川である。昭和45年より、大場川との合流部から上流側に向け、随時、洪水対策の護岸整備が進められ、これら関連工事によって破壊が免れない遺跡については、三島市教育委員会と当研究所が発掘調査を実施し、記録保存につとめてきた。

これら御殿川流域遺跡群では、河岸に接する微高地より検出される集落跡や墓域、埋没した旧河道から大量に出土する遺物など、弥生時代以降、近世・近代に至る時代毎の調査成果が上がっており、当該地域の歴史復原に多くの資料を提供している。

青木原遺跡は、御殿川中流部左岸に位置する埋蔵文化財包蔵地である。過去、その遺跡範囲及び隣接部において、宅地分譲・個人住宅建設、河川改良工事に伴った埋蔵文化財発掘調査が幾度も行われ、成果が上げられてきた。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される小銅鐸が出土した。小銅鐸は、九州、関東など、いわゆる銅鐸分布圏の外側にも分布する小型祭器で、静岡県内で6例、全国でも50余例と、その事例数は、銅鐸に比べ遥かに少数である。銅鐸祭祀の終末、他地域との交流など、当時の社会状況を考察する上で重要な資料となるものである。

御殿川旧河道中から出土した遺物の数々は、御殿川上流の古人の活動を反映したものであり、古代、伊豆国府が在所し、中世三嶋神社の門前町、近世東海道宿場町として栄えた三島の姿の一端を示してくれている。

最後に本調査の現地調査並びに報告書作成にあたっては、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会文化財保護課、三島市教育委員会をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力・理解を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

平成23年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　石田　彰

例　　言

1　本書は、静岡県三島市南二日町262-4他所在の青木原遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度は、文化課）の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成21年６月から22年２月に渡り現地調査を実施し、資料整理を平成22年６月から平成23年３月まで行った。

3　調査体制は、以下の通りである。

平成21年度　（現地調査）　常務理事兼研究所長　天野忍　　研究所次長兼総務課長　松村享
（事業担当）　研究所次長兼調査課事業係長　稲葉保幸　　調査課副主任　青井拓司
（調査担当）　研究所次長兼調査課長　及川司
研究所次長兼調査課東部総括係長　中鉢賢治
調査研究員　久瀬要　　常勤嘱託員　三好元樹
（保存処理）　調査課保存処理室長　西尾太加二　　調査研究員　大森信宏

平成22年度　（資料整理）　常務理事兼研究所長　石田彰　　研究所次長兼総務課長　松村享
（事業担当）　総務課専門監兼事業係長　稲葉保幸　　総務課副主任　青井拓司
（調査担当）　調査課長　中鉢賢治　　調査課第二係長　岩本貴　　調査研究員　岩名建太郎
（保存処理）　総務課保存処理室長　西尾太加二　　調査研究員　大森信宏

4　出土した木・金属製遺物の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

5　本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅳ章ににについて、調査研究員岩名建太郎が行った。また、出土木製品の樹種同定を東北大学植物園鈴木三男氏に、動物遺体の同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果を付編に掲載した。

6　石器・石製品の石材鑑定は、研究所職員森嶋富士夫が行った。

7　平成21年度、現地での基準点測量・空中写真撮影・写真測量業務を株式会社フジヤマに委託した。

8　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

9　本調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化財保護課が保管している。

凡　　例

1　測量については、現地工事図面との整合を図るため、日本測地系（改正前）を使用した。国土平面直角座標Ⅷ系のＸ＝－99170.000、Ｙ＝＋39650.000を原点（Ａ１）として、座標方位を基準に１辺５ｍの方眼（グリッド）を、南から北へ向かって、Ａ・Ｂ・Ｃ…、西から東へ向かって、１・２・３…と設定している。

2　本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産技術会議事務局監修1992）に準拠した。

3　挿図の拡大・縮小率は、各図中に示したスケイルのとおりである。また、写真図版の拡大・縮小率は、任意である。

4　図中の網掛け表現で、特に表記が無いものの内容は、以下のとおりである。

遺物図　土器赤色顔料・木製品赤漆塗布部分　　土器黒色処理・木製品黒漆塗布部分

目　次

序
例　言
凡　例

第Ⅰ章　調査概要……1
　第１節　調査の経過……1
　第２節　調査の経緯……2
　第３節　調査の方法……2

第Ⅱ章　位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5
　第３節　基本土層……7

第Ⅲ章　遺構と遺物……8
　第１節　遺　構……8
　第２節　遺　物……9
　　(1)　土　器……9
　　(2)　瓦……19
　　(3)　石器・石製品……19
　　(4)　金属製品……19
　　(5)　木製品……23
　　(6)　種子類……33

第Ⅳ章　ま と め……42
　第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の銅製品出土地点についての考察…42
　第２節　古代瓦搬入経路についての考察…43

付編１　静岡県三島市青木原遺跡出土木材の樹種……45

付編２　青木原遺跡の自然科学分析……59

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　調査区位置図……3
第３図　グリッド配置・土層柱状図……4
第４図　周辺遺跡分布図……6
第５図　近世・近代杭配置図……6
第６図　出土遺物実測図（土器１）……10
第７図　出土遺物実測図（土器２）……11
第８図　出土遺物実測図（土器３）……12
第９図　出土遺物実測図（土器４）……13
第10図　出土遺物実測図（土器５）……15
第11図　出土遺物実測図（土器６）……16
第12図　出土遺物実測図（土器７）……18
第13図　出土遺物実測図（瓦）……20
第14図　出土遺物実測図（石器・石製品）……21
第15図　出土遺物実測図（金属製品）……22
第16図　出土遺物実測図（木製品１）……23
第17図　出土遺物実測図（木製品２）……25
第18図　出土遺物実測図（木製品３）……26
第19図　出土遺物実測図（木製品４）……27
第20図　出土遺物実測図（木製品５）……28
第21図　出土遺物実測図（木製品６）……29
第22図　出土遺物実測図（木製品７）……30
第23図　出土遺物実測図（木製品８）……31
第24図　出土遺物実測図（木製品９）……32
第25図　川焼台遺跡出土１号小銅鐸……43

挿表目次

第１表　土器観察表１（縄文土器・弥生土器・土師器・中世素焼土器）……33
第２表　土器観察表２（須恵器・灰釉陶器・山茶碗）……37
第３表土器観察表３（輸入磁器・炻器・瓦器・国産陶磁器・土製品）……38
第４表　瓦観察表……39
第５表　石器・石製品観察表……39
第６表　金属製品観察表……39
第７表　木製品観察表……40

図版目次

図版１　１．調査区南東部（西側より撮影）
２．調査区北西部（北西側より撮影）
図版２　小銅鐸
図版３　１．銅釧再加工品　２．縄文土器
３．敲石　４．弥生土器（壺）
図版４　弥生土器・土師器（壺・小型壺・鉢）
図版５　１．弥生土器・土師器（壺・台付甕集合）
２．弥生土器・土師器（高坏集合）
図版６　弥生土器・土師器（壺・高坏・台付甕）
図版７　１．土師器（甕）　２．土師器（坏）
３．土師器（坏・柱状高台）
４．須恵器（坏蓋）
５．須恵器・灰釉陶器・山茶碗
（坏・碗類）
６．須恵器（壺・甕類）
図版８　１．管玉　２．石製模造品
３．中世常滑産炻器
４．中世煮沸具（堝・羽釜）
５．かわらけ皿類
図版９　１．古代瓦集合　２．古代瓦
３．中世輸入磁器
図版10　１．中世瀬戸・美濃系陶器
（縁釉皿　灰釉塗布１）
２．中世瀬戸・美濃系陶器
（縁釉皿　灰釉塗布２）
３．中世瀬戸・美濃系陶器
（縁釉皿　鉄釉塗布）
図版11　１．中世瀬戸・美濃系陶器（折縁皿）
２．中世瀬戸・美濃系陶器（卸皿）
３．中近世瀬戸・美濃系陶器
（皿類　志野釉塗布）
図版12　１．中近世瀬戸・美濃系陶器（天目碗）
２．中近世瀬戸・美濃系陶器（擂鉢）
３．近世瀬戸・美濃系陶器
（鉢類・片口・灯明皿）
４．中近世瀬戸・美濃系陶器
（壺・花瓶類）・瓦器
図版13　１．近世瀬戸・美濃系陶器
（腰錆碗・香炉・灰落し）
２．近世瀬戸・美濃系陶器（仏餉具）
３．近世瀬戸・美濃系陶器（瓶類）
４．その他の近世陶器（鉢類・輪禿皿）
５．肥前系磁器
図版14　１．石器（砥石・硯）
２．石器（火打石）
３．近世・近代瓦
４．金属製品（刀子・銭貨・煙管）
５．土製品（土器片加工円盤）
６．土製品（土人形）
７．種子（胡桃）
８．種子（桃または、梅）
図版15　１．漆製品集合　２．栓集合
図版16　木製品（容器・食事具）
図版17　木製品（蓋板１）
図版18　木製品（蓋板２・側板・底板）
図版19　木製品（下駄１）
図版20　木製品（下駄２・その他の木製品１）
図版21　木製品（その他の木製品２・部材類）

第Ⅰ章　調査概要

第１節　調査の経緯

三島溶岩流末端部、菰池に湧出する、富士山からの伏流水を起源とする御殿川は、三島扇状地の東部に位置する三島市街地中央部を南流し、大場川へと合流する流程６km、流路延長9.5km、流域面積2.3km²の狩野川二次支川である。

御殿川自体が流路途中に多くの蛇行部を持つ上、合流する大場川や、さらにこれが下って合流する狩野川下流部の河床勾配は、比較的緩やかであり、その背水影響の及ぶ流域では、短時間の急激な降雨に対して、排水処理能力が追いつかないため、湛水・浸水被害が度々もたらされて来た。

静岡県は、昭和45年より、排水能力の向上と流域面積確保を目的とした御殿川蛇行部の直進化及び護岸整備工事事業を断続的に進めてきた。

同時に工事計画箇所にある埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の必要が生じたため、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、三島市教育委員会の間で協議のもと、大場川合流部より御殿川を遡る方向で遺跡分布調査・発掘調査が順次実施された。

昭和49年、御殿川と大場川合流部に位置する中島（城内）遺跡調査の後、昭和55年に中島地区、昭和57年には、鶴喰・八反田・中地区で分布調査が実施され、発掘調査対象地の選定がされた。

中島地区の御殿川流域部に包蔵地登録されている中島Ｂ遺跡の範囲内では、昭和56年に下舞台地点、昭和61年に上舞台地点、平成２年以降は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査担当を三島市教育委員会から引き継ぎ、平成２～４年に中島西原田・梅名大曲田地点で発掘調査を行った。

第１図　遺跡の位置

その上流部の西岸側に位置する鶴喰広田遺跡では、平成３年に八反田前田地点、平成６年に鶴喰前田地点、平成７・８年には、鶴喰前田地点の南側に１～３区と設定した地点を発掘調査した。

東岸側の中地区では、平成８・９年に（中）手乱遺跡の一部について、調査を行った。

この平成６～９年に実施された鶴喰広田・手乱遺跡の調査時に作業安全確保のための緩衝用地として未着手となっていた河岸部を対象にした範囲について、平成20～22年に発掘調査を実施した。

さらに上流部の南二日町地区で、平成10～11・17～18年に発掘調査を実施した（青木原遺跡）。

今回の青木原遺跡調査区は、水路直進工事の連続する場所で、前回調査区の南東側に当たる。平成20年11月に静岡県教育委員会文化課によって試掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代の土器が検出されたことを受け、本調査の実施が協議・決定された。

第２節　調査の経過

平成21年６月末より現地草刈り作業を開始する。７月上旬、基準点測量実施、同月中旬、機材搬入、同月下旬、周囲防塵フェンス設営を完了した。

調査区は、排土搬出・管理上の制約より、２区に分割した。先行調査箇所である中・東部分については、７月27日より重機・車輌（バックフォー・クローラーダンプ）を用いた表土除去作業を開始して、これを８月19日まで終了させた。ベルトコンベア・水中ポンプ等の機械用電源の架線・配線工事後、人力による包含層掘削を８月25日より11月18日まで実施し、11月19日に当該区の空中写真撮影と写真測量を行った。

調査対象区の西部分については、11月24日から12月１日まで表土除去作業を行い、機材等を再配置した後、12月８日より平成22年１月６日まで包含層掘削を実施。当該区の空中写真撮影と写真測量は、１月９日に行った。

１月13日より機材・仮設建物の撤去・搬出を開始し、１月20日から28日まで埋め直し作業、２月２日から４日まで防塵フェンス撤去、入場口道路復旧工事を行い、現地撤収工を完了した。

第３節　調査の方法

現地調査にあたり、測量基準点は、平成10・17・18年度実施調査と同様、改正前の日本測地系Ⅷ系に基づいて設定された方向軸を利用することとした。グリッドは、新規に設定し、５ｍ間隔で、南北方向は、南から順にアルファベットを用い、東西方向は、西から順にアラビア数字を用いた。

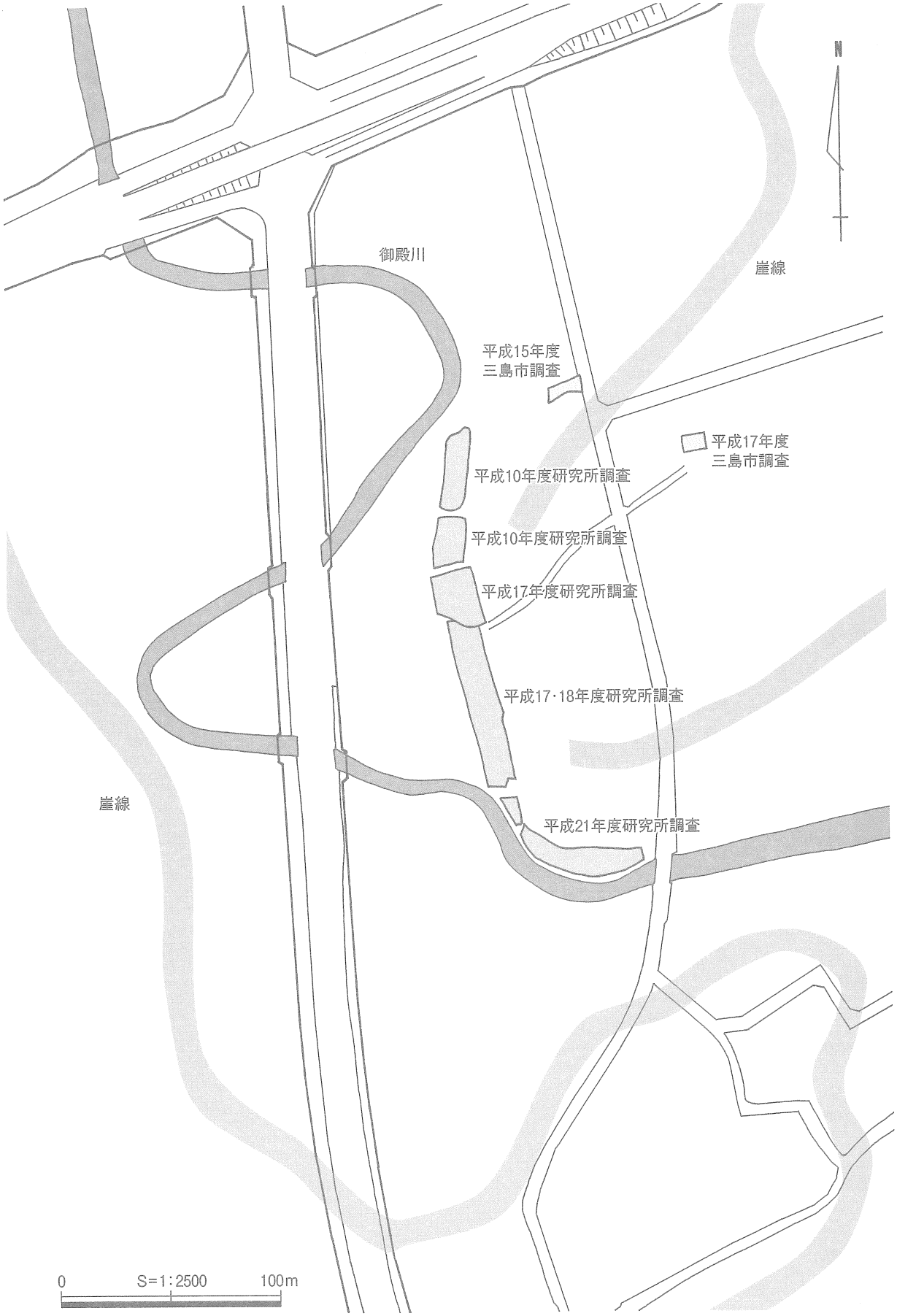
土層図は、縮尺率1/20で作成した。

遺物の取上は、出土位置について、３次元位置をトータルステーションで記録している。包含層最上位の砂層中より検出された木製品集中については、その平面図を縮尺率1/5で作成した。

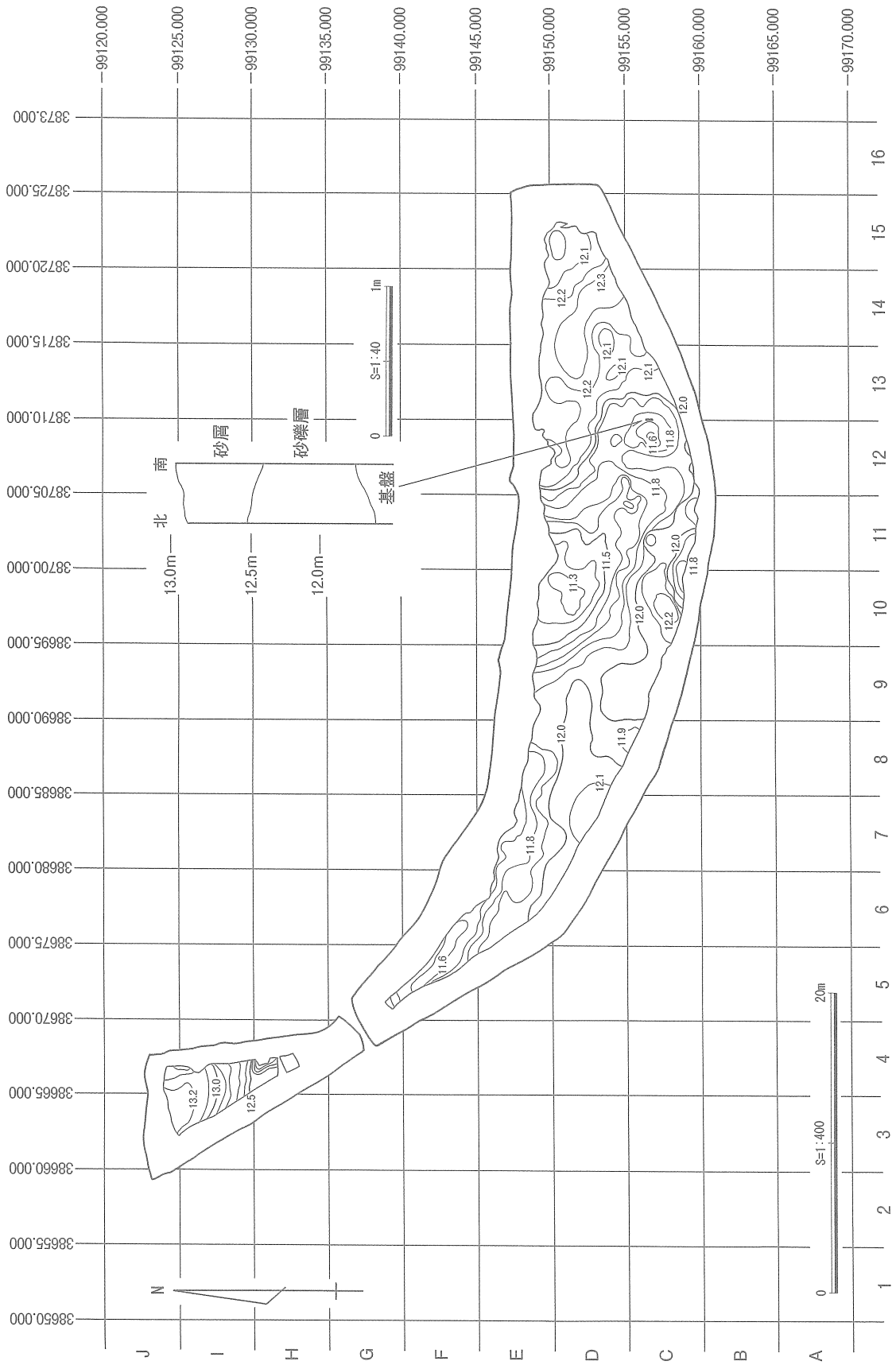
また、一部の遺物について、グリッド・層位別一括取上を行った。

最終掘削面の写真測量による標高図作成と空中写真撮影は、株式会社フジヤマに委託した。

写真撮影は、現地調査では、35㎜判小型カメラでカラーネガを、６×７判中型カメラで、モノクロとカラーリバーサルフィルムを使用し、資料整理では、遺物の撮影に６×７判中型カメラで、モノクロとカラーリバーサルフィルムを、４×５判大型カメラでカラーリバーサルフィルムを使用した。


N
御殿川
崖線
平成15年度
三島市調査
平成17年度
三島市調査
平成10年度研究所調査
平成10年度研究所調査
平成17年度研究所調査
平成17・18年度研究所調査
崖線
平成21年度研究所調査
0
S=1:2500
100m

第２図　調査区位置図



第３図　グリッド配置・土層柱状図

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

静岡県東部、伊豆半島の本州付け根の西方に当たる、北西側を愛鷹山、東側を箱根山、南側を静浦山地によって囲まれた、黄瀬川・狩野川下流域に広がる平野の形成経過は、およそ現沼津市東部から三島市街地南部付近、西走する狩野川の南北で二分される。

北側は、三島・沼津平野と通称される地域の東部に当たり、愛鷹山・箱根山間の谷に富士火山溶岩（三島溶岩流／約１万年前）が流れ込んだのち、縄文海進・海退を経て、富士山体崩落により発生した火山砂礫層（御殿場泥流／約2,900年前）の被覆により形成された扇状地（三島扇状地）である。

南側は、田方平野または、狩野川平野と通称され、縄文時代前期の海進時に入江（古狩野湾）であった地域が、海退後に天城カワゴ平火山の降下軽石及び火砕流に由来する軽石質砂層によって埋められた谷底平野である。

堆積が先行した三島扇状地の南端部は、静浦山地の手前まで延び、これに行く手を阻まれる形で狩野川の流れは、静浦山地に寄り添いながら、北上から西走へと方向を変化させ、三島溶岩流が形成した台地端部より湧出する富士山の伏流水や箱根山を源流とする小河川との合流を重ね、静浦山地の北側で、南下して来る黄瀬川と合流したのち、静浦山地北西麓を廻り込むようにして駿河湾に注がれる。

富士山伏流水の湧出地である菰池を起源として、三島市街南部に相当する扇状地上を南東方向に蛇行を繰り返しながら走る御殿川は、狩野川の一次支川である大場川へと合流する。

御殿川の中・下流域では、蛇行流路の消長により開析谷が形成され、一部段丘が発達している。その内側の谷底平野部には、砂・砂礫質の氾濫物が堆積している。

青木原遺跡は、この狩野川二次支川の中流域蛇行帯の左岸で、西方向へ半島状に突出する微高地を中心とした東西約240m、南北約200mの範囲に設定された埋蔵文化財包蔵地であり、今回の調査範囲は、包蔵地南部の流路に接地する河岸部が対象となった。

なお、青木原遺跡の北西と南東側には、御殿川蛇行により広く形成された谷底平野が広がっている。北西側の西大久保遺跡では、埋没河道方向に重なる畦畔が検出され、御殿川の流水を利用した初期の農業生産域の状況が確認されている。青木原遺跡は、最も開析幅の小さい地点の北側に位置し、対岸側（南側）は、岬状に突出した微高地となっていて、二つの谷底平野の連続を分かつ地形になっている。

第２節　歴史的環境

箱根西麓の裾部に沿って南流する大場川は、三島市北部に位置する青木橋付近より、西側へ派生川が分岐している。現在その上流部は、涸谷になっているが、途中、湧水や工場排水を集め、大場川本流と同様に狩野川へ合流している。この狩野川一次支川は、現在、境川と呼称され、その東西で表面水田条里の方向が異なることなどから、旧駿河・伊豆２国の境界と目されている。

駿東・伊豆北地区において、旧石器・縄文時代遺跡の立地は、三島溶岩流・御殿場泥流の被覆により下層の状況が不明な地域を除き、縄文海進による冠水影響を受けていないと目される、富士・愛鷹・箱根山丘陵部に集中する。

三島扇状地上に認められる明確な人間の生活痕跡は、弥生時代中期に遡る。当該期の遺物出土例は、多数認められているが、明確な遺構としては、境川左（東）岸の長伏遺跡で当該期の住居跡を１軒検出

国土地理院発行　1：25,000地形図　みしま（静岡２号-1）使用

第４図　周辺遺跡分布図

1	青木原遺跡	11	猪追面遺跡	21	平田前田遺跡
2	伊豆国分寺跡	12	茶臼山遺跡	22	金沢遺跡
3	芝本町遺跡	13	御園川遺跡	23	手乱遺跡
4	三嶋大社・塔ノ森廃寺	14	壱町田遺跡	24	鶴喰広田遺跡
5	三島御殿跡	15	道下遺跡	25	中島Ｂ遺跡
6	三島代官所跡	16	西大久保遺跡	26	桶田遺跡
7	市ヶ原廃寺	17	奈良橋向遺跡	27	長伏遺跡
8	上才塚遺跡	18	柳添遺跡	28	向山古墳群
9	谷田天台遺跡	19	蔵地原遺跡	29	上阿弥陀遺跡
10	源平山遺跡	20	青木Ｂ遺跡	30	中島遺跡

しているほか、御殿川中流西岸に位置する青木Ｂ遺跡で１基、下流東岸の中島Ｂ遺跡上舞台地点で６基の方形周溝墓が検出されているにすぎない。

弥生時代後期に入り、平野部での当該期の遺物出土地点は、中期と同様、多数認められる。明確な住居跡の検出は、境川流域で、清水町瀬戸川遺跡（24軒）、岩崎屋敷跡（３軒）等の例が挙げられる。御殿川流域では、現在のところ、中島Ｂ遺跡上舞台地点（２軒）のみである。三島扇状地の周辺で住居跡を検出する確実な集落遺跡は、三島市谷田押切遺跡（２軒）・夏目木遺跡群（２軒）、函南町向原遺跡（３軒）・伊豆逓信病院遺跡（４軒）など箱根西麓丘陵上に集中している。

墓域については、青木Ｂ遺跡で１基の方形周溝墓が検出し、また、平成17・18年の青木原遺跡の調査でも弥生時代後期～古墳時代前期に比定される方形周溝墓が３基検出されており、御殿川を挟んだ、南北での展開が認められる。

古墳時代に入り、集落の展開は、大きく変化する。古墳時代前期に比定される住居跡を検出する遺跡は、箱根西麓丘陵部（夏目木遺跡群７軒、伊豆逓信病院遺跡９軒）のみならず、大場川・御殿場川間でも広がりを見せる（中島Ｂ遺跡上舞台地点１軒・金沢遺跡10軒・壱町田遺跡１軒・西大久保遺跡で弥生時代末から古墳時代初頭に比定される住居14軒）。

古墳時代中期以降の集落立地は、狩野川本流北岸部にも拡大する反面、箱根西麓では、現函南町の「平井の台地」と通称される地域に限定される。

湧水源流が集中する溶岩台地末端部で、現三島市街中心地に当たる箇所（御殿川西岸側）に奈良時代、国分寺が建立され、政治的位置関係上、この近隣に伊豆国庁が存在していたと想定されている。

しかし、古代の寺院・官衙関連遺跡は、大場川・御殿川間（御殿川東岸側）に集中を見る（市ヶ原廃寺、塔ノ森廃寺、上才塚遺跡）。現在もここに三嶋大社より南側へ旧下田街道が延びており、古代以降、この地域の重要な交通起点の一つとなっていたことは、状況的に明らかである。

近世に入り、御殿川上流部と西側に流れるその支流を跨ぐ形で、三島宿が整備される。東海道以南で宿場から近隣の村落部は、半径1.5km程度の環状に並んだ配置を見せている。青木原遺跡は、三島宿から見て、その近世村落配置の内側に位置するため、狩野川からの背水影響を考慮しなければ、この時代に比定される御殿川漂着物の供給は、ほぼ三島宿内と旧下田街道沿線に並んでいた町屋からの投棄物に限定される。

第３節　基本土層

今回の調査対象区は、流水量の変化により、浸食と堆積が繰り返された御殿川氾濫原内に当たる。

表層は、堤防構築用盛土であり、その下の一部に水田床として搬入・敷設されたとみられる粘土が続く。これより下層に位置する、御殿川旧河道は、砂・砂礫層によって埋められ、これを除去すると堅く締まった褐灰色を呈する三島扇状地の基盤を形成する火山砂礫再堆積層（通称マサ）が表出する。

遺物は、いずれも、砂・砂礫層中より出土しているが、それぞれの年代観は、層序の上下に対応しておらず、細片化し、表面に流磨痕が観察される土器が多数あり、増水に伴う流路の変更や底部攪拌に伴い、二次堆積が繰り返されて来たことが分かる。

包含層最上位は、一部に礫を含む黒色砂を主体としており、近世・近代以降の河道を埋めている。中位以下の砂礫層は、平面上、分離困難で、重複が予想される旧流路の把握は、出来なかった。

包含層最下位の砂礫層中には、玄武岩質の小児頭大から径１ｍに達する亜円礫・岩が多く含まれる。湧水部の三島溶岩流の端部が崩落・流下したものと推定される。下流の鶴喰広田・手乱遺跡河岸部の堆積層中から、これだけの大きさのものは、検出されていない。

第Ⅲ章　遺構と遺物

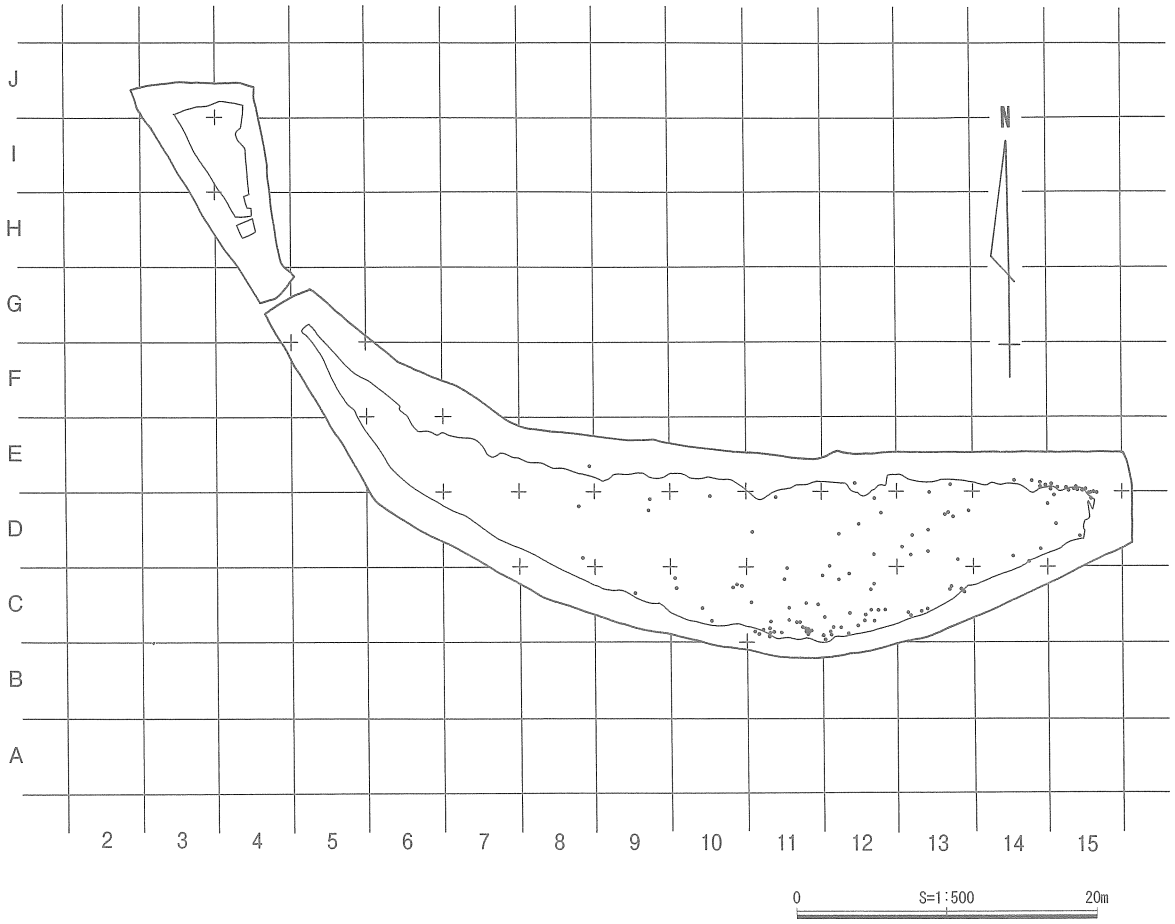
第1節　遺　　構

近世・近代の杭列（第5図）

今回の調査区内では、最終堆積砂層下に、合計183本の丸太材の打設が確認された。いずれも先端部を尖らせた杭で、一部、腐食防止のため焼いているものも認められた。

検出高がほぼ等しく、見掛け上、列を成す群もいくつかあり、旧御殿川流路の河岸部に設定された護岸・整流用の杭列と目されるが、これらの具体的な組み合わせや、新旧について、判断する材料を得ることが出来なかった。頻繁な流路変更に伴い必要に応じて杭打設が繰り返された結果とみられる。

杭が打設されていた砂礫層中に近世の陶磁器が含まれ、護岸客土が盛られる以前のものであることから、帰属時代は、近世・近代に比定される。



第5図　近世・近代杭配置図

第２節　遺　　物

今回の青木原遺跡の調査区は、旧河道埋没部に相当し、その遺物包含層の上・中位は、幾度も河川浸食と再堆積を繰り返している。出土する遺物の多くが、川中で転回して細片化し、表面も摩滅している。遺物の様相は、一部の完形品や残存率の高い品、重量物を除いて、御殿川上流沿岸部の古人の活動の反映と捉えられる。

以下、包含層中より出土した土器、瓦、石器・石製品、金属製品、木製品、種子類について、その内容を記載する。なお、動物遺体の詳細については、59頁からの付編２を参照されたい。

⑴　土　器

１　縄文土器・弥生土器・土師器・中世素焼土器（第６～10図１～95／第１表／図版３～８）

１～95は、縄文時代から中世に比定される酸化焼成された土器である。

１は、縄文時代中期後葉に比定される、曽利Ⅰないし Ⅱ式土器の深鉢胴部片である。器面は、半截竹管内皮を用いた縦方向の条線文が施された後、隆帯を貼付けている。年代的に三島・沼津の現平野部が形成される以前の遺物である。青木原遺跡東方の箱根西麓に位置する縄文遺跡からの流れ込みは、大場川によって遮断されるため想定し難いので、現三島市北部、萩・徳倉付近に占地していた縄文遺跡が2900年前の富士山体崩落に伴い発生した御殿場泥流により破壊され、流出してきたものと考えられる。

２～38は、弥生時代～古墳時代前期に比定される、弥生土器・土師器の壺である。

２は、弥生時代中期以前に比定される、器面を条線調整した壺の胴中位～底部で、胎土には、多量の花崗岩片が含まれており、比較的薄手で、硬く焼き締まっている。

３～５は、弥生時代中期に比定される壺で頸下位～胴上位に文様帯を持つものである。３は、２段の文様帯が残存し、上段は、原体ＬＲ単節縄文を横方向に施文、下段は、沈線によって互い違いの重三角区画し、逆三角形区画側に刺突文を充填している。４は、原体ＬＲ単節縄文を横方向に施文した後、沈線で多段に区画し、１段の縄文を磨消す。１は、原体ＬＲ単節縄文を施した後、沈線で枠状の区画をし、外枠区内に流水文を施し、内枠内を磨消している。

６は、広口壺の口縁部で内面側に連弧文を施文する。７・８は、いずれも網代痕が残る底部である。９～11・33・34は、弥生時代後期に比定される、頸下位～胴上位に羽状縄文・擬似羽状縄文の文様帯が設定される壺である。９・34は、撚りの方向の異なる縄文原体を平行して器面に押し当て、羽状縄文帯をつくる。９は、縄文原体の端部を結節している。10・11・33は、ハケ工具先端を段別に傾きを変え連続刺突し、擬似羽状縄文帯をつくる。33・34は、円形の粘土板を文様帯に貼付ける。

32は、頸下位～胴上位に文様帯を持たない壺で、外面は、丁寧に磨かれている。

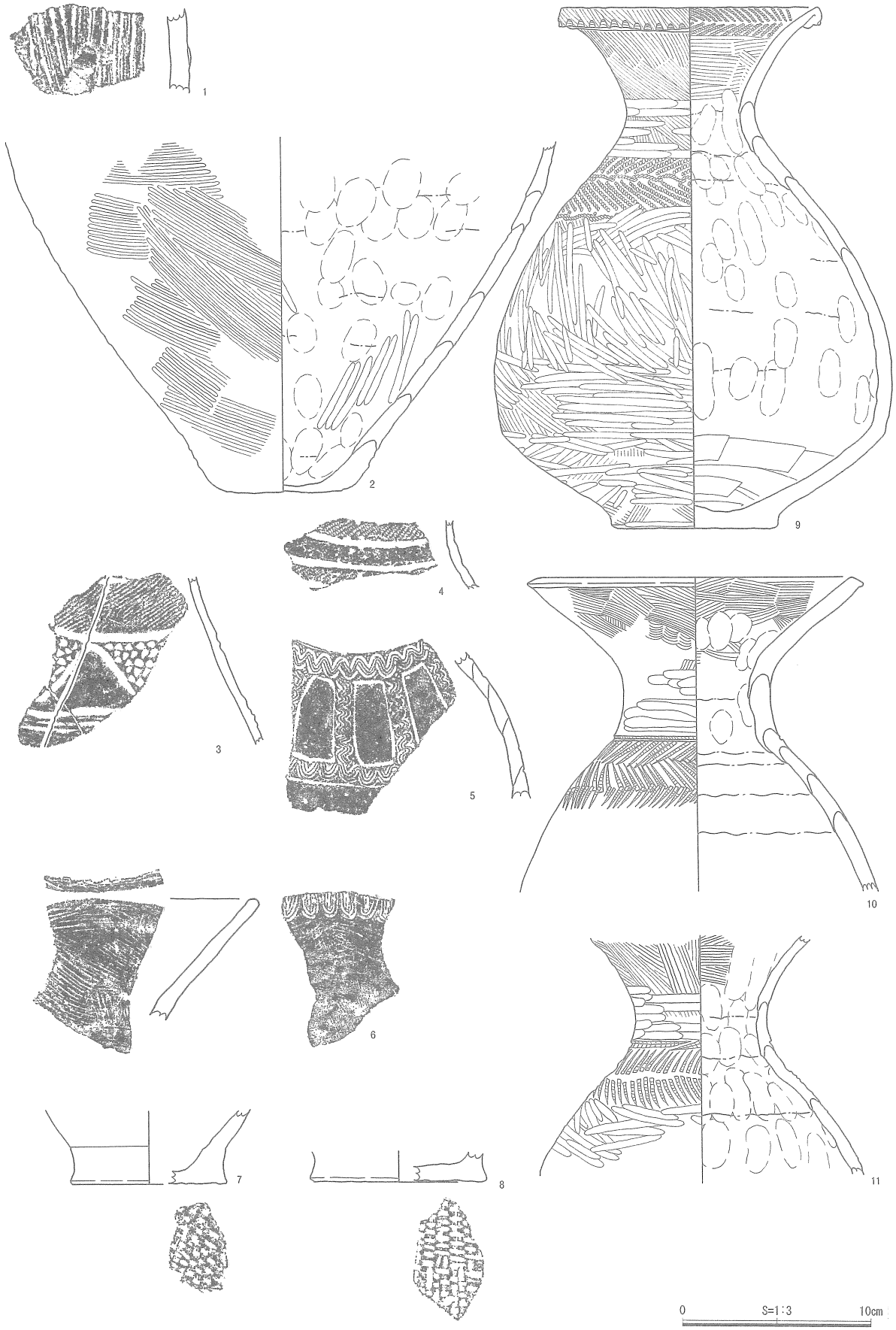
12は、直口壺の口縁部である。９・13～19は、折返口縁壺である。９・18・19は、外縁部にハケ工具先端による連続刺突が施されている。９・14・16・17は、縄文による文様帯がつくられる。17は、短突帯が貼付けられる。20は、折返部の断面形が三角形を呈す。

なお、９は、ほぼ完品の状態で出土しており、表面に流磨痕も観察されない。今回の調査の出土土器の内、埋没後、原位置を移動していないとみられる数少ない資料である。

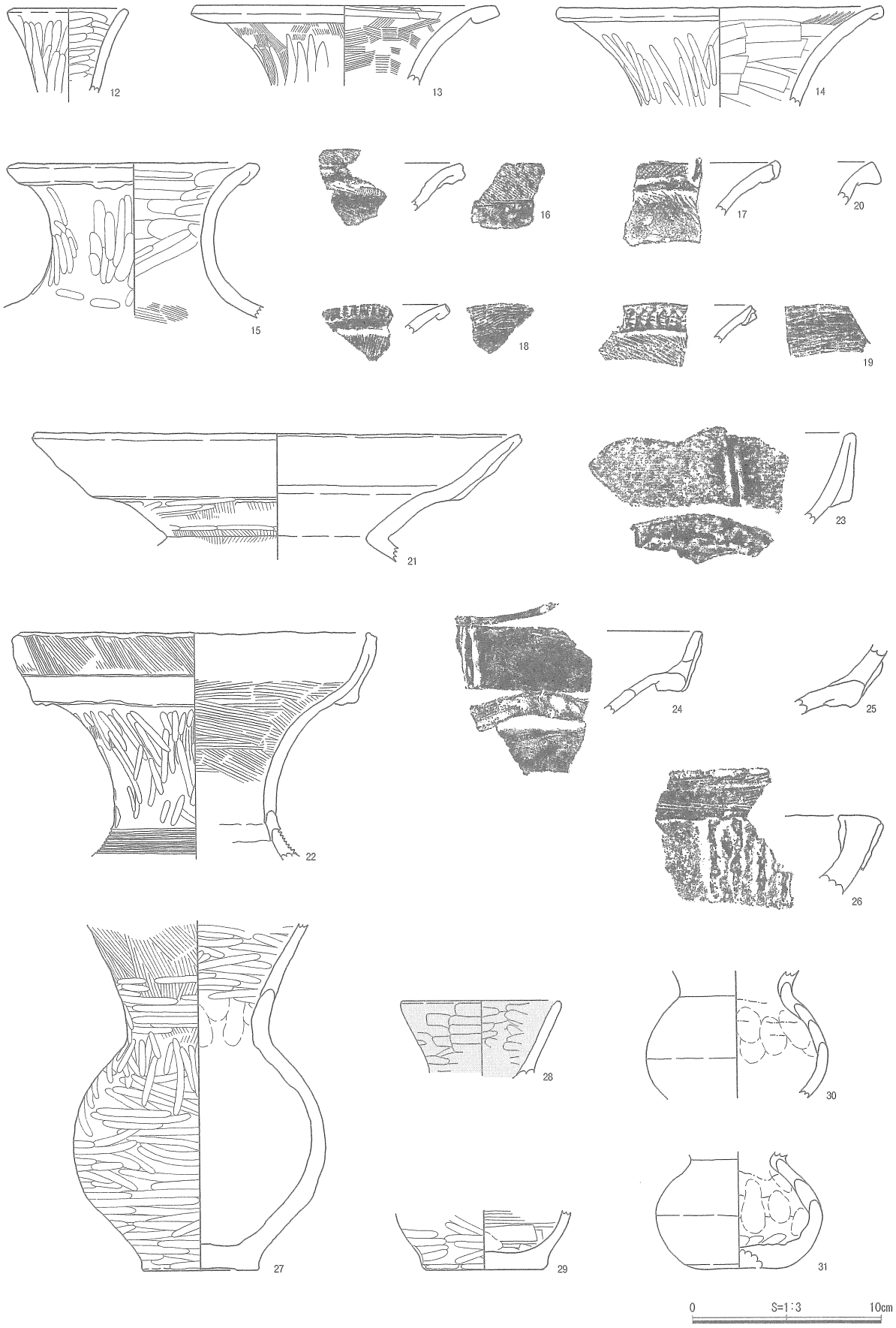
21～26は、複合口縁壺の口縁部である。断面上の観察より、21～23は、口縁部の外側に粘土を貼り合わせ、肥厚させたつくりなのに対し、24・25は、折返口縁の上に筒型の口縁部を積み上げたつくりになっている。21の口縁部は、大きく広がり、26の口唇部は、内側に突出する。23～26は、断面三角形の突帯が縦方向に貼付けられる。

27は、比較的小形の壺である。外面は、ハケ調整の後、丁寧に磨かれている。

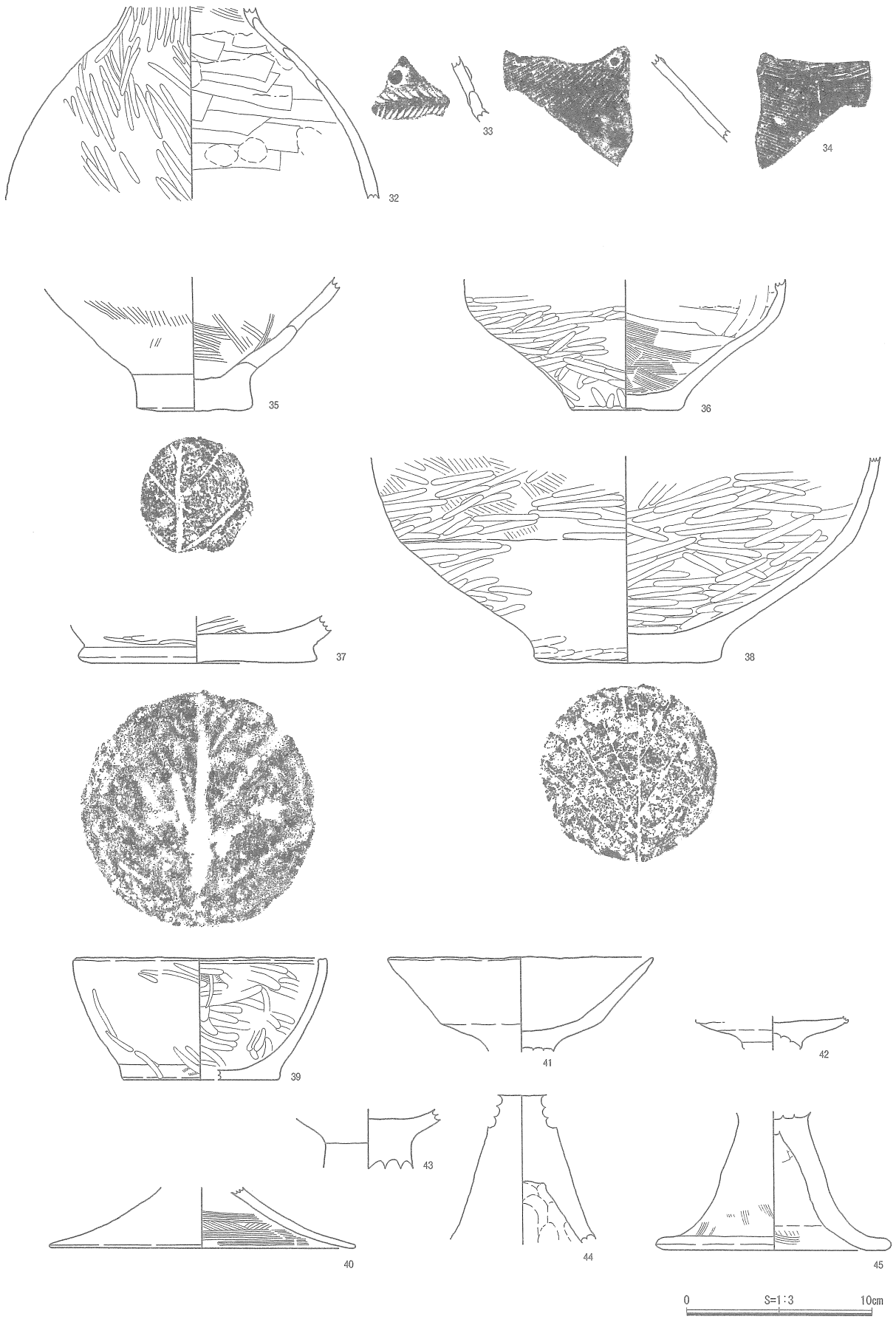
28～31は、小型壺である。28は、直口縁、29は、底部、30・31は、やや扁平な胴部を残す。



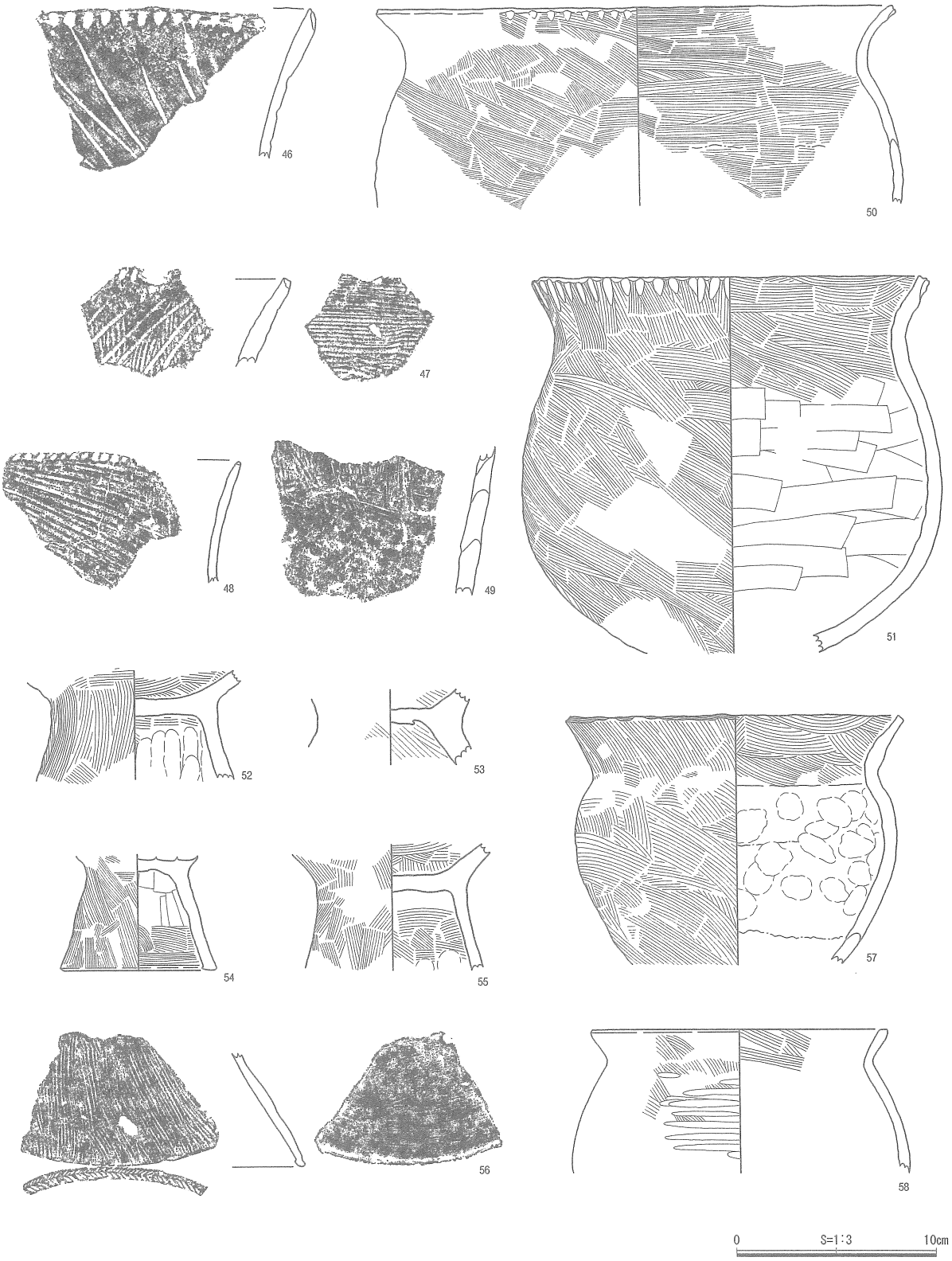
第6図　出土遺物実測図（土器1）



第７図　出土遺物実測図（土器２）



第8図　出土遺物実測図（土器3）



第９図　出土遺物実測図（土器４）

35～38は、壺の胴下位～底部である。35の胴部最大径は、比較的高い位置にあり、36・38は、胴下位に屈折部を持つ。35・37・38の底面には、木葉痕が残る。

39は、鉢である。内外面ともにミガキ調整がされ、口唇部は、内側に若干突出する。

40～45は、高坏である。41は、坏の下位に屈折があるもの、42は、坏内底が比較的平坦なものである。40は、裾が下に広がる脚部、45は、下位にゆるやかな屈折が認められる脚部である。

46～66は、弥生土器・土師器の甕類である。

46・47は、斜方向の沈線文が外面に施される。48は、比較的薄手硬質なつくり、49は、肥厚なつくりになっている。

52～55は、台付甕の甕底～台上位を残すもので、外面は、縦方向のハケ調整と共通するが、台上位内面の調整方法が、52は、指ナデ、54は、ヘラナデ、53は、縦方向、55は、横方向のハケ調整と違いがある。56は、台部で、下端部は、羽状の連続刺突がされ、内側に若干突出する。

50・51・57は、残存率が比較的高い台付甕の口縁～胴部部分である。それぞれ外面縦・斜方向のハケ調整、口縁内面横方向のハケ調整と共通するが、胴内面の調整は、50が横方向のハケ、51が横方向のヘラナデ、57が指ナデ調整と異なる。

58は、外面に横方向のミガキ調整が施された甕である。

59・60は、S字口縁甕で、いずれも薄手硬質な作りである。

61～63も薄手の甕の口縁部である。61の頸部は、横方向のハケメを施文した後、間隔を空け、縦方向に短くハケメ施文を行っている。61・62は、外反し、63は、直に広がる器形をしている。

64・65は、口縁下位～頸部が最も厚くなる甕である。64の頸部内面は、内側に強く突出し、65のそれは、緩やかである。

66は、上端面が広く、比較的平坦で、外側に突出する、いわゆる清郷型の甕の口縁部である。

67～78は、土師器の坏である。67～71は、内湾する口縁部で、67は、下位に向かって体部が窄まり、68は、口唇部が直立し、71は、外面で凹部が一周する。70は、内面に赤色顔料が塗布されている。これらは、古墳時代後期～古代初期に比定される。

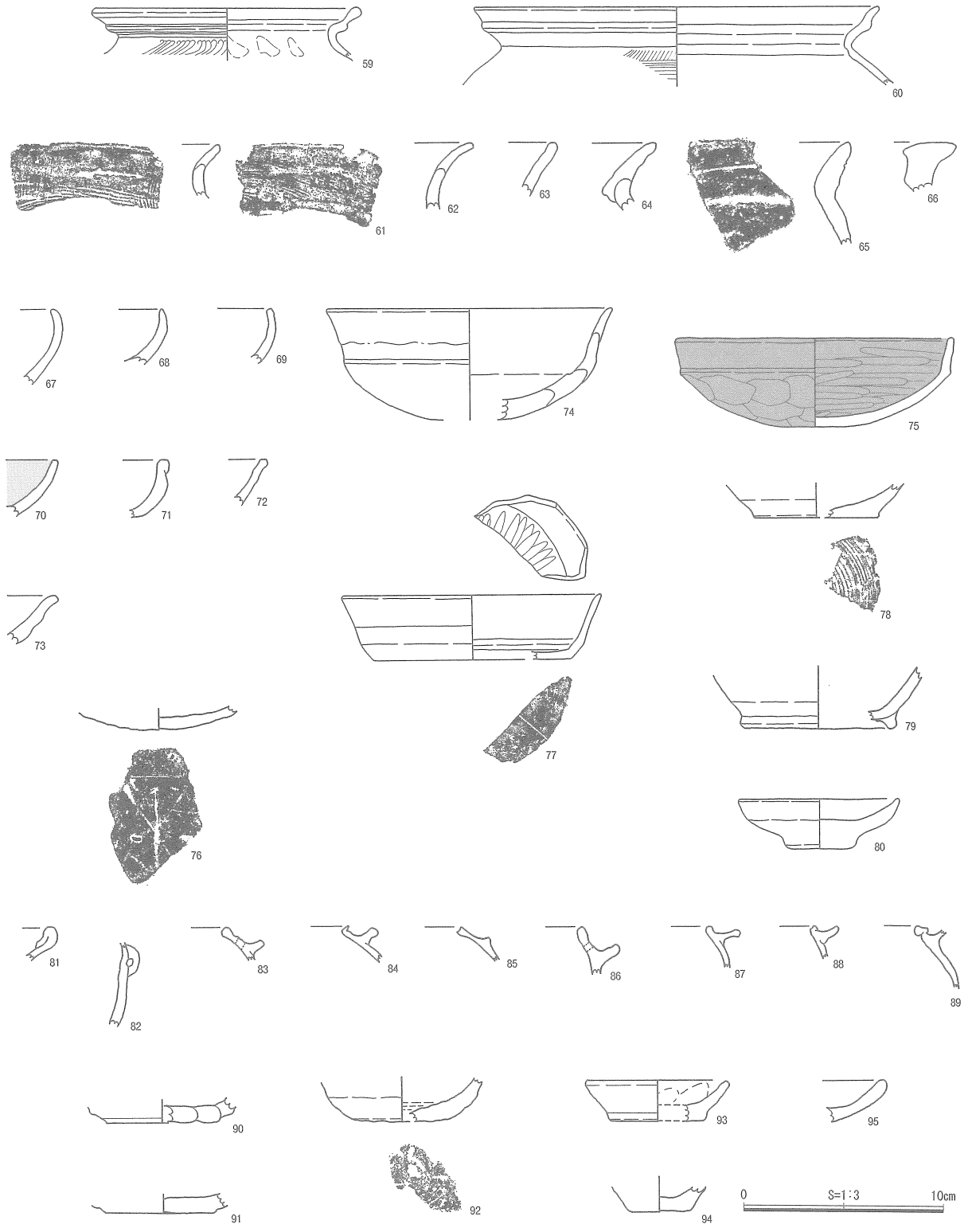
74は、丸底の模倣坏で、口縁部が外反するが、流磨のため、表面の細かい調整は、捉えられない。75は、ヘラケズリで形作られた丸底の坏で、内面は、丁寧に磨かれている。全体的に黒色処理が施されている。76も丸底の坏であるが、底面に木葉痕を残す。

72は、直に広がり、73は、内湾しつつ、口唇部は、外反する坏口縁で、古代の製品に比定される。77は、焼成の良好な箱形の坏で、底内面には、放射状に暗文が描かれている。78は、底面に回転糸切痕が残る坏で10～11世紀代に比定される。

79は、高台付坏または、碗である。80は、柱状高台である。

81～89は、中世の煮沸具で、81は、堝の口縁、82は、堝の耳、83～89は、羽釜の口縁～羽部である。いずれも器壁は、薄くつくられ、色調は、灰白色系である。

90～94は、いわゆるかわらけの皿類で、90は、粘土紐の巻き成形が観察される。92～94は、轆轤成形されたとみられる製品である。95は、口縁部片であるが、口唇部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたことが分かる。



第10図　出土遺物実測図（土器５）

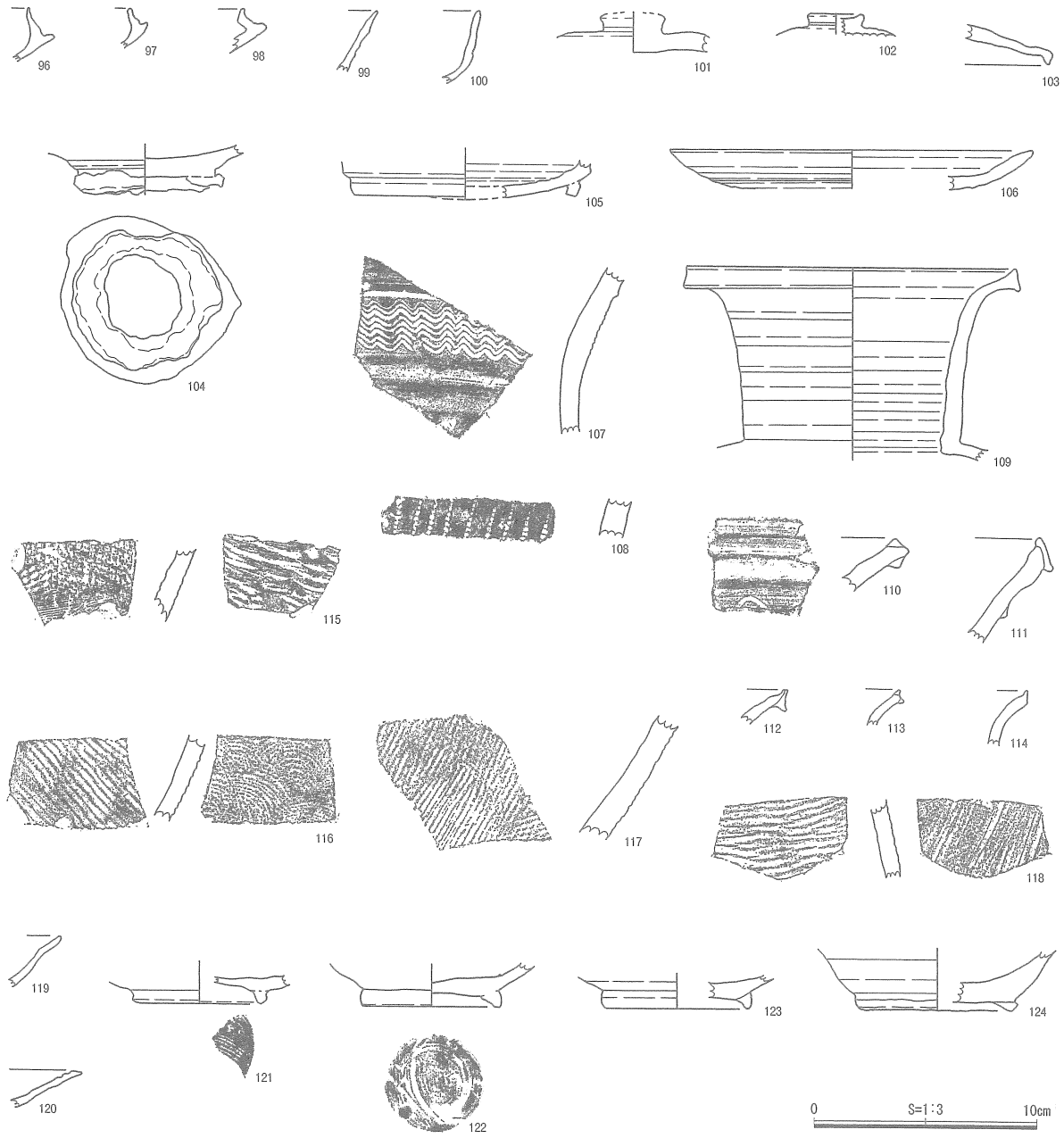
2　須恵器・灰釉陶器・山茶碗（第11図96～124／第２表／図版７）

96～124は、須恵器とその系統の窯内焼成土器である。

96～100は、須恵器の坏の口縁部片である。96～98は、蓋の受け口が作られ、99は、体部から直に広がる口縁、100は、体下位が若干脹らむ器形である。

101・102は、坏蓋の摘み部である。101は、扁平な宝珠形、102は、凹形を呈する。103は、坏蓋の縁部である。

104は、平底の坏の底部で、窯内で用いられた輪ドチが融着したままの製品である。輪ドチの下位は、引き剥がされた破損面が認められる。105は、底部が高台よりも下に突出する高台付坏で、年代的に７世



第11図　出土遺物実測図（土器６）

紀末～８世紀初頭に位置付けられている。106は、残存部位の水平軸の傾きから皿と判断した。

107～114は、壺または、甕の口縁・頸部片である。107・110の頸部には、流水文が、108には、列点状の連続刺突が施されている。

115～118は、大型の壺または、甕の胴部片であり、各々、外面にタタキ目が残っており、115・116の内面には、青海波文、118の内面には、ヘラナデ調整が確認される。

119～123は、灰釉陶器である。119は、碗、120は、皿の口縁部である。121～123は、断面三日月形の高台を持つ碗の底部である。121・122の底面には、回転糸切痕が残る。

124は、山茶碗である。比較的厚手で、低い高台が貼付けられる。断面より観察される胎土は、粗い。

３　輸入磁器・炻器・瓦器・国産陶磁器・土製品（第12図125～168／第３表／図版８～14）

125～134は、中世輸入磁器である。

125は、青白磁の合子蓋で、天井と体部の上下２段に蓮弁文が巡る。

126・127は、白磁の端反碗で、各々体上位内面に126は、１条細沈線が巡り、127は、細櫛掻文が施される。いずれも12世紀後葉の製品である。128は、白磁の口禿碗で、口唇部は、最外縁とそれに直角に重なる内側の２面分が面取され、釉が外されている。13世紀後半～14世紀前半の製品である。

129～134は、いずれも龍泉窯系青磁製品である。129は、体下位に屈折部がある。本来、見込に劃花文が入る皿で、12世紀後葉に比定される。130は、鎬蓮弁文碗で、13世紀中葉～14世紀前葉。131は、外面に、134は、内面に蓮弁文が施される折縁皿で、13世紀後半～14世紀前半。132は、内面に蓮弁文が施される盤の口縁、133は、底・高台部で14世紀代に比定される製品である。

135～141は、中世常滑産炻器である。比較的粒径の大きい長石、石英を胎土に含む。

135・136は、壺または、甕の口縁部で断面N字形を呈す。135は、６ａ型式（中野1994以下同じ）、136は、９型式に比定される。137は、大型甕の胴部片で、外面には、格子状のタタキ目、内面は、ヘラナデ調整が認められる。138は、玉縁状に折返し、下端を摘み出した、壺の口縁部である。10型式に比定される。139・140は、片口鉢の口縁、141は、底～高台部に当たる。

142は、瓦器の火鉢または、香炉である。外面に連珠・菊花の印文が施される。

143～159は、中近世瀬戸・美濃系陶器である。

143は、削出高台の皿で、外面の一部に灰釉が付着する。144・145は、折縁皿で、内外面ともに灰釉が塗布される。145の内面には、蓮弁文が施されており、大窯第４段階に比定される。

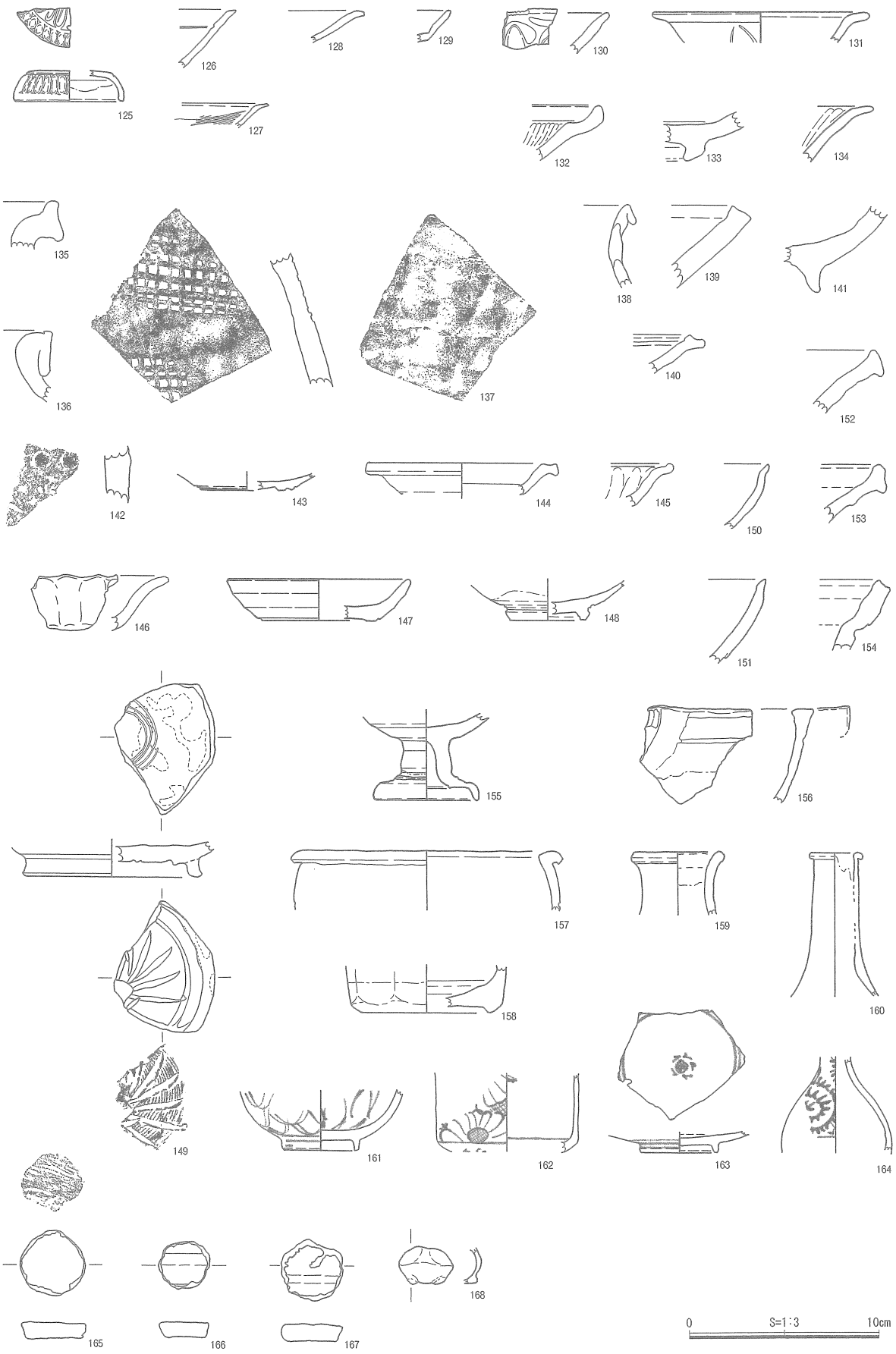
146・147は、厚く長石釉（志野釉）が塗布された皿類で、146は、菊皿、147は、丸皿である。148は、内底面に幅９㎜程度を環状に残し、灰釉を塗布した輪禿皿である。いずれも17世紀代に比定される製品である。

149は、底～高台部が残存する陶器で、底内面に同心円状の沈線文が施され、灰釉が塗布されている。底外面には、回転糸切痕が残り、焼成前にヘラ状工具で放射状の刻みが入れられる。貼付高台で、胎土は、須恵質であるが、具体的年代は、特定出来ない。

150・151は、天目茶碗である。いずれも内外面に鉄釉を厚く塗布する。

152～154は、擂鉢の口縁部である。152・153は、大窯期、154は、18世紀後半に比定される。155は、仏餉具である。藁灰釉が塗布される。18世紀前半に比定される。156は、18世紀後半に比定される片口、157は、19世紀前半に比定される練鉢である。いずれも内外面に灰釉が塗布される。158は、八角形の香炉で、外面を面取りし、鉄釉を塗布している。159・160は、18～19世紀代の瓶の口縁～頸部で鉄釉が塗布される。

中近世瀬戸・美濃系陶器は、このほかにも、各種皿類（縁釉皿・端反皿・折縁皿・卸皿・灯明皿）、



第12図　出土遺物実測図（土器７）

碗（天目碗・腰錆茶碗）壺・花瓶、鉢類が、また、近世肥前系陶器（三島手の鉢）も少数出土している。しかし、器形などの内容を十分に復原出来るだけの情報を持たない小片がほとんどであり、図示に耐えられないため、代表的なものを集合撮影して図版掲載した。

161～164は、近世肥前系磁器で、いずれも染付である。161は、外面に二重の網目文が描かれた丸碗で、17世紀中葉以降に比定。162は、外面に菊花文が描かれた筒型の湯呑み用碗、163は、見込に中央に退化した五弁文が入れられる底面が比較的平坦な碗、164は、外面に蛸唐草文が描かれた瓶で18世紀後半～19世紀に比定される製品である。

165～167は、土器片の周囲を研磨して円盤状に加工した土製品である。165は、弥生土器または、土師器を、166・167は、内外面ともに鉄釉が塗布された陶器（擂鉢？）を素材としている。

168は、近世に比定される人形とみられる土製品の一部である。全体的に中空に形成し、脚と目される小突出部を設けている。

(2)　瓦（第13図169～178／第４表／図版９・14）

169は、古代の軒丸瓦である。山田寺系の蓮華文軒丸瓦の一部で、残存する瓦当中央部は、厚く（最大厚37㎜）、中房は、２段ある。大振りな蓮子の配置は、１＋６と推定され、市ヶ原廃寺出土の三重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦（８世紀前半に比定）と近似している。

170～177は、古代の平瓦である。いずれも凹面に布目痕を残し、174～177の凸面は、正格子叩きで成形されている。

これら古代瓦の胎土含有物には、カワゴ平パミスとみられる軽石粒が認められ、内部の焼成色調が橙色系を呈する個体も多数ある。その特長から、生産地は、現伊豆の国市に所在していた花坂瓦窯群と推定される。

178は、近世・近代とみられる軒丸瓦である。瓦当部の文様は、連珠文と巴文から成る。

(3)　石器・石製品（第14図179～187／第５表／図版３・８・14）

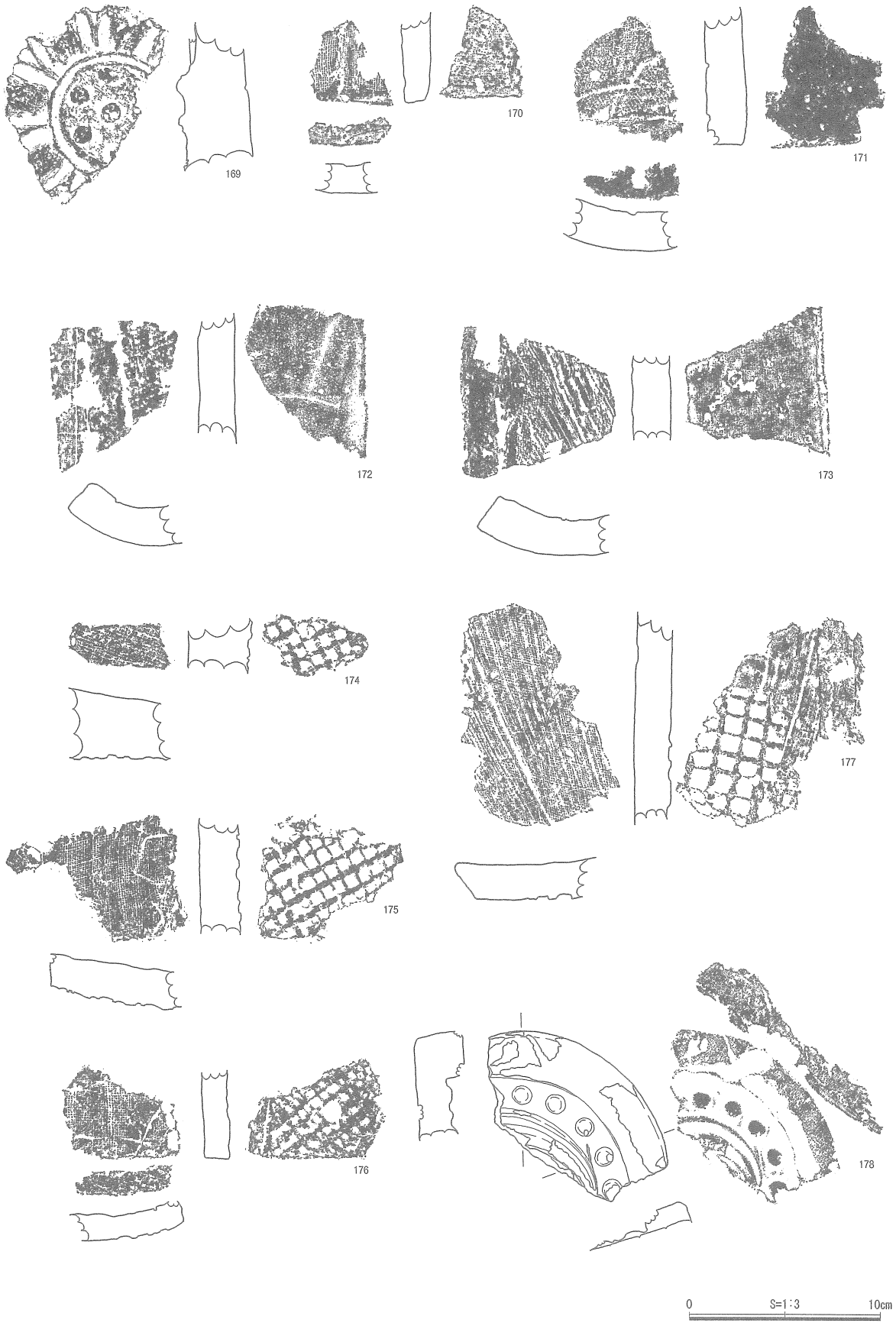
179は、輝石安山岩円礫を、180は、閃緑岩円礫を素材とした敲石である。それぞれ端・縁辺部に敲痕が並ぶ。弥生時代の所産か。

181は、滑石製の石製模造品である。円板に加工した後、２箇所を回転穿孔する。182は、碧玉製の管玉である。古墳時代の製品である。

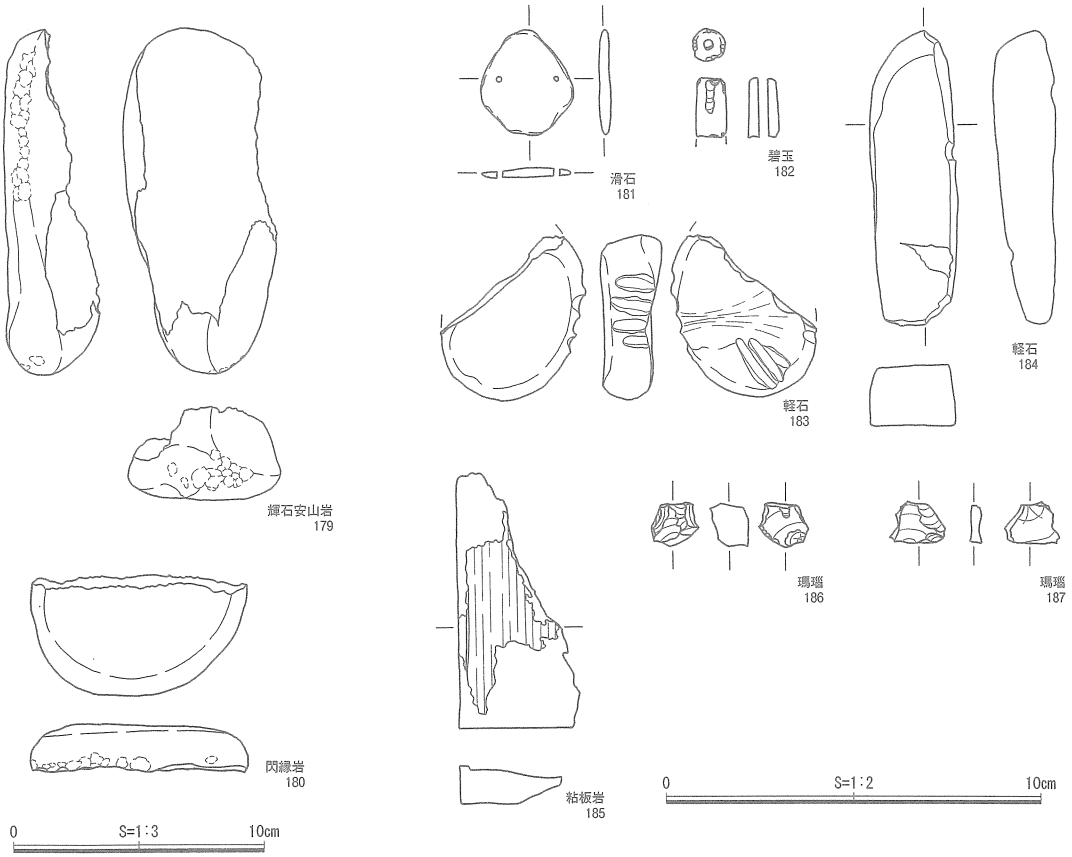
183・184は、軽石製の砥石である。183の複数面に棒状の擦痕（石材切り出しの際の楔痕か）が認められた。片側平面が使用に伴う消耗で、浅いＶ字形を呈している。184もまた、側面に１箇所、棒状の擦痕がある。全面を使用面とし、鰹節形を呈している。185は、粘板岩製の硯である。186・187は、瑪瑙製の火打石で、どちらも多方向からの打痕が認められ、消耗・欠損し、小形化している。これらは、近世・近代の製品とみられる。

(4)　金属製品（第15図188～193／第６表／図版２・３・14）

188は、小銅鐸で、突線鈕式銅鐸の小型品または、模倣品と考えられる。計測値は、高さ126㎜、鈕高28㎜、舞部の長径34㎜、同短径25㎜、最大幅69㎜、裾部短径39㎜である。鐸身の正面は、舞から裾に向け直線的に開く。鈕は、兜形を呈し、計５条の突帯が表現される。鈕から裾部下端部まで鰭が連続する。鐸身の上半部と裾部に表裏各々、２孔１対ずつ（計８箇所）長方形の型持孔が設定されるが、Ａ面左下側の型持孔は、孔型が残るのみで開いていない。裾部外面に横位の綾杉文の文様帯が１条巡る。裾部の内面には、断面蒲鉾形の突帯が１条巡る。全体的に薄い作りになっており、製作の際の湯流れが不充分



第13図　出土遺物実測図（瓦）



第14図　出土遺物実測図（石器・石製品）

のため、発生した「緩」、「抜け」部分が複数箇所確認される。今回の調査区の東部（C-14グリッド北西。検出標高12.250m）の砂礫層下位（包含層最下位）より出土したが、周辺に掘り込み・落ち込み等は、確認されなかった。

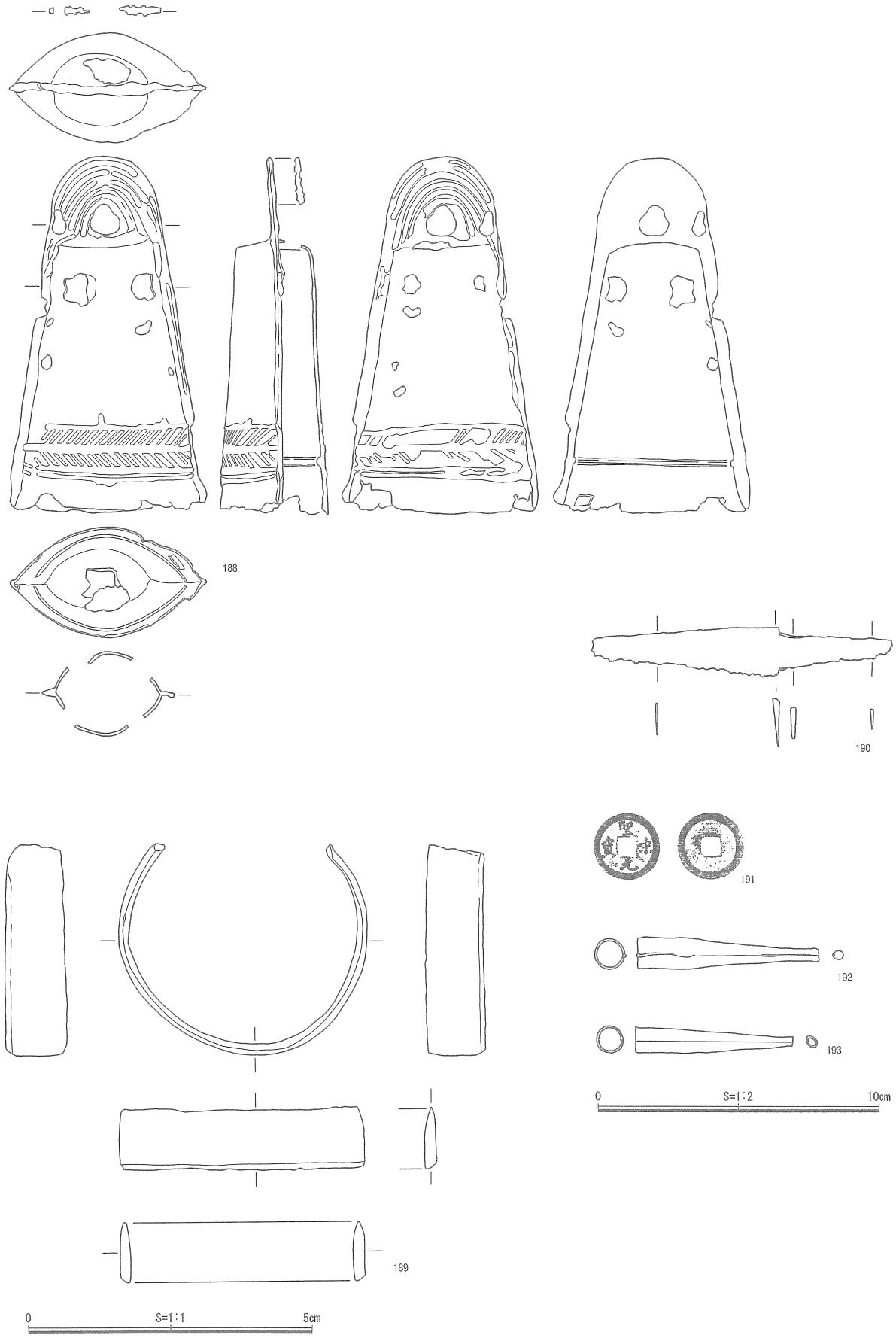
189は、帯状円環型銅釧の再加工品である。推定径65㎜程度の帯状円環型銅釧をほぼ半分に切断した後、その片方を大きく３箇所で屈折して、あらためて環状に加工する。銅帯端部には、切り離し時に生じた角縁の折曲が確認される。銅帯の断面は、楔形で、幅10㎜、厚さ２㎜、展開長は、108㎜を測る。小銅鐸から北東側に5.7m離れた（現御殿川流路下流側。D-15グリッド北西。検出標高12.316m）同層位中より出土した。

188・189の帰属時代については、同一層中より出土している残存率の比較的高い土器から判断し、弥生時代後期～古墳時代前期とする。

190は、鉄製の刀子である。

191は、中世渡来銭貨の聖宋元寳である。初鋳年は、北宋の建中靖国元（1101）年であり、銭銘は、行書体である。

192・193は、真鍮製の煙管の吸口である。両者とも内部に炭化した羅宇の一部が残存していた。193の銜え部分が前歯の噛み潰しに起因するものか、横断楕円形に変形している。近世･近代に比定される。



第15図　出土遺物実測図（金属製品）

(5)　木製品（第７表）

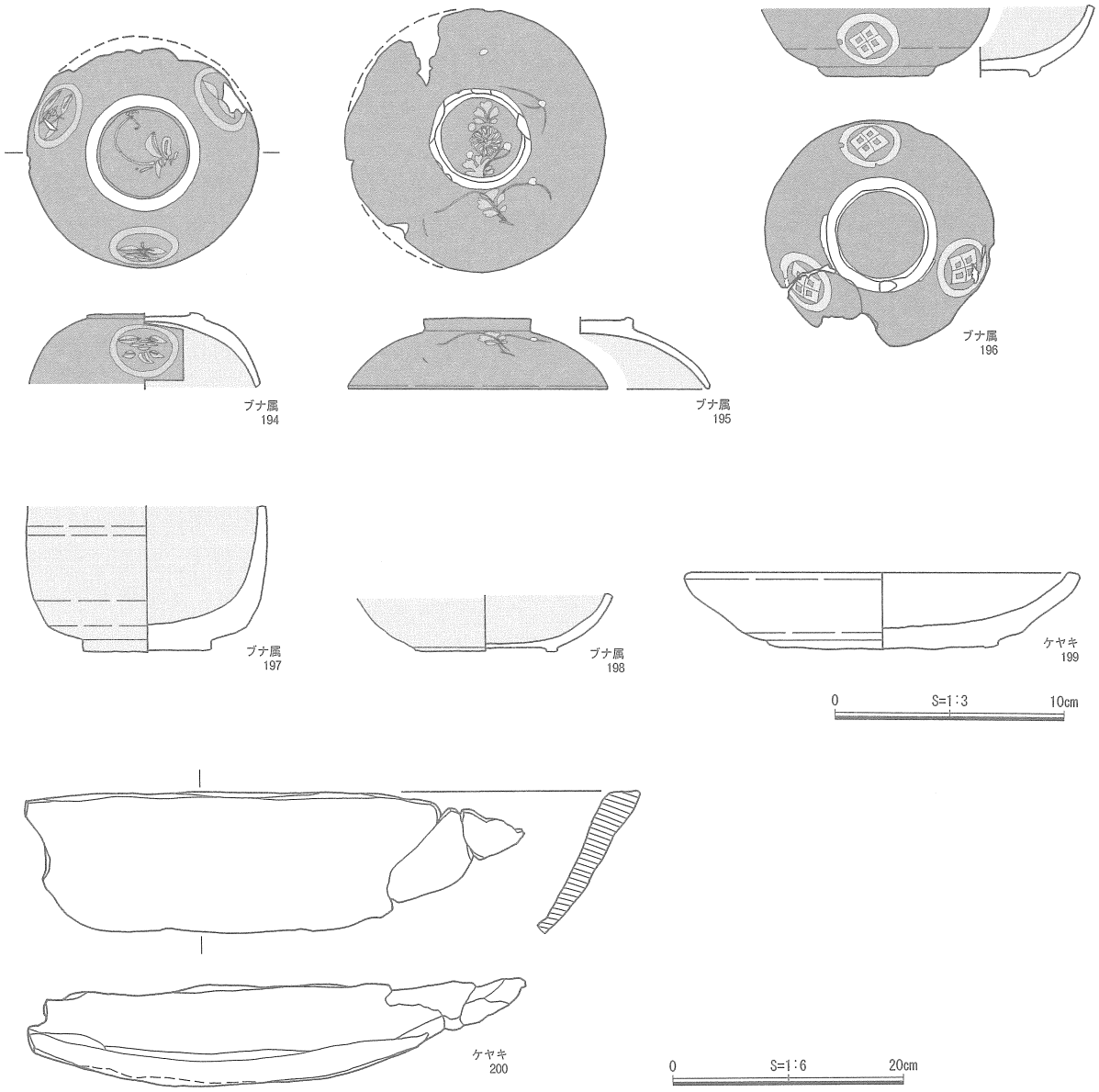
今回調査では、打設されていた部材（杭）を除いた木製品の多くは、御殿川増水後の滞水部に溜まった漂着物とみられ、調査区南部の最終堆積砂層中より集中して出土した。出土状況から、帰属時代は、近世・近代に比定される。

箸、栓、円板類を始めとして、欠損品を含め、大量の出土を見ており、遺存状況の良好である代表的なものを選別して掲載した。図示した資料75点の素材樹種の詳細とその分析については、45頁からの付編１を参照されたい。

１　容器（第16図194～200／図版15・16）

194～198は、漆塗容器である。全て素材の樹種は、ブナ属で、木取りは、横木取りである。

194・195は、漆塗椀蓋である。194は、内面に赤色、外面に黒色の漆が塗布される。把手見込（頂部）に草花、体部に３箇所、丸に橘の文様が配される。195は、内面に赤色、外面に黒色の漆が塗布され、頂～体部に渡り、花弁の芯部を赤、他を黒で、菊花葉文様を描いている。



第16図　出土遺物実測図（木製品１）

196～198は、漆塗椀である。196は、内面に赤色、外面に黒色の漆が塗布される。体部に3箇所、赤塗で、丸に四つ菱文様が配される。197・198は、内外面とも赤色の漆が塗布される。

199は、皿である。欠損しているが、高台を備えていた痕跡がある。ケヤキを素材とする。

200は、槽である。口縁上面部を広く平坦につくり、器下位になるにつれ、器厚が薄くなる刳り物である。ケヤキを素材とする。

2　食事具（第17図201～206／図版16）

201～203は、箸である。その横断面は、基～中央部は、扁平に、先端は、円に近い多角形に加工される。素材は、スギとモミ属である。

204は、やや内湾したクリの柾目取り材の加工品で、その形状から、しゃもじの可能性がある。

205は、柄杓である。柄の一部と底板は、残存していない。外面は、黒色で、漆が塗布されていた可能性がある。杓部は、ヒノキの側板を樺紐によって綴じる。側板上端部を丸く削り、注ぎ口を作っている。断面長方形の柄（トウヒ属を素材とする）は、杓側板綴口の脇のほぼ中央から斜方向に貫通させ、内側に木釘を打ち、先端を反対側の側板下位に差し込んで固定する。

206は、漆塗のサワラ素材の底板を転用した俎板である。表裏両面に無数の刃痕が刻まれている。

3　栓（第18図207～222／図版15）

207～209は、棒状の下栓である。握部の断面形は、角縁を落とした正方形で、基部も同様に角縁を落としている。栓部の断面形は、ほぼ円形で、握部根本から先端に向けて緩やかに収束して細くなる。208の先端部は、変色している。いずれもヒノキを素材としている。

210～222は、逆台形の上栓である。径2～5㎝大で、いずれも上面径と下面径の比差は、少なく筒形に近い形状をしている。比較的小形のものは、ヒノキ、大形のものは、スギが素材に用いられる傾向がある。

4　蓋板・側板・底板（第18・19図223～239／図版17・18）

223～233は、蓋板である。素材は、モミ属・サワラ・ヒノキ・トウヒ属・スギが選択されている。いずれも中央に樺紐の貫通やその穿孔等の把手を留めていた痕跡が認められる。233は、中央に木釘が打たれていた。231は、表面に焼け焦げた痕が残っていた。232は、黒色を呈しており、漆が塗布されていた可能性がある。

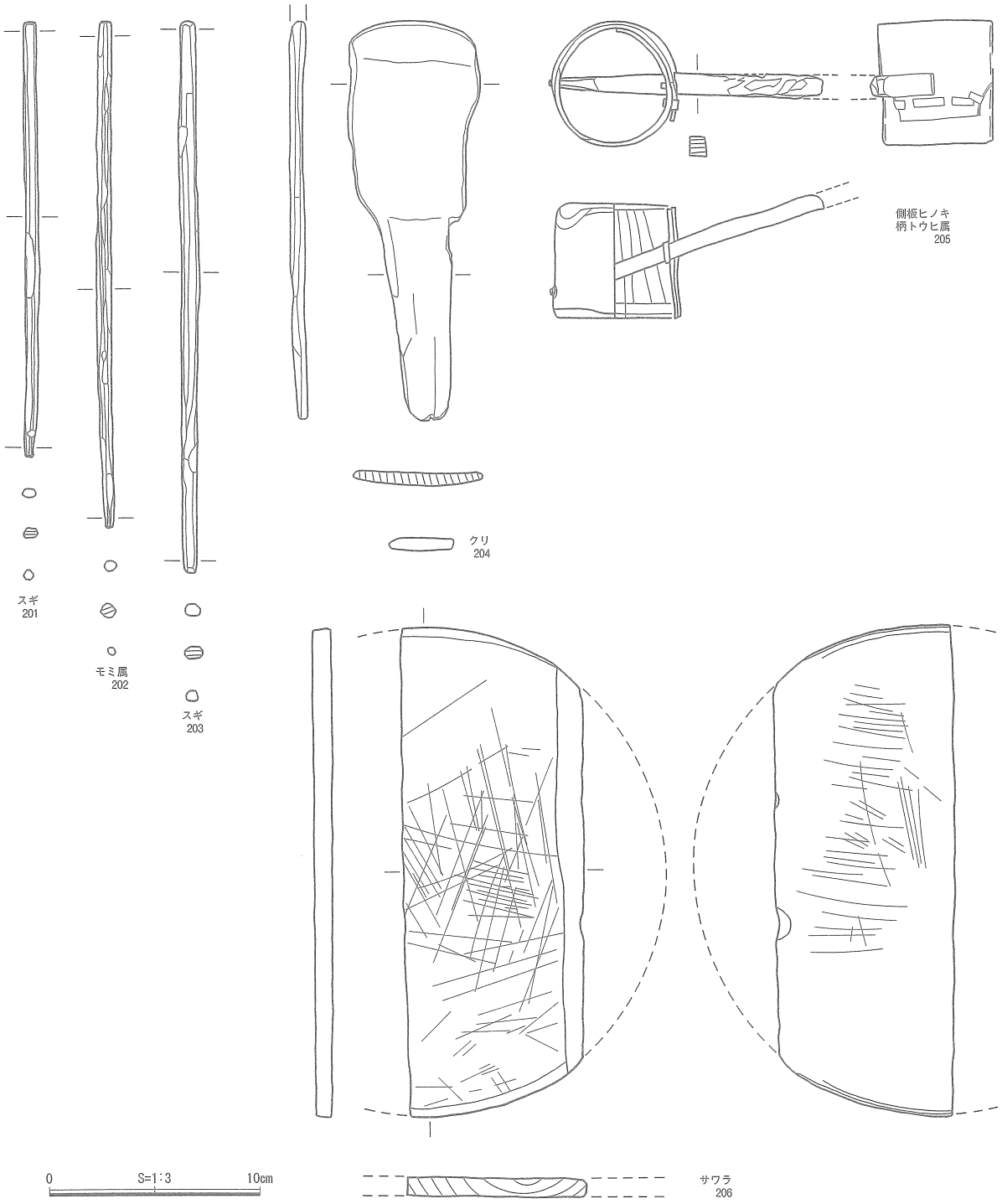
234は、桶の側板である。下端部を段状に加工する。イチイを素材とし、黒漆が塗布されている。

235～239は、桶・曲物類の底板である。素材は、モミ属・ヒノキ・トウヒ属が選択されている。238は、黒漆が塗布されている。

5　下駄（第20・21図240～248／図版19・20）

240・241は、草履下駄である。いずれも前方を厚く、後方を薄く作る。240は、中位部では、両縁から抉る加工して、横断面は、船底形を呈す。緒穴は、前に1箇所、後に2箇所設定され、上面側は、深い皿（または、薬研）状に彫り窪められている。また、後緒穴には、それぞれ、縦方向に二つの小穿孔が並び、後ろ側に木釘が残存していた。素材は、マツ属である。241は、裏面の前後緒穴間が長方形に刳り抜かれ、この部分の横断面は、凹形を呈す。素材は、クリである。右側後緒穴に鼻緒の一部である、撚られた棕櫚状の繊維が残存していた。

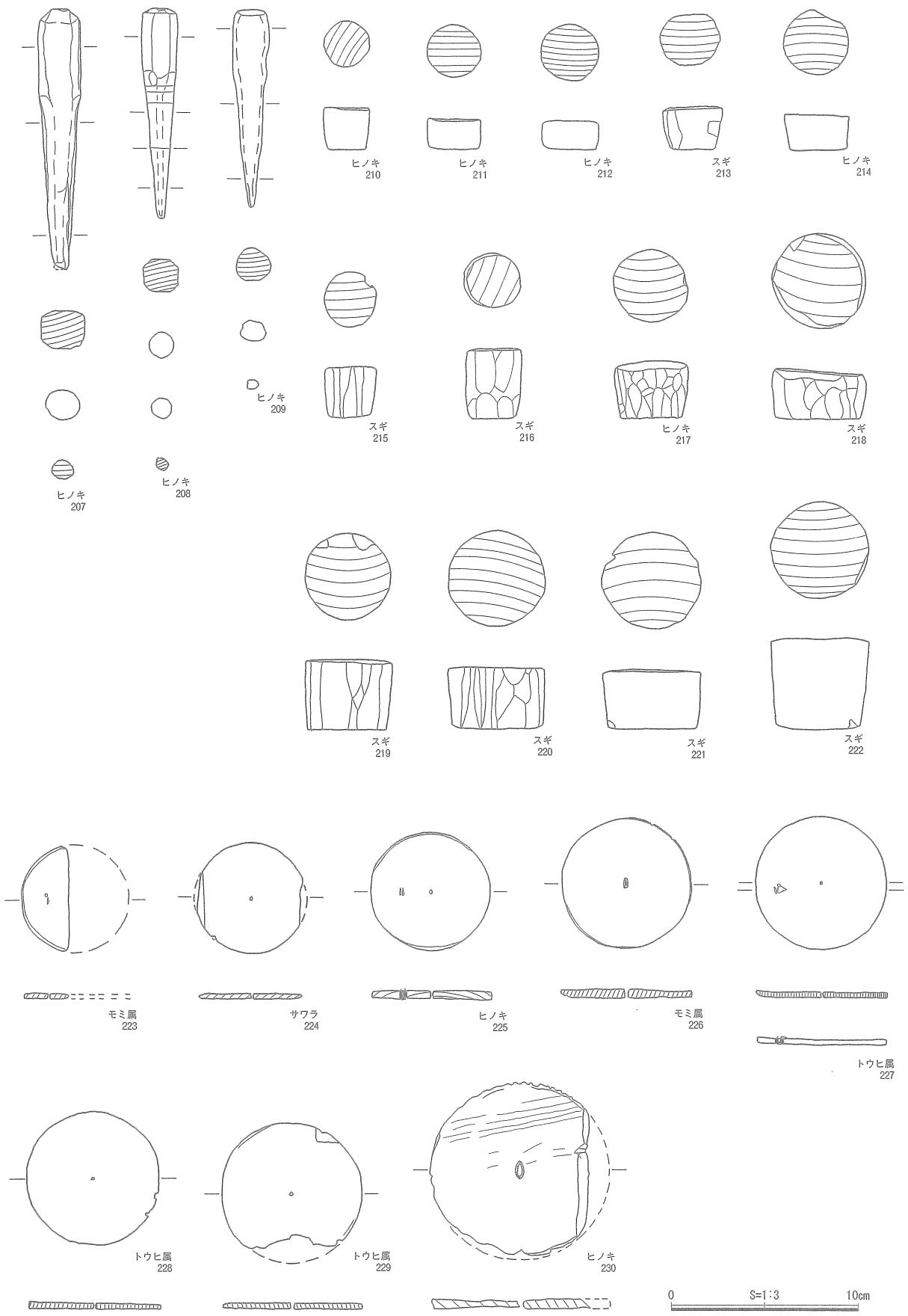
242・243は、一木作りの連歯下駄である。242は、平面楕円形を呈し、後緒穴は、後歯の前側に設定



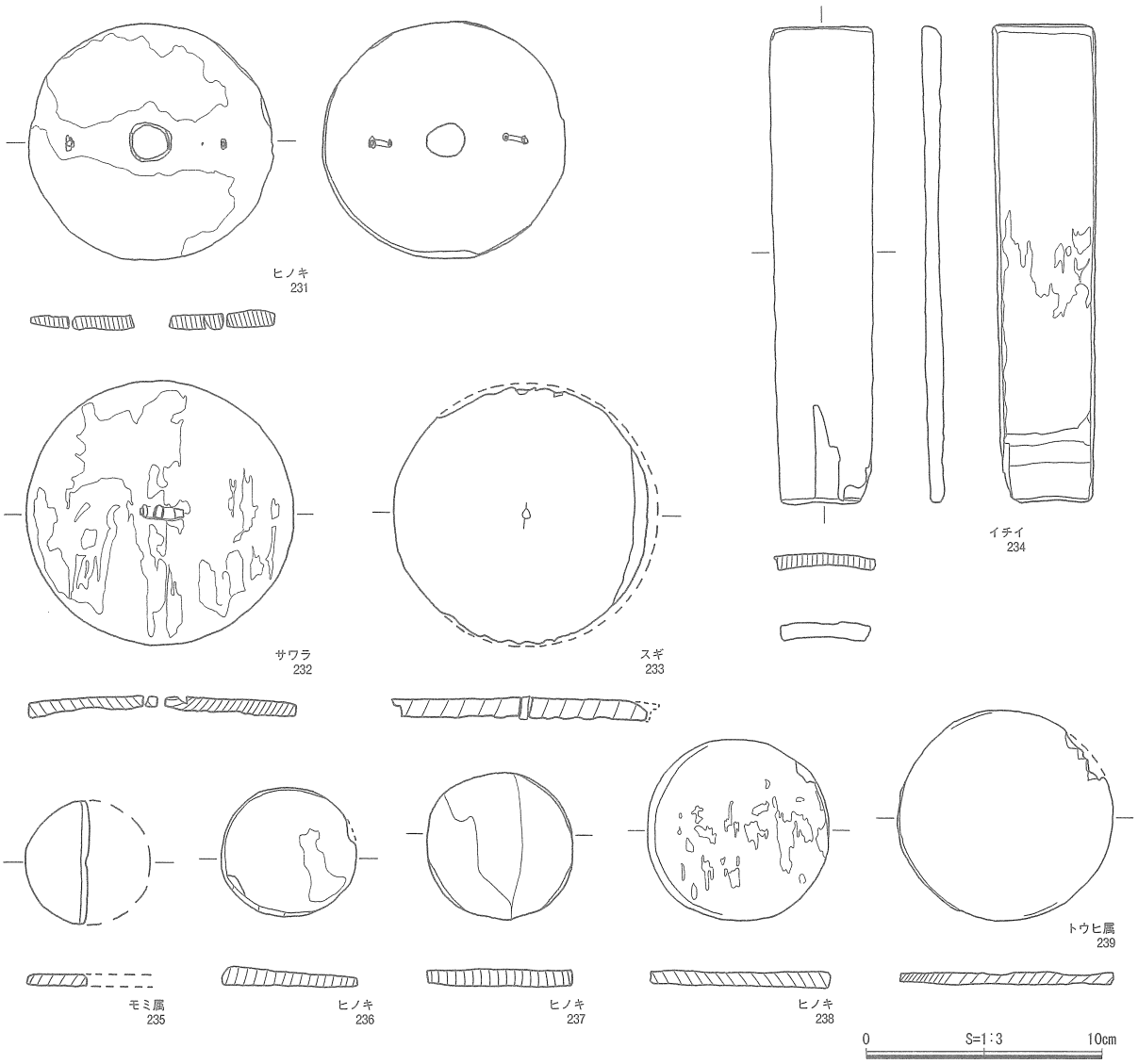
第17図　出土遺物実測図（木製品２）

されている。素材は、クリである。243もまた、楕円形を呈す。後緒穴は、後歯の後ろ側に設定されている。前・後緒穴のほか、前歯の位置する上面側より、２箇所穿孔が（片側１箇所は、未貫通）なされている。素材は、エゴノキ属である。

244～247は、いずれも本体中位の横断面形が船底形を呈す差歯下駄である。244の後緒穴は、後歯よりも前側に設定されている。前後２条の差込溝に歯が固定されており、本体に枘穴と歯に枘差込部分は、作られていない。本体・前後の歯ともに素材は、キハダである。245は、後緒穴が無い。差歯固定用の



第18図　出土遺物実測図（木製品３）

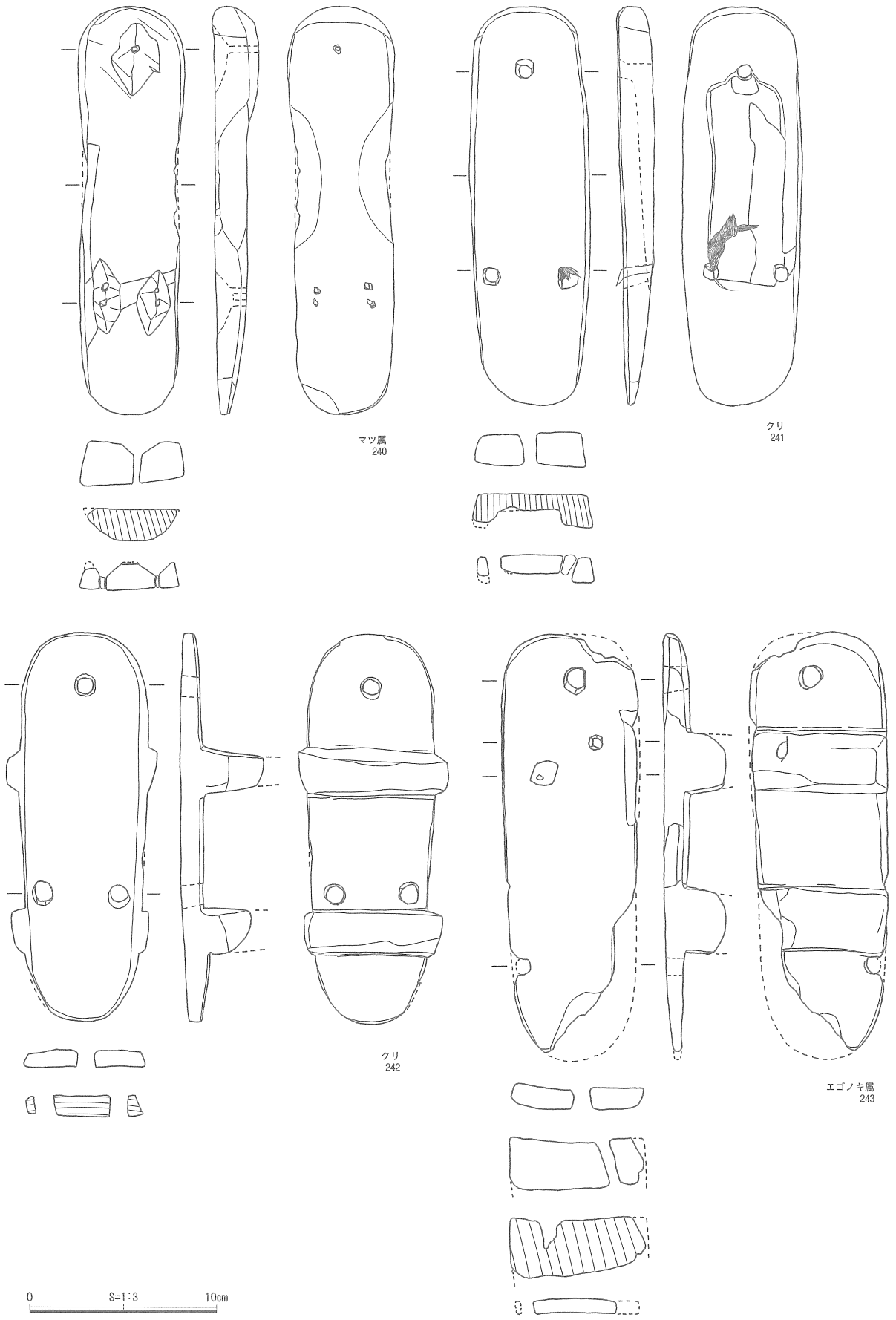


第19図　出土遺物実測図（木製品４）

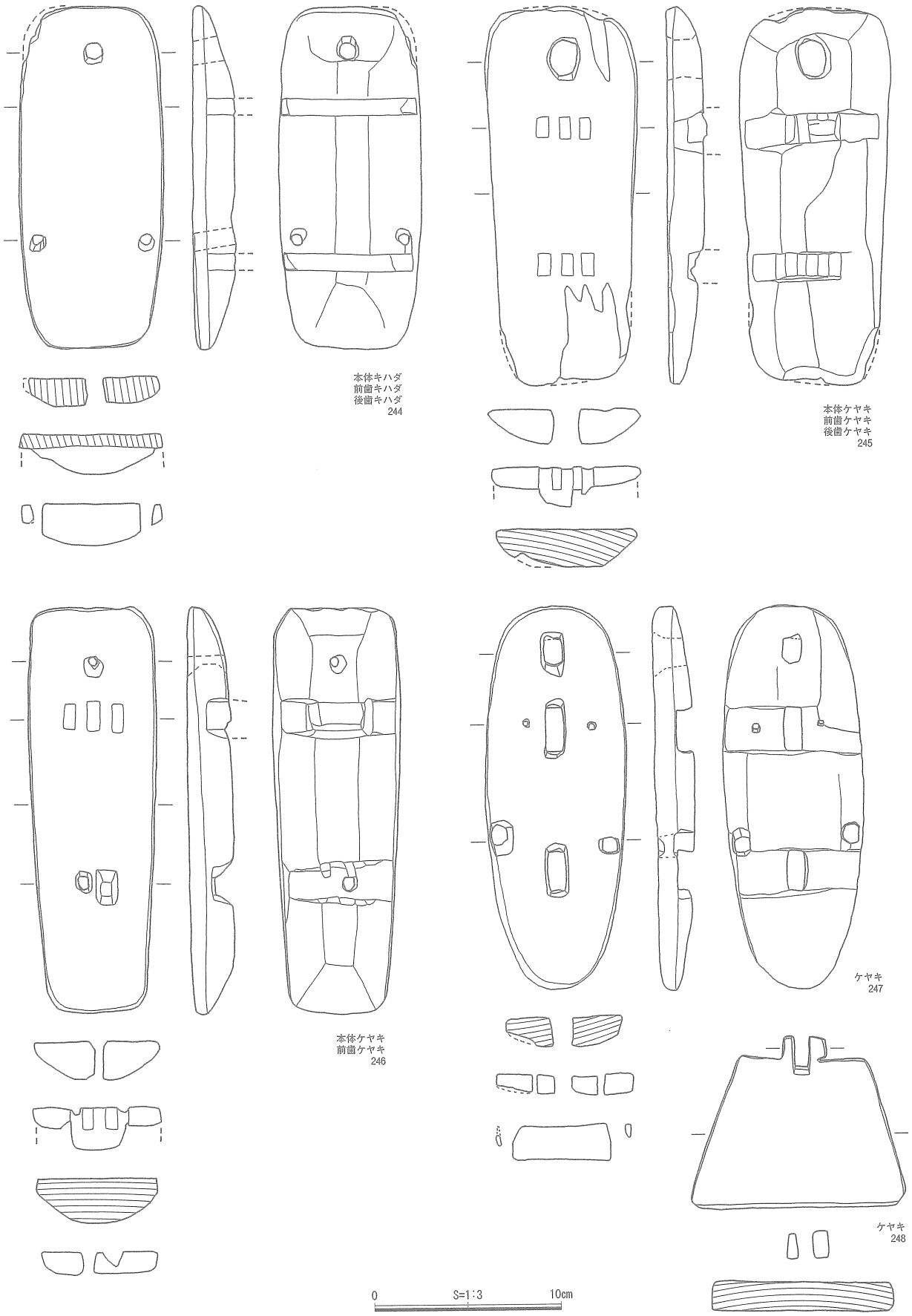
長方形の枘穴が前方３箇所、後方３箇所設定されている。本体･前後の歯ともに素材は、ケヤキである。246もまた、後緒穴が無い。差歯固定用の枘穴は、前方３箇所、後方２箇所設定されているが、後方の右側の差込孔は、未貫通である。こちらも本体・前歯ともに素材は、ケヤキである。247の後緒穴は、後歯よりも前側に設定されている。差歯固定用の長方形の枘穴が前・後方それぞれ中央に１箇所設定されており、前方枘穴の両脇に釘穴がある。歯は、前後とも残存しておらず、下駄本体の素材は、ヒノキである。248は、下駄の差歯である。上部に枘差込部分が２本作られている。素材は、ケヤキである。近代三島町は、戦後に至るまで、手工業が盛んであり、下駄・傘等の生産量が多かった。緒穴や歯固定用枘穴が開いていないケヤキ材組下駄の未製品は、御殿川上流周辺の工房で発生した失敗品廃棄物の可能性がある。

６　その他の木製品（第22・23図249～261／図版20・21）

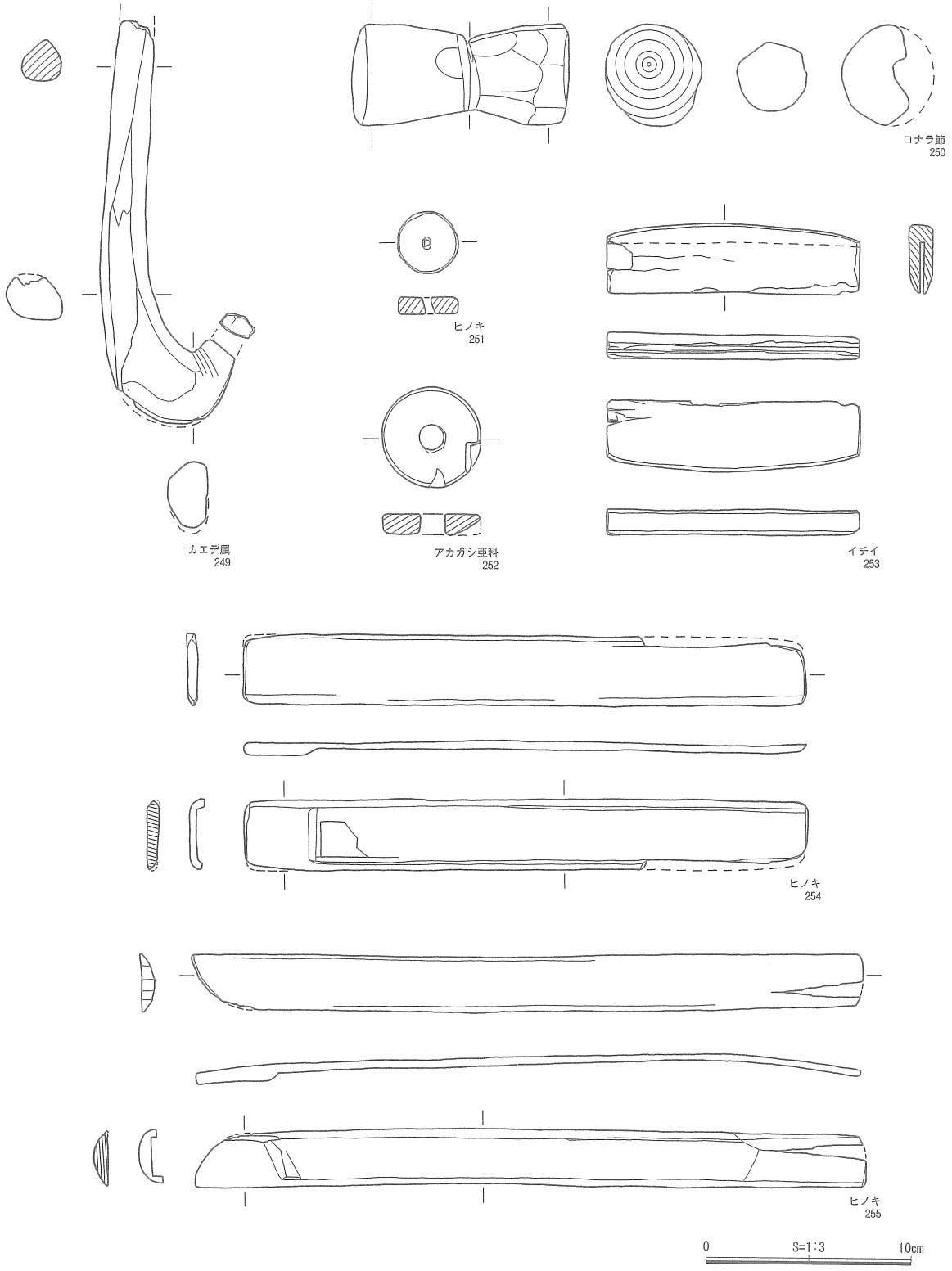
249は、カエデ属を素材とした自在鉤である。250は、コナラ節の芯持ち材を鼓形に削りだした編錘で、中央の一部に切り込みを入れている。251・252は、紡錘車とみられる中央に穿孔された厚手の円板であ



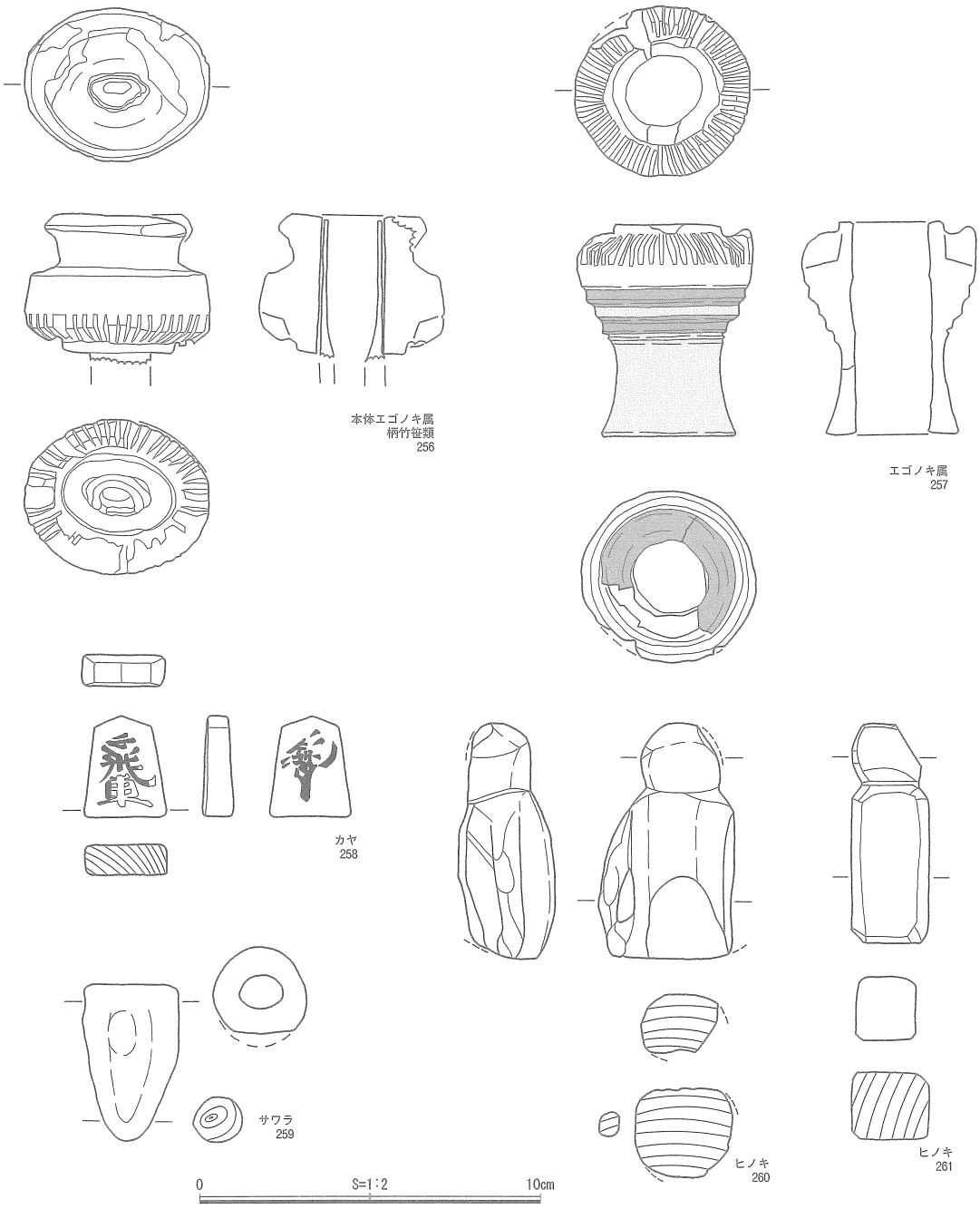
第20図　出土遺物実測図（木製品５）



第21図　出土遺物実測図（木製品６）



第22図　出土遺物実測図（木製品７）

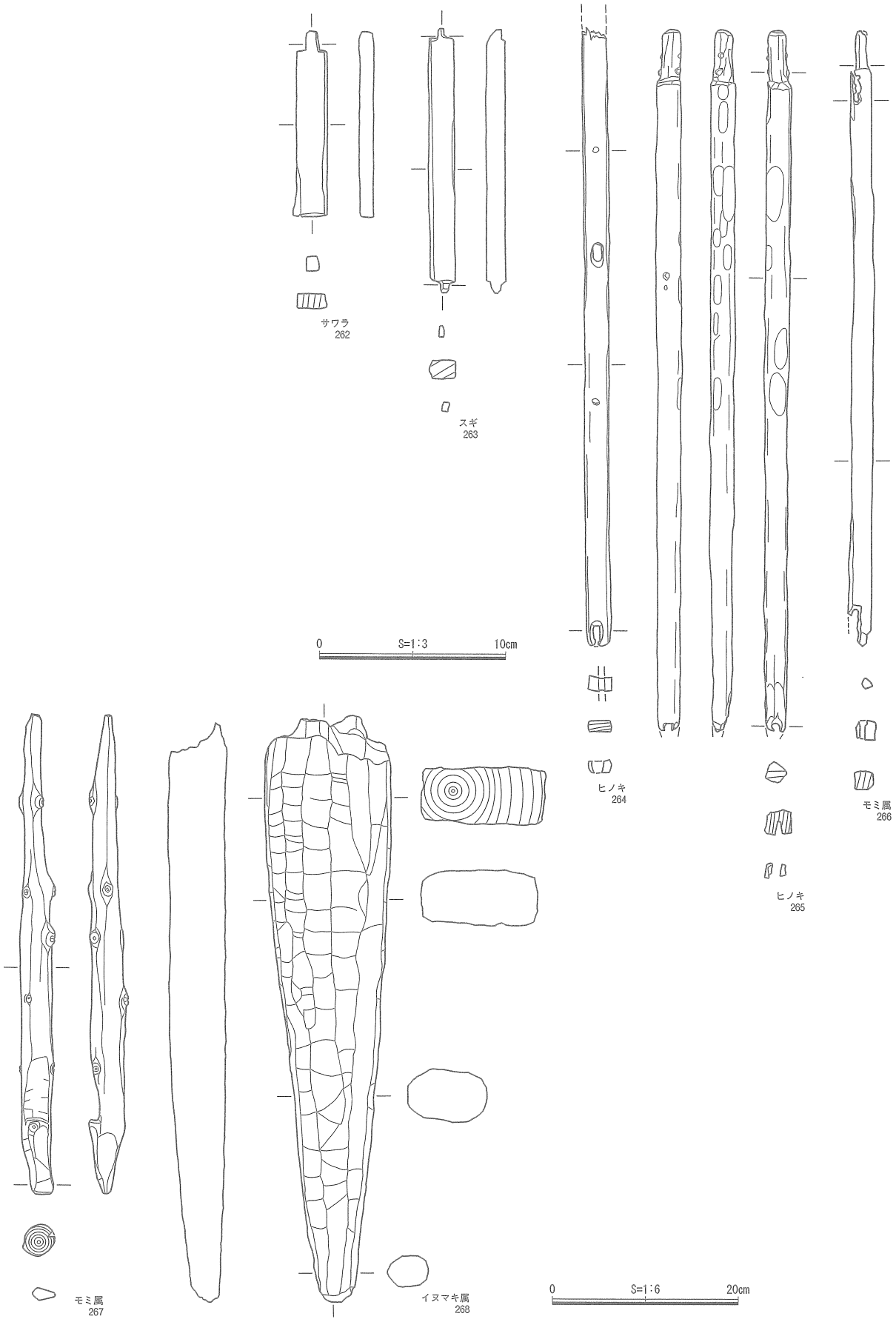


第23図　出土遺物実測図（木製品８）

る。251は、ヒノキを素材とする。外縁最大径は、30㎜、中央穿孔の径は、４㎜大で、表裏両面から開けられているが、若干ズレを生じている。252は、アカガシ亜科を素材とする。外縁最大径は、48㎜で、中央円孔径は、12㎜を測る。

253は、刃物の柄または、包丁の鞘である。イチイを素材とし、外面には、漆が塗布されている。254・255は、刀の鞘である。ともにヒノキを素材とする。

256・257は、傘轆轤である。256は、頭轆轤で、傘骨を嵌める溝は、残存部の状況から、推定50本前後とみられる。中央に挿入された傘の柄の一部が残存する。轆轤本体の素材は、エゴノキ属、柄の素材は、竹笹類である。257は、漆塗の手元轆轤で、先に黒漆を塗布した後、条の下面や手元部に赤漆を塗布する。傘骨を嵌める溝は、推定54本。素材は、エゴノキ属である。



第24図　出土遺物実測図（木製品９）

258は、将棋の駒である。材面に直接墨書がされており、表面に「飛車」、裏面に「龍」字の一部が読み取れる。素材は、カヤである。

259は、サワラを素材とした円錐状の木製品である。上端中央を深さ12㎜程度刳り抜き、窄まる下端を丸く加工する。外見的特長から叩き独楽の可能性がある。

260・261は、木彫像である。人物を象り、頭部と胴体部を削り出している。260は、腕を作り、全体的に丸みを帯びるが、261は、四肢の作り出しをせず、頭部・胴部に相当する箇所の横断形は、角縁を落とした方形である。どちらもヒノキを素材とする。

7　部材類（第24図262～267／図版21）

262～266は、枘材である。262は、サワラを素材とし、残存する片側端部に、263は、スギを素材として、両端部に枘差込を作り出している。264は、ヒノキを素材とする四角細棒の途中に長方形の枘穴が２箇所設定され、ほかに２箇所、木釘が打たれている。265もヒノキを素材とする四角細棒で、片側端部に枘差込部分、反対側端部に長方形の枘穴を設定している。枘差込部分に２箇所、本体に１箇所、木釘が打たれている。266は、モミ属を素材とする四角細棒で、片側端部に枘差込部分、反対側端部に長方形の枘穴を設定している。264～266は、格子状に組み立てられる部材であり、障子の桟のようなものが推定される。

267は、杭で、モミ属の節が残る丸太加工材を転用したものである。先端部は、打設時に生じた潰れが観察される。268は、イヌマキ属を素材とした矢板である。表裏両面に削りだしの加工痕が認められる。267同様、先端部に打設時に生じた潰れが観察される。

(6)　種子類（図版14）

包含層中からは、植物遺体である胡桃や桃または、梅の種子が多数出土している。いずれも食用となる部分があり、桃については、祭祀行為との関わりも考慮されるが、半割状態にあった胡桃の種子で、胚部分が取り出されず残っていた個体があり、自然物か、栽培物・人為的な採集物であるかとの判断がつきかねた上、帰属時代も不明であるため、参考資料として、集合撮影して、写真図版に掲載した。

第１表　土器観察表１（縄文土器・弥生土器・土師器・中世素焼土器）

番号	掃図番号	図版番号	内容	器種	残存部位	残存率	計測値	色調		胎土含有物	文様・器面調整	備考
								内面	外面			
1	6	3	縄文土器	深鉢	胴部	1/10未満	残存高45㎜	10YR5/1 褐灰色	10YR3/1 黒褐色	長石・石英・白・黒色粒子	外面：半截竹管内皮を用いた縦方向の条線文。貼付隆帯。	縄文時代中期後葉。曽利Ⅰまたは Ⅱ式土器に比定。
2	6	3	弥生土器	壺	胴中位～底部	1/5程度	底部径48㎜ 残存高185㎜	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y4/1 黄灰色	花崗岩片（多量）	外面：横・斜方向条線文。内面：輪積接合部に指頭圧痕集中。	弥生時代中期以前。
3	6	6		壺	頸下位～胴上位	1/6程度	残存高89㎜	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	石英・白色粒子	外面：原体LR単節縄文を横方向に施文する文様帯。竹管状工具外皮を用いた沈線による重三角区画。逆三角形区画内に刺突文充填。内面：横方向のナデ調整。	
4	6	6		壺	頸部	1/10未満	残存高36㎜	7.5YR4/3 褐色	7.5YR4/3 褐色	石英	外面：原体LR単節縄文を横方向に施文した後、竹管状工具外皮を用いた沈線を横方向に引いて多段に区画。特定区画の縄文を磨り消す。	流磨著しい。
5	6	6		壺	胴上位	1/10未満	残存高77㎜	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR5/3 にぶい赤褐色	長石・石英	外面：原体LR単節縄文を施文した後、枠状の区画帯を沈線で設定し、流水文を外枠区画内に施文した後、内枠区内を磨り消す。内面：輪積痕を残す。	外面赤色顔料塗布か？
6	6	6		広口壺	口縁～頸中位	1/10未満	残存高64㎜	10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石・石英	外面：口縁部横方向のハケ調整。頸上位斜方向のハケ調整。頸中位横方向のハケ調整。内面：口縁部連弧文施文。頸上・中位横方向のハケ調整。	
7	6	6		壺	底部	1/3程度	復原底径88㎜ 残存高16㎜	7.5YR6/2 灰褐色	10YR5/1 褐灰色	長石・黒色粒	内面：横方向の指ナデ調整。	底面に網代痕残る。
8	6	6		壺	胴下位～底部	1/5程度	復原底径82㎜ 残存高39㎜	10YR5/1 褐灰色	5YR6/6 橙色	長石・黒色粒	内面：横方向の指ナデ調整。	底面に網代痕残る。

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	残存部位	残存率	計測値	色調 内面	色調 外面	胎土含有物	文様・器面調整	備考
9	6	3	弥生土器・土師器	折返口縁壺	口縁～底部	ほぼ1/1	口径142mm 頸部径68mm 胴部最大径212mm 底径80mm 器高273mm	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	石英・白色粒子・黒色粒子（少量）	外面：口縁部斜方向のハケ調整の後、下端部にハケ工具先端による連続刺突。頸部斜方向のハケ調整の後、中・下位に横方向のミガキ調整。胴上位上下に下端部を結節した原体LR・RLの単節縄文を横方向に施文し、羽状縄文をつくる。胴中位斜方向のハケ調整の後、縦方向のミガキ調整。胴下位斜方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。 内面：口縁部上下段に原体RL・LRの単節縄文を横方向に施文し、羽状縄文をつくる。頸上・中位横方向のハケ調整。頸下位～胴中位指頭痕残る。胴下位～底部横方向のヘラナデ調整。	
10	6	3		広口壺	口縁～胴中位	1/6程度 4/5程度	復原口径83mm 頸部径78mm 残存高165mm	10YR5/3 黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	石英・白・黒色粒子	外面：口縁部斜・横方向のハケ調整。頸部横方向のミガキ調整。頸最下位ハケ工具刺突による横方向沈線1条。胴上位ハケ工具先端を上中下段に傾きを変え連続刺突し、擬似縄文をつくる。 内面：口縁部横方向のハケ調整。頸部指圧痕残す。胴上位輪積痕残す。	
11	6	3		壺	頸～胴中位	ほぼ1/1 1/2程度	頸部径68mm 残存高125mm	10YR6/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	白色粒・赤色粒（少量）・黒色粒子	外面：頸上位縦方向のハケ調整。頸中位縦方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。頸下位ハケ工具先端刺突による横方向沈線を1条。胴上位ハケ工具先端を上下段に傾きを変え連続刺突し、擬似縄文をつくる。胴中位横方向のミガキ調整。 内面：頸上位横方向のハケ調整。頸中位～胴中位指頭痕跡残る。	
12	7	6		直口壺	口縁部	1/4程度	復原口径58mm 残存高44mm	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石・雲母	外面：縦方向のミガキ調整。 内面：横方向のミガキ調整。	
13	7	6		折返口縁壺	口縁～頸上位	1/5程度	復原口径164mm 残存高42mm	5YR4/5 にぶい赤褐色	5YR4/5 にぶい赤褐色	石英・白色粒子	外面：頸上位縦方向のハケ調整の後、縦方向のミガキ調整。 内面：口縁横方向のヘラナデ調整。頸上位横方向のハケ調整。	
14	7	6		折返口縁壺	口縁～頸上位	1/3程度	復原口径174mm 残存高52mm	5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	長石・石英・白色粒・黒色粒子（少量）	外面：頸上位縦方向のハケ調整の後、縦方向のミガキ調整。 内面：口縁原体LRの単節縄文を横方向に施文。頸上位横方向のヘラナデ調整。	流麈痕あり。
15	7	4		折返口縁壺	口縁～胴上位	1/3程度	復原口径134mm 復原頸部径86mm 残存高76mm	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	長石・石英・黒色粒子	外面：頸部縦方向のミガキ調整。 内面：口縁～頸上位横方向のミガキ調整。胴上位横方向のハケ調整。	
16	7	6		折返口縁壺	口縁部	1/10未満	残存高25mm	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	石英・白・黒色粒子	外面：口唇部原体RL単節縄文横方向に施文。中位斜方向のミガキ調整。下位横方向のミガキ調整。 内面：上位原体RL単節縄文横方向に施文。中・下位横方向のミガキ調整。	
17	7	6		折返口縁壺	口縁～胴上位	1/10未満	残存高28mm	7.5YR6/6 橙色	10YR6/6 明黄褐色		外面：口唇部原体LRの単節縄文を横方向に施文した後、短突帯を縦方向に貼付。頸上位斜め方向にハケ調整の後、横方向のミガキ調整。 内面：口縁部横方向のハケ調整。頸上位横方向のミガキ調整。	
18	7	6		折返口縁壺	口縁～胴上位	1/10未満	残存高16mm	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	長石・石英	外面：口縁部ハケ工具先端連続刺突。口縁下位横方向のハケ調整。頸上位縦方向のハケ調整。 内面：横方向のハケ調整。	
19	7	6		複合口縁壺	口縁～頸上位	1/10未満	残存高20mm	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR7/2 明褐灰色	白・黒色粒子	外面:口縁部ハケ工具先端による連続刺突。頸上位斜方向のハケ調整。 内面：横方向のハケ調整。	
20	7	6		複合口縁壺	口縁部	1/10未満	残存高22mm	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	白・黒色粒子	外面：横方向ナデ調整。 内面：横方向ナデ調整。	
21	7	6		複合口縁壺	口縁～頸中位	1/5程度	復原最大口径256mm 復原頸部径118mm 残存高65mm	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	長石（多量）・石英・白色粒（多量）・黒色粒・赤色粒（少量）	外面：頸上位縦方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。頸中位縦方向のハケ調整。	流麈痕あり。
22	7	4		複合口縁壺	口縁～頸部	1/4程度	復原最大口径194mm 頸部径86mm 残存高119mm	10YR5/3 にぶい赤褐色	10YR6/3 にぶい橙色	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子（少量）	外面：口縁上位斜方向のハケ調整。口縁中位ハケ工具先端で描いた沈線が1条巡る。頸上・中位縦方向ハケ調整の後、縦方向のミガキ調整。頸下位横方向沈線文帯。 内面:口縁下位～頸上位横方向のハケ調整。	
23	7	6		複合口縁壺	口縁部	1/10未満	残存高49mm	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR4/1 褐灰色	石英・白・黒色粒子	外面：突帯を1条垂下。	流麈著しい。
24	7	6		複合口縁壺	口縁～頸上位	1/10未満	残存高43mm	10YR6/2 灰黄褐色	2.5YR7/2 灰黄色	長石・石英	外面：口縁部横方向のミガキ調整。断面三角形の突帯を垂下させる。口縁下位横方向のナデ調整。頸上位横方向のミガキ調整。 内面：横方向のミガキ調整。	
25	7	6		複合口縁壺	口縁中位～頸上位	1/10未満	残存高45mm	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石・黒色粒子	外面:口縁縦方向のミガキないしナデ調整。断面三角形の突帯を縦方向に垂下。頸上位斜方向のハケ調整。 内面:横方向のハケ調整の後、ミガキ調整。	
26	7	6		複合口縁壺	口縁部	1/10未満	残存高42mm	10YR6/4 にぶい橙色	10YR6/6 橙色	白・赤・黒色粒	外面：横位のハケ調整の後、横方向の指ナデ。断面三角形の突帯を縦位に貼付。 内面：上位指頭痕残る。中・下位横方向ミガキ調整。	流麈痕あり。
27	7	4		壺	頸～底部	ほぼ1/1	頸部径74mm 胴部最大径132mm 底部径30mm 残存高182mm	10YR5/4 にぶい黄褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	石英・蛇石・白・黒色粒子	外面：頸上・中位斜方向のハケ調整。頸下位縦方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。胴上位縦方向のミガキ調整。胴中・下位横方向のミガキ調整。 内面：頸上・中位横方向のミガキ調整。頸下位指頭圧痕残る。	底部は、浅い高台状に形作る。
28	7	6		小型壺	口縁部	1/6程度	復原口径84mm 残存高41mm	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR4/6 赤色	石英・雲母・有色粒	外面：横方向のミガキ調整。 内面：横方向のミガキ調整。	内外面赤色顔料塗布。
29	7	6		小型壺	体下位～底部	1/5程度 ほぼ1/1	底径60mm 残存高30mm	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR5/1 褐灰色	石英（少量）・赤色粒子（極少量）・白・黒色粒子	外面：縦・横方向のミガキ調整。 内面：横方向のハケ調整の後、横方向のヘラナデ調整。	

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	残便部位	残存率	計測値	色調 内面	色調 外面	胎土含有物	文様・器面調整	備考
30	7	6	弥生土器・土師器	小型壺	頸～胴部	1/4程度	復原胴部最大径96mm 残存高68mm	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR3/3 暗褐色	石英・白・黒色粒子	内面：胴上位指頭痕残す。	流磨痕あり。
31	7	4		小型壺	頸～底部	4/5程度	胴部最大径88mm 底径46mm 残存高61mm	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	輝石（多量）・ 黒色粒子	内面：指頭痕残す。	流磨痕あり。
32	8	6		壺	頸下位～胴中位	1/5程度	残存高103mm	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR6/2 灰黄褐色	長石・石英・ 白・赤色粒子	外面：頸下位縦方向のミガキ調整。胴上・中位斜方向のミガキ調整。 内面：頸下位横方向のハケ調整。胴上・中位横方向のヘラナデ調整、指頭痕残す。	
33	8	6		壺	胴上位	1/10未満	残存高35mm	7.5YR5/1 褐灰色	N4/1 灰色	長石・石英	外面：ハケ工具先端を上下段に傾きを変え連続刺突し、擬似縄文をつくり、円形の粘土板を貼付。 内面：ナデ調整。	
34	8	6		壺	胴上・中位	1/10未満	残存高47mm	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	長石・石英・ 白色粒子	外面：胴上位原体RL・LRの単節縄文を上下段、横方向に施文し、羽状縄文をつくり、円形の粘土板を貼付。胴中位横方向のミガキ調整。 内面：横方向のハケ調整。	
35	8	4		壺	胴下位～底部	2/5程度 ほぼ1/1	底径63mm 残存高72mm	10YR7/6 明黄褐色	2.5Y3/1 黒褐色	輝石・白色粒・ 黒色粒子（多量）	外面：胴下位縦方向ハケ調整の後、指ナデ調整。 内面：胴下位～底部斜・横方向ハケ調整。	底面に 木葉痕残る。
36	8	4		壺	胴中位～底部	1/2程度	復原胴部最大径172mm 底部径56mm 残存高70mm	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/2 明褐色	長石・ 白色粒子（少量）・ 黒色粒子（多量）	外面：胴中・下位横方向のミガキ調整。胴最下位縦方向のミガキ調整。 内面：胴中位指頭痕残る。胴下位～底部横方向のヘラナデ調整の後、横方向のハケ調整。	底部は、 浅い高台状 に形作る。
37	8	6		壺	底部	ほぼ1/1	底部径102mm 残存高25mm	5YR5/6 明赤褐色	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石・石英・ 黒色粒	外面：一部横方向のミガキ調整が認められる。 内面：横方向のハケ調整。	底面に 木葉痕残る。
38	8	4		壺	胴下位～底部	ほぼ1/1	底部径84mm 残存高110mm	5YR5/2 灰褐色	5YR3/2 暗赤褐色	長石・ 白・赤・黒色粒子	外面：縦方向にハケ調整の後、横方向のミガキ調整。 内面：斜・横方向のミガキ調整。	底面に 木葉痕残る。
39	8	4		鉢	口縁～底部	1/3程度	復原口径136mm 復原底径784mm 器高65mm	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	石英・白色粒子	外面：縦・横方向のミガキ調整。 内面：横方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。	
40	8	5		高坏	脚中・下位	1/3程度	復原脚裾最大径164mm 残存高32mm	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	白色粒子	内面：横方向のハケ調整。	流磨著しい。
41	8	5		高坏	坏部	1/4程度	復原口径142mm 残存高50mm	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	石英・黒色粒子	内面:一部横方向のハケ調整が認められる。	流磨著しい。
42	8	5		高坏	坏底部	ほぼ1/1	残存高17mm	10R4/6 赤色	10R5/6 赤色	石英・輝石・ 白・黒色粒子	外面：一部縦方向のミガキ調整が認められる。	流磨痕あり。 赤色顔料塗布か?
43	8	5		高坏	坏底～脚上位	1/4程度	残存高36mm	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	石英（多量）・ 黒色粒子		流磨著しい。
44	8	5		高坏	坏底 脚上・中位	1/10未満 ほぼ1/1	残存高79mm	7.5YR4/3 褐色	坏7.5YR5/6 明褐色 脚7.5YR4/4 褐色	白色粒子・ 赤色粒子（多量）	脚内面：指頭痕著しい。	流磨著しい。
45	8	6		高坏	脚部	4/5程度	脚裾最大径127mm 残存高73mm	10YR6/6 明黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	白色粒子	外面：脚下位縦方向にハケ調整。 内面：脚上位ヘラナデ調整。脚下位縦・横方向にハケ調整。	流磨痕あり。 鉄分被覆。
46	9	6		台付甕	口縁～頸部	1/10未満	残存高75mm	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	輝石・白色粒・ 赤色粒（少量）・ 黒色粒子	外面：竹管状工具外皮による斜方向の沈線文。口唇部に同工具による連続刻み。	流磨著しい。
47	9	6		台付甕	口縁～頸部	1/10未満	残存高44mm	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	石英・白色粒子・ 黒色粒子（多量）	外面：縦方向のハケ調整の後、斜方向の沈線文。口唇部にハケ工具先端による連続刺突。 内面：横方向のハケ調整。	
48	9	6		台付甕	口縁部	1/10未満	残存高61mm	10YR3/1 黒褐色	10YR4/2 灰黄色褐色	石英・雲母・ 白色粒子（多量）	外面：横方向のハケ調整の後、口唇部に斜方向の連続した刻み。	比較的薄手、 硬質。
49	9	6		甕?	胴部	1/10未満	残存高74mm	5YR5/3 にぶい赤褐色	5YR5/3 にぶい赤褐色	白色粒	外面：縦方向のハケ調整または条線文。 内面：ナデ調整。	
50	9	6		台付甕	口縁～胴上位	1/10程度	復原口縁径258mm 頸部径230mm 残存高98mm	5YR6/2 灰褐色	5YR6/4 にぶい橙色	石英・ 赤色粒子（多量）・ 黒色粒子	外面：斜方向にハケ調整の後、口唇部にハケ工具による連続した刻み。 内面：横方向のハケ調整。	口唇部刻み の工具を掃う 方向が途中で 変化する。
51	9	6		台付甕	口縁～胴下位	ほぼ1/1	口縁径198mm 頸部径174mm 胴部最大径208mm 残存高187mm	7.5YR4/2 灰褐色	甕7.5YR6/3 にぶい褐色	白・赤色粒・ 黒色粒子	外面：口縁～頸部縦方向のハケ調整の後、口唇部に棒状工具による連続した刻み。胴部斜方向りハケ調整。 内面：口縁～頸部横方向のハケ調整。胴部横方向のヘラナデ調整。	外面 煤の付着が 著しい。
52	9	6		台付甕	底～台上位	ほぼ1/1	残存高54mm	10YR6/3 にぶい黄橙色	甕10YR6/3 にぶい黄橙色 台10YR6/2 灰黄褐色	石英（多量）・ 白色粒・ 赤色粒子（少量）・ 黒色粒子（少量）	外面：底部横方向のハケ調整。台上位縦・斜方向のハケ調整。 内面：底部横方向のハケ調整。台上位横方向のハケ調整の後、縦方向指ナデ調整。	
53	9	6		台付甕	底～台上位	1/2程度	残存高31mm	7.5YR5/1 褐灰色	甕7.5YR6/4 にぶい橙色 台7.5YR6/1 褐灰色	長石・石英・ 赤色粒・ 白色粒子（少量）・ 黒色粒子	外面：横方向のナデ調整（一部ハケ痕が認められる）。 甕内面：底部横方向のハケ調整。 台内面：斜方向のハケ調整。	流磨痕あり。
54	9	6		台付甕	台部	ほぼ1/1	台径74mm 残存高57mm	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/6 橙色	石英・ 白・黒色粒子	外面：縦方向のハケ調整。 内面：台上・中位横方向のヘラナデ調整。台下位横方向のハケ調整。	
55	9	6		台付甕	底～台中位	3/4程度	残存高62mm	5YR4/2 灰褐色	甕5YR4/3 にぶい赤褐色 台5YR3/4 暗赤褐色	石英・輝石・ 白色粒子	外面：縦方向のハケ調整。 内面：底部縦・横方向ハケ調整。台上・中位横方向のハケ調整。	
56	9	6		台付甕	台部	1/5程度	残存高57mm	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR6/2 灰褐色	石英・ 白・黒色粒子	外面：縦方向のハケ調整。端部羽状にハケ工具連続刺突。 内面：横方向の指ナデ調整。	
57	9	6		台付甕	口縁～胴中位	1/2程度	復原口縁径168mm 復原頸部径142mm 復原胴部最大径160mm 残存高125mm	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	石英・ 白・黒色粒子	外面：口唇部横方向のハケ調整。口縁部縦方向のハケ調整。胴部斜・横方向のハケ調整。 内面：口縁部横方向のハケ調整。胴部指頭痕残る。	
58	9	6		台付甕	口縁～胴中位	1/6程度	復原口径148mm 残存高71mm	10YR4/1 褐灰色	10YR5/2 灰黄褐色	白色粒子	外面：口縁部縦方向のハケ調整。胴上・中位縦・斜方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。 内面：口縁部縦方向のハケ調整。横方向の指ナデ調整。	

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	残存部位	残存率	計測値	色調 内面	色調 外面	胎土含有物	文様・器面調整	備考
59	10	7	土師器	台付甕	口縁～胴上位	1/6程度	復原口径132mm 残存高26mm	2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y7/1 灰白色	石英・白色粒子	外面：口縁部横方向指ナデ調整。胴上位縦方向のハケ調整。 内面：口縁部横方向指ナデ調整。胴上位指頭痕残す。	S字口縁甕。
60	10	7		台付甕	口縁～胴上位	1/8程度	復原口径208mm 残存高39mm	10YR4/1 褐灰色	10YR4/2 灰黄褐色	石英・白色粒子	外面：胴上位縦方向のハケ調整の後、横方向のハケ調整。	S字口縁甕。
61	10	7		甕	口縁～頸部	1/10未満	残存高27mm	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	長石（少量）・ 輝石・白色粒	外面：頸部横方向のハケメ施文の後、間隔を空け縦方向のハケメ施文。 内面：横方向のハケ調整。	比較的薄手。 流磨著しい。
62	10	7		甕	口縁部	1/10未満	残存高33mm	7.5YR5/6 明褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	白色粒	外面：口縁上位横方向の指ナデ調整。口縁下位斜方向のハケ調整。 内面:横方向のハケ調整の後、指ナデ調整。	
63	10	7		甕	口縁部	1/10未満	残存高26mm	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	6mm大の礫・白・黒色粒	外面：横方向指ナデ調整。 内面：横方向指ナデ調整。	
64	10	7		甕	口縁～頸部	1/10未満	残存高33mm	5YR4/2 灰褐色	5YR4/1 褐灰色	白色粒（多量）・ 黒色粒子（少量）	外面：横方向ハケ調整。 内面：横方向ハケ調整。	
65	10	7		甕	口縁～胴上位	1/10未満	残存高51mm	5YR6/6 橙色	5YR9/4 にぶい橙色	白色粒子・ 赤色粒（多量）		流磨著しい。
66	10	7		甕	口縁部	1/10未満	残存高25mm	2.5YR3/2 赤褐色	2.5YR4/1 赤灰色	輝石（少量）・ 黒色粒子		清郷型甕。 流磨著しい。
67	10	7		坏	口縁～体中位	1/10未満	残存高37mm	5YR4/3 赤褐色	5YR4/3 赤褐色	白・黒色粒子	外面：縦方向のハケ調整の後、横方向のミガキ調整。 内面：口縁横方向の指ナデ調整。体上・中位横方向のハケ調整。	
68	10	7		坏	口縁～体上位	1/10未満	残存高28mm	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色		外面：横方向のミガキ調整。 内面：横方向のミガキ調整。	
69	10	7		坏	口縁～体上位	1/10未満	残存高28mm	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子	外面：横方向のミガキ調整。 内面：縦方向のミガキ調整。	
70	10	7		坏	口縁～体上位	1/10未満	残存高28mm	2.5YR4/6 赤褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	黒色粒	外面：ミガキ調整。 内面：縦方向のミガキ調整。	内面 赤色顔料塗布。
71	10	7		坏	口縁～体上位	1/10未満	残存高29mm	2.5YR8/3 浅黄色	7.5YR7/6 橙色	長石・ 黒色粒子	内面：横方向ミガキ調整。	流磨痕あり。
72	10	7		坏	口縁～体上位	1/10未満	残存高25mm	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	有色粒	外面：横方向指ナデ調整。 内面：横方向指ナデ調整。	
73	10	7		坏	口縁～体上位	1/10未満	残存高24mm	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR4/6 赤褐色	石英・ 白色粒子	外面：横方向指ナデ調整。	流磨痕あり。
74	10	7		坏	口縁～底部	1/6程度 2/5程度	復原口径142mm 残存高55mm	10YR4/1 褐灰色	10YR4/1 褐灰色		内面：口縁部横方向の指ナデ調整。	流磨著しい。
75	10	7		坏	口縁～底部	4/5程度	口縁径140mm 器高44mm	7.5Y5/1 灰色	7.5YR2/2 オリーブ黒色	石英（少量）・ 白・黒色粒子	外面：口縁部横方向の指ナデ調整。体～底部横方向のヘラケズリ調整。 内面：横方向のミガキ調整。	表面 黒色処理が施されている。 流磨痕あり。
76	10	7		坏	底部	1/4程度	残存高11mm	5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	黒色粒・ 白色粒子		やや丸底。 底面に木葉痕残る。
77	10	7		坏	口縁～底部	1/6程度	復原口径129mm 復原底径98mm 器高32mm	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	黒色粒子	外面：口縁～体部横方向指ナデ調整。底部放射状暗文。 内面：口縁～体部横方向指ナデ調整。	硬質。 焼成良好。
78	10	7		坏	体下位～底部	1/5程度	復原底径62mm 残存高17mm	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤色粒子	外面：横方向指ナデ調整。 内面：横方向指ナデ調整。	底部に回転糸切痕残る。
79	10	7		碗	体下位～底部	1/10未満	復原高台径78mm 残存高31mm	5YR4/2 灰褐色	5YR5/3 にぶい赤褐色	石英・ 白・黒色粒子		
80	10	7		柱状高台	口縁～底部	1/6程度 ほぼ1/1	復原口径80mm 底径30mm 器高25mm	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	長石・黒色粒子		流磨痕あり。
81	10	8	中世素焼土器	鍋	口縁部	1/10未満	残存高17mm	2.5Y7/3 浅黄色	2.5YR7/3 浅黄色	白色粒子		
82	10	8		鍋	耳部	1/10未満	残存高42mm	2.5Y8/3 浅黄色	2.5Y8/3 浅黄色	白色粒		
83	10	8		羽釜	口縁～羽部	1/10未満	残存高26mm	7.5YR8/2 浅黄橙色	7.5YR8/2 浅黄橙色			口縁部円孔あり。
84	10	8		羽釜	口縁～胴上位	1/10未満	残存高18mm	5Y8/2 灰白色	5Y8/2 灰白色			
85	10	8		羽釜	口縁～胴上位	1/10未満	残存高17mm	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色			
86	10	8		羽釜	口縁～胴上位	1/10未満	残存高24mm	10YR7/6 明黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	白色粒		口縁部円孔あり。
87	10	8		羽釜	口縁～胴上位	1/10未満	残存高21mm	5Y8/3 淡黄色	5Y8/3 淡黄色	白色粒子		
88	10	8		羽釜	口縁～胴上位	1/10未満	残存高16mm	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色			
89	10	8		羽釜	口縁～胴上位	1/10未満	残存高31mm	10YR8/1 灰白色	10YR8/1 灰白色	白色粒		
90	10	8	かわらけ	皿	底部	1/3程度	残存高11mm	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	白・黒色粒子		粘土紐の巻き成形が観察される。
91	10	8		皿	底部	1/3程度	残存高９mm	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	白・黒色粒		
92	10	8		皿	体下位～底部	1/4程度	復原底径48mm 残存高22mm	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	白色粒子（少量）・ 赤・黒色粒子		轆轤成形。
93	10	8		皿	口縁～底部	1/3程度	復原口径72mm 復原底径46mm 器高20mm	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色		内面：指頭痕残る。	轆轤成形?
94	10	8		皿	体～底部	1/2程度	復原底径26mm 残存高13mm	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色			轆轤成形。
95	10	8		皿	口縁部	1/6程度	残存高25mm	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色			口唇部 煤付着。 灯明皿。

第２表　土器観察表２（須恵器・灰釉陶器・山茶碗）

番号	掲図番号	図版番号	内容	器種	残存部位	残存率	計測値	色調 内面	色調 外面	胎土含有物	文様・器面調整	備考
96	11	7	須恵器	坏	口縁部（受部）	1/10未満	残存高24mm	10YR5/1 褐灰色	10YR5/1 褐灰色	白色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
97	11	7		坏	口縁部（受部）	1/10未満	残存高18mm	N5/ 灰色	N4/ 灰色	白色粒子（少量）・黒色粒子（少量）	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
98	11	7		坏	口縁部（受部）	1/10未満	残存高20mm	N5/ 灰色	N4/ 灰色	白色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
99	11	7		坏	口縁～体中位	1/10未満	残存高27mm	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y7/1 灰白色	白色粒子（極少量）・黒色粒子（極少量）	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
100	11	7		坏	口縁～体下位	1/10未満	残存高30mm	N5/ 灰色	N6/ 灰色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
101	11	7		坏蓋	摘～天井上位	2/3程度	残存高17mm	N7/ 灰白色	N8/ 灰白色	白色粒子・黒色粒子（少量）	外面：天井部横方向のヘラケズリ調整。	摘部宝珠形。
102	11	7		坏蓋	摘部	1/2程度	残存高10mm	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	白色粒子（少量）・黒色粒子（少量）	外面：天井部横方向のヘラケズリ調整。 内面：剥落欠損。	摘部凹形。 外面自然釉付着。
103	11	7		坏蓋	天井下位～縁部	1/10未満	残存高17mm	7.5YR6/1 褐灰色	7.5YR5/1 褐灰色	白色粒子（少量）	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向のヘラケズリ調整。	
104	11	7		坏	体下位～底部	ほぼ1/1	残存高（土器本体）14mm 残存高（輪ドチ含）22mm 推定底径60mm	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	輝石・白色粒	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向のヘラケズリ調整。	底部下に輪ドチ付着。
105	11	7		高台付坏	体下位～高台部	1/5程度	復原高台径110mm 残存高17mm	5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色			丸底の底部が高台下より突出する器形。
106	11	7		皿	口縁～体下位	1/10未満	復原口径162mm 残存高17mm	N6/ 灰色	N5/ 灰色	赤色粒・白色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
107	11	7		壺または甕	頸部	1/10未満	残存高74mm	N6/ 灰色	N7/ 灰白色	白色粒子・黒色粒子（少量）	外面：横方向の突帯下に波状文を巡らせる。 内面：横方向の指ナデ調整。	
108	11	7		壺または甕	頸部	1/10未満	残存高18mm	10YR4/1 褐灰色	N6/ 灰色	白色粒	外面：列点状の連続刺突文。	内面自然釉付着。
109	11	7		壺	口縁～胴上位	1/5程度	復原口径146mm 復原頸径96mm 残存高85mm	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	外面胴上位、内面口縁～頸上位自然釉付着。
110	11	7		壺	口縁部	1/10未満	残存高24mm	N6/ 灰色	N7/ 灰白色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 流水文施文。 内面：横方向の指ナデ調整。	
111	11	7		壺	口縁～頸上位	1/6程度	残存高47mm	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。	内面・口縁外面自然釉付着。
112	11	7		壺	口縁部	1/10未満	残存高16mm	N6/ 灰色	N6/ 灰色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
113	11	7		壺	口縁部	1/10未満	残存高16mm	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	白・黒色粒子		内外面自然釉付着。
114	11	7		壺	口縁部	1/10未満	残存高25mm	N5/1 灰色	N6/1 灰色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。	内面自然釉付着。
115	11	7		壺または甕	胴部	1/10未満	残存高33mm	N6/ 灰色	5Y6/1 灰色	白色粒子	外面：タタキ目。 内面：青海波文。	火ぶくれあり。
116	11	7		壺または甕	胴部	1/10未満	残存高39mm	10YR3/1 黒褐色	10YR7/1 灰白色	白・黒色粒子	外面：タタキ目。 内面：青海波文。	
117	11	7		壺または甕	胴部	1/10未満	残存高55mm	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	白・黒色粒子	外面：タタキ目。	内外面自然釉付着。
118	11	7		壺または甕	胴部	1/10未満	残存高35mm	N6/ 灰色	N6/ 灰色	白・黒色粒子	外面：タタキ目。 内面：斜方向のヘラナデ調整。	
119	11	7	灰釉陶器	碗	口縁～体上位	1/10未満	残存高23mm	10YR6/1 褐灰色	10YR6/1 褐灰色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	
120	11	7		皿	口縁～体中位	1/10未満	残存高17mm	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 内面：横方向の指ナデ調整。	内外面灰釉塗布。
121	11	7		碗	底～高台部	1/4程度	復原高台径60mm 残存高23mm	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色			底面回転糸切痕残る。
122	11	7		碗	体下位～高台部	3/5程度 ほぼ1/1	高台径62mm 残存高20mm	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	白・黒色粒子		高台断面三日月形。 内面自然釉付着。 重ね焼きによる高台痕残る。 火ぶくれあり。
123	11	7		碗	底～高台部	1/3程度	復原高台径62mm 残存高16mm	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	白色粒	外面：横方向の指ナデ調整。 碗内面：横方向のヘラケズリ調整。 高台内面：横方向のヘラケズリ調整。	高台断面三日月形。
124	11	7	山茶碗	碗	体下位～高台部	1/2程度	復原高台径72mm 残存高28mm	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	白・黒色粒子	外面：横方向の指ナデ調整。 高台内面：横方向のヘラケズリ調整。	

第3表　土器観察表3（輸入磁器・炻器・瓦器・国産陶磁器・土製品）

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	残存部位	残存率	計測値	胎土含有物	文様・器面調整	備考
125	12	9	青白磁	合子蓋	天井～縁部	1/5程度	復原最大径58mm 器高16mm		外面：2段の蓮弁文	
126	12	9	白磁	端反碗	口縁～体上位	1/10未満	残存高31mm		内面：体上位1条細沈線巡る。	12C後半。
127	12	9		端反碗	口縁～体上位	1/10未満	残存高13mm		内面：体上位櫛掻文。	12C。
128	12	9		口禿碗	口縁～体上位	1/10未満	残存高17mm		外面：口唇部無施釉。	13C半ば～14C前半。
129	12	9	青磁	皿	口縁～体中位	1/10未満	残存高17mm		外面：縦方向細条線文。	見込に劃花文が入る皿。12C後葉。
130	12	9		鎬蓮弁文碗	口縁～体上位	1/10未満	残存高21mm		外面：蓮弁文。	13C中葉～14C前葉。
131	12	9		蓮弁文折縁皿	口縁～体上位	1/6程度	復原口径114mm 残存高16mm		外面：蓮弁文。	13C後半～14C前半。
132	12	9		盤	口縁～体上位	1/10未満	残存高29mm		内面：蓮弁文。	14C。
133	12	9		盤	底～高台部	1/10未満	残存高26mm			14C。
134	12	9		蓮弁文折縁皿	口縁～体上位	1/10未満	残存高29mm		内面：蓮弁文。	13C後半～14C前半。
135	12	8	常滑系炻器	壺または甕	口縁部	1/10未満	残存高25mm	長石・白・黒色粒子		N字口縁。6a型式比定。13C後半。
136	12	8		壺または甕	口縁部	1/10未満	残存高37mm	長石		N字口縁。9型式比定。15C前半。
137	12	8		大型甕	胴部	1/10未満	残存高70mm	白色粒	外面：格子状タタキ目。 内面：斜方向のヘラナデ調整。	
138	12	8		壺	口縁部	1/6程度	残存高41mm	長石・黒色粒子		10型式比定。15世紀後半。
139	12	8		片口鉢	口縁部	1/10未満	残存高43mm	石英・白色粒子		
140	12	8		片口鉢	口縁部	1/10未満	残存高20mm	長石・石英・黒色粒子		
141	12	8		片口鉢	体下位～高台部	1/5程度	復原高台径134mm 残存高45mm	白色粒・黒色粒子		
142	12	12	瓦器	火鉢または香炉	胴部	1/10未満	残存高30mm	軽石粒	外面：連珠・菊花の印文。	
143	12		瀬戸・美濃系陶器	皿	体下位～高台部	1/5程度	復原高台径41mm 残存高9mm	白・黒色粒子	外面：一部灰釉付着。	削出高台。
144	12	11		折縁皿	口縁～体中位	1/6程度	復原口径98mm 残存高16mm		外面：灰釉施釉。 内面：灰釉施釉。	
145	12	11		折縁皿	口縁～体中位	1/10未満	残存高22mm		外面：灰釉施釉。 内面：灰釉施釉。蓮弁文。	
146	12	11		菊皿	口縁～体下位	1/10未満	残存高29mm		外面：長石釉（志野釉）施釉。 内面：長石釉（志野釉）施釉。	
147	12	11		丸皿	口縁～底部	1/6程度	復原口径96mm 復原底部径59mm 器高32mm	石英	外面：長石釉（志野釉）施釉。 内面：長石釉（志野釉）施釉。	削出高台。
148	12	13		輪禿皿	体下位～高台部	1/3程度	復原底部径40mm 残存高22mm	白色粒子	外面：体下位灰釉施釉。 内面：幅9mm程度を環状に残し灰釉施釉。	削出高台。
149	12			皿?	底～高台部	1/4程度	復原高台径94mm 残存高18mm		底内面：灰釉施釉。同心円状の沈線文。 底外面：回転糸切痕。放射状に刻みを入れる。	胎土は須恵質。貼付高台。
150	12	12		天目茶碗	口縁～体中位	1/10未満	残存高49mm	黒色粒子	外面：鉄釉施釉。 内面：鉄釉施釉。	
151	12	12		天目茶碗	口縁～体中位	1/10未満	残存高34mm	黒色粒子	外面：鉄釉施釉。 内面：鉄釉施釉。	
152	12	8		鉢	口縁部	1/10未満	残存高33mm	長石・石英		
153	12	12		擂鉢	口縁部	1/10未満	残存高27mm		外面：鉄釉施釉。 内面：鉄釉施釉。	
154	12	12		擂鉢	口縁部	1/10未満	残存高30mm	長石	外面：鉄釉施釉。 内面：鉄釉施釉。	
155	12	13		仏餉具	皿下位～脚部	1/2程度 ほぼ1/1	脚裾径52mm 残存高46mm	白色粒子	外面：皿下位～脚中位灰釉施釉。 内面：皿下位灰釉施釉。	
156	12	12		片口鉢	注口・口縁～胴上位	1/3程度 1/10未満	残存高51mm		外面：灰釉施釉。 内面：灰釉施釉。	
157	12	12		練鉢	口縁～胴上位	1/6程度	復原口径142mm 残存高30mm	白色粒子	外面：灰釉施釉。 内面：灰釉施釉。	
158	12	13		八角形香炉	体下位～底部	1/3程度	復原底部径68mm 残存高25mm	白色粒子	外面：ヘラケズリ調整で面取。鉄釉施釉。	
159	12	13		壺	口縁～頸上位	1/5程度	復原口径50mm 残存高33mm	白色粒子	外面：口縁部鉄釉施釉。 内面：鉄釉施釉。	
160	12	13		瓶	口縁～頸部	ほぼ1/1	口径28mm 頸径28mm 残存高75mm		外面：口縁部鉄釉施釉。 内面：鉄釉施釉。	
161	12	13	肥前系磁器	丸碗	体中位～底～高台部	1/10未満 1/2程度 1/3程度	復原高台径40mm 残存高31mm		外面：体部二重の網目文。高台部3条の線文 内面：体部網目文。	（染付）
162	12	13		筒形碗	体部	1/7程度	復原最大径74mm 残存高41mm		外面：菊花文。 内面：見込に2条の圏線	（染付）
163	12	13		碗	底～高台部	ほぼ1/1	高台径40mm 残存高11mm		外面：高台部3条の線文 内面：見込に2条の圏線。中央に退化した五弁花文。	（染付）
164	12	13		瓶	頸下位～胴中位	1/10未満	復原最大径58mm 残存高50mm		外面：蛸唐草文。内面：無釉。	（染付）銚子。
165	12	14	土製品	土器片加工円盤			最大径34mm 厚9mm	石英・白・黒色粒子	周囲を研磨。	弥生土器または土師器片を素材とする。
166	12	14		土器片加工円盤			最大径27mm 厚8mm		周囲を研磨。内外面ともに鉄釉施釉。	瀬戸・美濃系擂鉢片を素材としている。
167	12	14		土器片加工円盤			最大径32mm 厚9mm		周囲を研磨。内外面ともに鉄釉施釉。	瀬戸・美濃系擂鉢片を素材としている。
168	12	14		土人形?			残存高20mm	石英・赤・黒色粒子		中空に形成。

第４表　瓦観察表

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	計測値	色調 内面	色調 外面	胎土含有物	文様・器面調整	備考
169	13	9	古代瓦	軒丸瓦	最大厚37mm	N5/ 灰色	N5/ 灰色	軽石粒・輝石	蓮華文。中房２段。蓮子の配置は推定１＋６。	外皮内部　2.5YR5/6明赤褐色。 内部　5BG5/1青灰色。
170	13	9		平瓦	最大厚15mm	2.5Y7/2 灰黄色	5YR6/1 褐灰色	軽石粒・ 3mm未満の砂礫	凹面：布目。凸面：ナデ調整。	端面凸面側縁を面取り。
171	13	9		平瓦	最大厚20mm	7.5GY6/1 緑灰色	7.5GY5/1 緑灰色	軽石粒	凹面：布目。凸面：ヘラナデ調整。	内部　5YR6/4にぶい橙色。
172	13	9		平瓦	最大厚20mm	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	軽石粒・ 8mm未満の砂礫	凹面：布目。凸面：ヘラナデ調整。	内部　5YR7/3にぶい橙色。
173	13	9		平瓦	最大厚21mm	N5/1 灰色	5GY4/1 暗オリーブ灰色	軽石粒	凹面：布目。凸面：ヘラナデ調整。	
174	13	9		平瓦	最大厚36mm	N4/1 灰色	5YR3/2 暗赤褐色	軽石粒・輝石	凹面：布目。凸面：格子目。	内部　10R6/8赤橙色。
175	13	9		平瓦	最大厚21mm	10BG4/1 暗緑色	10BG5/1 緑灰色	軽石粒	凹面：布目。凸面：格子目。	内部　2.5YR5/6明赤褐色。
176	13	9		平瓦	最大厚14mm	5B5/1 青灰色	5B5/1 青灰色	軽石粒	凹面：布目。凸面：格子目。	内部　10R5/4赤褐色。
177	13	9		平瓦	最大厚19mm	7.5Y6/1 灰色	7.5Y6/1 灰色	軽石粒	凹面：布目。凸面：格子目。	
178	13	14	近世瓦	軒丸瓦	最大厚29mm	2.5YR5/1 黄灰色	2.5YR6/3 にぶい黄色	白・赤色粒子	巴文＋連珠文。	

第５表　石器・石製品観察表

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	計測値	特長	備考
179	9	3	石器	敲石	残存長137mm 残存幅61mm 残存厚37mm	端部に敲痕。	輝石安山岩円礫を素材とする。
180	9	3		敲石	残存長48mm 残存幅86mm 残存厚19mm	端部に敲痕。	閃緑岩円礫を素材とする。
181	9	8	石製品	石製模造品 （有孔円板）	長径28mm 短径25mm 厚２mm	円形の回転穿孔（径1.5mm程度）２箇所。	滑石製。
182	9	8		管玉	残存長21mm 幅８mm 孔径２mm		碧玉製。
183	9	14	石器	砥石	推定径５cm程度の 楕円板状の砥石。 最大厚16mm	全面に擦痕。側面４条、反対側側面１条、平面端部に３条の棒状痕（石材切り出しの際の楔痕か?）。 片側平面浅いＶ字状の砥石使用に伴う消耗。	軽石製。
184	9	14		砥石	長径78mm 短径22mm 最大厚16mm	全面に擦痕。方側面１条棒状痕（石材切り出しの際の楔痕か？）。	軽石製。
185	9	14		硯	残存長68mm 残存幅32mm 縁部厚10mm		粘板岩製。
186	9	14		火打石	残存長11mm 残存幅13mm 縁部厚10mm	多方向より打撃痕。	瑪瑙製。
187	9	14		火打石	残存長11mm 残存幅15mm 縁部厚３mm	多方向より打撃痕。	瑪瑙製。

第６表　金属製品観察表

番号	挿図番号	図版番号	内容	器種	計測値	特長	備考
188	15	2	金属製品	小銅鐸	器高126mm 鈕高28mm 舞部長径34mm 舞部短径25mm 最大幅69mm 裾部短径39mm	文様：鈕　　突線表現。 　　鰭　　突線表現？ 　　鐸身　過半部に横帯の綾杉文。 型持孔：表裏の上半及び下縁に２箇所ずつ計８箇所設定。Ａ面右下縁部は、型持孔が開けられていないが、内面側に未穿孔の型持孔の凹型が確認される。	銅製。 全体的に銅の湯まわりが悪く、本体は、薄い（鈕、鐸身にある型持孔以外の孔は、金属腐食によるものではなく、湯まわり不良によるもの）。
189	15	3		銅釧 再加工品	長径44mm 展開長108mm 器高10mm 器厚２mm	断面楔形。 推定径6.5cm程度の帯状円環型銅釧をほぼ半分に切断した後、その片方を大きく３箇所を屈折し、環状に再加工。	銅製。
190	15	14		刀子	全体残存長106mm 刃部残存長66mm 刃部最大幅17mm 刃部最大厚３mm 柄部長40mm 柄部最大幅13mm 柄部最大厚２mm		鉄製品。 刃部先端浅く折曲。
191	15	14		銭貨 （聖宋元寳）	径23.2mm 孔径7.0mm	銭銘行書体。	銅銭。 初鋳年は　北宋建中靖国元（1111）年。
192	15	14		煙管 （吸口）	全長56mm 最大幅９mm		真鍮製。 内部にラウ竹の一部が炭化して残存。 銜部楕円形。噛み潰しによるものか?
193	15	14		煙管 （吸口）	全長64mm 最大幅11mm		真鍮製。 内部にラウ竹の一部が炭化して残存。 銜部窄まる。

第７表　木製品観察表

番号	挿図番号	図版番号	器種	残存部位	残存率	計測値	木取り	樹種	文様・特長	備考
194	16	15	蓋	天井部～体下位	9/10程度	残存高32㎜	横木取り	ブナ属	外面：黒漆塗布。把手見込草花文様、体部に３箇所丸に橘の文様配置。 内面：赤漆塗布。	標本No.12844
195	16	15	蓋	把手～縁部	9/10程度	器高32㎜ 把手幅46㎜ 縁幅113㎜	横木取り	ブナ属	外面：黒漆塗布。菊花葉文様描かれている。 内面：赤漆塗布。	標本No.12843
196	16	15	椀	体上位～高台部	9/10程度	高台径48㎜ 残存高30㎜	横木取り	ブナ属	外面：黒漆塗布。体部に３箇所丸に四つ菱の文様を配置する。 内面：赤漆塗布。	標本No.12842
197	16	15	椀	体上位～高台部	ほぼ1/1	最大幅104㎜ 残存高63㎜	横木取り	ブナ属	外面：赤漆塗布。 内面：赤漆塗布。	標本No.12840
198	16	15	椀	体中位～底部	ほぼ1/1	残存高24㎜	横木取り	ブナ属	外面：赤漆塗布。 内面：赤漆塗布。	標本No.12841
199	16	16	皿	口縁～高台部	ほぼ1/1	復原口径172㎜ 底径98㎜ 残存高33㎜	横木取り	ケヤキ		標本No.12839
200	16	16	槽	口縁～体中位	1/10未満	残存高123㎜ 口縁部厚25㎜	横木取り	ケヤキ		標本No.12838
201	17	16	箸		ほぼ1/1	長207㎜ 幅5×7㎜	削り出し	スギ		標本No.12862
202	17	16	箸		ほぼ1/1	長241㎜ 幅7×9㎜	削り出し	モミ属		標本No.12861
203	17	16	箸		ほぼ1/1	長261㎜ 幅6×10㎜	削り出し	スギ		標本No.12863
204	17	16	しゃもじ？			長188㎜ 最大幅62㎜ 厚8㎜	柾目取り	クリ		標本No.12864
205	17	16	柄杓			側板最大径59㎜ 高54㎜ 厚2㎜ 柄残存長129㎜ 最大幅10㎜	側板 …柾目取り 柄 …削り出し 四角棒	側板 …ヒノキ 柄 …トウヒ属	底板消失。側板上端部を丸く削り注ぎ口を作る。側板綴じ合せに３㎜幅の樺紐を使用。先端を尖らせた柄をその脇より貫通させ、内側で木釘を打ち、柄先端を反対側の側板に差し込み固定。	側板 …標本No.12865 黒漆塗布？ 柄 …標本No.12866 黒漆塗布？
206	17	16	底板 転用 俎板			径231㎜ 残存幅85㎜ 厚10㎜	板目取り	サワラ	平面周縁変色。元は底板。表裏両面に刃痕が残る。	標本No.12880 漆塗。
207	18	15	下栓		ほぼ1/1	長138㎜ 幅24㎜ 厚20㎜	削り出し	ヒノキ	持手部横断面隅を落とした方形。途中より先端にかけ、円錐状に加工。	標本No.12845
208	18	15	下栓		ほぼ1/1	長111㎜ 幅19㎜ 厚17㎜	削り出し	ヒノキ	持手部横断面隅を落とした方形。途中より先端にかけ、円錐状に加工。 先端より37㎜まで黒く変色。	標本No.12846
209	18	15	下栓		ほぼ1/1	長105㎜ 幅19㎜ 厚17㎜	削り出し	ヒノキ	途中より先端にかけ、円錐状に加工。	標本No.12847
210	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径24㎜ 高23㎜	削り出し	ヒノキ		標本No.12854
211	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径29㎜ 高16㎜	削り出し	ヒノキ		標本No.12852
212	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径30㎜ 高15㎜	削り出し	ヒノキ		標本No.12860
213	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径32㎜ 高23㎜	削り出し	スギ		標本No.12857
214	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径34㎜ 高19㎜	削り出し	ヒノキ		標本No.12849
215	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径29㎜ 高27㎜	削り出し	スギ		標本No.12856
216	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径30㎜ 高37㎜	削り出し	スギ		標本No.12848
217	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径40㎜ 高31㎜	削り出し	ヒノキ		標本No.12851
218	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径50㎜ 高27㎜	削り出し	スギ		標本No.12859
219	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径45㎜ 高38㎜	削り出し	スギ		標本No.12850
220	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径51㎜ 高33㎜	削り出し	スギ		標本No.12855
221	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径53㎜ 高32㎜	削り出し	スギ		標本No.12853
222	18	15	上栓		ほぼ1/1	最大径52㎜ 高48㎜	削り出し	スギ		標本No.12858
223	18	17	蓋板		2/5程度	復原径56㎜ 厚3㎜	柾目取り	モミ属	ほぼ中央部に樺紐が貫通して留めてある。	標本No.12867
224	18	17	蓋板		9/10程度	最大径59㎜ 厚2㎜	柾目取り	サワラ	中央に２㎜大の穿孔。	標本No.12871
225	18	17	蓋板		ほぼ1/1	最大径63㎜ 厚5㎜	板目取り	ヒノキ	中央に２㎜大の穿孔。 中心より15㎜の位置に樺紐が貫通して留めてある。	標本No.12872
226	18	17	蓋板		ほぼ1/1	最大径68㎜ 厚5㎜	柾目取り	モミ属	中央に５×２㎜大の穿孔。	標本No.12875
227	18	17	蓋板		ほぼ1/1	最大径71㎜ 厚3㎜	柾目取り	トウヒ属	中央に１㎜大の穿孔。 中心より25㎜の位置に樺紐が貫通して留めてある。	標本No.12873
228	18	17	蓋板		ほぼ1/1	最大径71㎜ 厚2～4㎜	柾目取り	トウヒ属	中央に１㎜大の穿孔。	標本No.12874
229	18	17	蓋板		4/5程度	最大径74㎜ 厚3㎜	柾目取り	トウヒ属	中央に２㎜大の穿孔。	標本No.12870
230	18	17	蓋板		4/5程度	最大径91㎜ 厚5㎜	追い柾 斜め取り	ヒノキ	中央に９×４㎜大の穿孔。	標本No.12869
231	19	17	蓋板		ほぼ1/1	最大径102㎜ 中央円孔径16㎜ 厚3～7㎜	柾目取り	ヒノキ	中央の円孔を挟み、２箇所樺紐が貫通して留められている。	標本No.12876 焦げ。
232	19	18	蓋板		ほぼ1/1	最大径112㎜ 厚6㎜	板目取り	サワラ	中央に樺紐が貫通して留められる。	標本No.12877 黒漆塗布？
233	19	17	蓋板		ほぼ1/1	最大径109㎜ 厚9㎜	追い柾 斜め取り	スギ	中央に径４㎜大の木釘が打たれる。 周縁の一部に段状の加工。	標本No.12868
234	19	18	桶 側板		１枚分	長201㎜ 幅44㎜　厚7㎜	柾目取り	イチイ	下端部段状に加工。	標本No.12886 黒漆塗布。
235	19	18	底板		1/2程度	最大径52㎜ 厚x㎜	斜め取り	モミ属	平面周縁の一部変色。	標本No.12882

番号	挿図番号	図版番号	器種	残便部位	残存率	計測値	木取り	樹種	文様・特長	備考
236	19	18	底板		ほぼ1/1	最大径57mm 厚4～8mm	柾目取り	ヒノキ		標本No.12879
237	19	18	底板		ほぼ1/1	最大径62mm 中心部厚8mm 一部縁部厚5mm	柾目取り	ヒノキ	縁部に向かい薄く作られる。	標本No.12881
238	19	18	底板		ほぼ1/1	最大径76mm 厚7mm	柾目取り	ヒノキ		標本No.12878 黒漆塗布。
239	19	18	底板		ほぼ1/1	最大径90mm 厚5mm	柾目取り	トウヒ属		標本No.12883
240	20	19	草履 下駄		9/10程度	長218mm 幅58mm 厚24mm	柾目取り	マツ属	前厚く、後ろ薄くなる。中央部の横断面は舟底形。後緒穴に木釘残存。	標本No.12902
241	20	19	草履 下駄		ほぼ1/1	長213mm 幅65mm 厚18mm	柾目取り	クリ	前厚く、後ろ薄くなる。中央部の横断面は逆凹形。右後緒穴に鼻緒とみられる繊維（撚られた棕櫚状のもの）残存。	標本No.12903
242	20	19	連歯 下駄		9/10程度	長207mm 幅81mm 残存高45mm	板目取り	クリ	一木作り。後緒穴の設定位置は後歯より前。	標本No.12904
243	20	19	連歯 下駄		4/5程度	残存長223mm 幅73mm 残存高34mm	斜め取り	エゴノキ属	一木作り。後緒穴の設定位置は後歯より後ろ。前歯の位置に緒穴でない穿孔が2箇所（うち一つは未貫通）ある。	標本No.12905
244	21	19	差歯 下駄		4/5程度	長183mm 幅77mm 本体厚23mm	組下駄本体 …柾目取り 前歯 …斜め取り 後歯 …斜め取り	組下駄本体 …キハダ 前歯 …キハダ 後歯 …キハダ	組下駄。本体横断面舟底形。後緒穴の設定位置は後歯より前。差歯枘穴無し。	組下駄本体 …標本No.12911 前歯 …標本No.12912 後歯 …標本No.12913
245	21	19	差歯 下駄		4/5程度	残存長202mm 幅82mm 本体厚20mm	組下駄本体 …板目取り 前歯 …板目取り 後歯 …板目取り	組下駄本体 …ケヤキ 前歯 …ケヤキ 後歯 …ケヤキ	組下駄。本体横断面舟底形。 後緒穴無し。 前差歯枘穴3箇所。後差歯枘孔3箇所（いずれも長方形）。	組下駄本体 …標本No.12908 前歯 …標本No.12909 前歯 …標本No.12910
246	21	20	差歯 下駄		4/5程度	長216mm 幅69mm 本体厚24mm	組下駄本体 …板目取り 前歯 …板目取り	組下駄本体 …ケヤキ 前歯 …ケヤキ	組下駄。本体横断面舟底形。 後緒穴無し。 前差歯枘穴3箇所。後差歯枘孔2箇所（右側未貫通）。	組下駄本体 …標本No.12906 前歯 …標本No.12907
247	21	20	差歯 下駄		4/5程度	長204mm 幅76mm 本体厚21mm	板目取り	ヒノキ	組下駄。本体横断面舟底形。 後緒穴の設定位置は後歯より前。 前差歯枘穴1箇所（その脇に釘穴2）。後差歯枘孔1箇所。	標本No.12914
248	21	20	下駄 （差歯部分）		ほぼ1/1	長92mm （差込枘を 除くと80mm） 幅115mm 厚17mm	板目取り	ケヤキ	台形。差込枘2本。	標本No.12915
249	22	20	自在鉤			残存長195mm 残存幅65mm 厚26mm		カエデ属		標本No.12896
250	22	20	錘		3/5程度	長105mm 最大幅46mm 中央幅38mm	芯持ち 削り出し	コナラ節	鼓形に加工。中央の一部に切り込みを入れる。	標本No.12892
251	22	20	紡錘車？		ほぼ1/1	最大径30mm 中央孔径4mm 厚8mm	斜め取り	ヒノキ	中央の穿孔は不整形。裏裏でズレ。	標本No.12885
252	22	20	紡錘車？		4/5程度	最大径48mm 中央円孔径12mm 厚10mm	斜め取り	アカガシ亜科		標本No.12884
253	22	20	刃物柄 （包丁鞘？）			残存長122mm 残存幅33mm 厚12mm	板目取り	イチイ		標本No.12888 漆塗布
254	22	20	鞘			残存長272mm 残存幅35mm	柾目取り	ヒノキ		標本No.12889
255	22	20	鞘			残存長324mm 残存幅28mm	板目取り	ヒノキ		標本No.12890
256	23	21	傘轆轤 （頭轆轤）		ほぼ1/1	最大径54mm 孔径17mm 高40mm	轆轤本体 …芯抜き	轆轤本体 …エゴノキ属 柄 …竹笹類	傘骨を嵌める溝は推定50本前後。傘の柄の一部残存。	轆轤本体 …標本No.12894 柄 …標本No.12895
257	23	21	傘轆轤 （手元轆轤）		4/5程度	最大径52mm 孔径22mm 高62mm	芯抜き	エゴノキ属	傘骨を嵌める溝は推定54本。側面は黒漆を塗布し、下部と溝1条に上から赤漆を塗布。	標本No.12893 赤黒漆塗。
258	23	21	将棋駒		ほぼ1/1	長30mm 幅24mm 厚9mm	斜め取り	カヤ	裏「飛車」、裏「龍」墨書。	標本No.12887
259	23	21	円錐状 木器 （叩き 独楽?）		ほぼ1/1	長46mm 幅28mm	丸木芯持ち 先端部削り出し一部樹皮付	サワラ	上端中央を深さ12mm程度、丸く刳り抜く。	標本No.12891
260	23	21	木彫像		片側腕・ 下半身相当 部を欠損。	残存高69mm 最大幅40mm 最大厚28mm		ヒノキ	頭・腕・胴部を削り出す。	標本No.12918
261	23	21	木彫像			残存高65mm 最大幅23mm 最大厚20mm		ヒノキ	頭・胴相当箇所の横断面は、隅を落とした方形。四肢の作り出しは、確認されない。	標本No.12919
262	24	21	枘材			残存長99mm 幅8×119mm	四角棒	サワラ	端部に枘差込作り出し。	標本No.12898
263	24	21	枘材			長141mm 幅11×15mm	四角棒	スギ	両端に枘差込作り出し。	標本No.12897
264	24	21	枘材			残存長327mm 幅8×13mm	四角細棒 丸枘付	ヒノキ	長方形枘穴2箇所。ほか木釘残存2箇所	標本No.12899
265	24	21	枘材			残存長372mm 幅10×12mm	四角細棒 枘付	ヒノキ	片側端部枘差込作り出し、木釘2箇所残存。反対側長方形枘穴。本体1箇所木釘残存。	標本No.12900
266	24	21	枘材			残存長326mm 幅14mm	四角細棒 枘付	モミ属	片側端部枘差込作り出し、反対側長方形枘穴。	標本No.12901
267	24	21	杭 （転用 加工材）		ほぼ1/1	長508mm 最大径40mm	丸木芯持ち	モミ属	節の残る丸太材使用。先端部潰れ。	標本No.12916
268	24	21	矢板		4/5程度？	残存長628mm 残存幅135mm 厚63mm	芯持ち 削り出し	イヌマキ属	先端部潰れ。表裏側面加工痕残る。	標本No.12917

第Ⅳ章　まとめ

今回の青木原遺跡の調査区は、二次堆積を繰り返していた旧河道埋没箇所であり、近世･近代の整流･護岸用の杭打設を除いて遺構は、検出されず、出土遺物の大多数は、上流からの漂着物と目される。

しかし、包含層最下位では、流磨痕の認められない完形品、比較的残存率の高い個体や重量物といった、埋没時の原位置を大きく動いていないとみられる資料が、弥生時代後期～古墳時代前期において、少数ながら存在する。過去の周辺遺跡の調査結果と合わせて、限定的ながらも、この地点の意味合いを考える。

また、御殿川上流部には、古代寺院・官衙関連遺跡が集中しているが、包含層中から多くの古代瓦が出土している。その搬入経過についても考察を行いまとめに代える。

第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の銅製品出土地点についての考察

調査区東部で弥生時代後期～古墳時代前期に比定される銅製品が比較的近接した地点で２点出土した。小銅鐸（188）と銅釧再加工品（189）がそれであり、小銅鐸は、検出時に鮮やかな金属光沢を残し、銅釧の遺存状況も安定していた。

金属製品であるため、比重が高く、土器片と同じ様に川中で転回する可能性は、小さいが、それでも、水中で流される砂・礫に曝された様な傷は、一切認められなかった。このことから、これら銅製品が検出時まで、まったく空気や流水に触れず、滞水している河岸部に埋没（埋納されていた可能性がある）していたと判断がされる。

この地点にこれら銅製品が置かれた意味について考察を進める。

「小銅鐸」は、弥生時代の本州・四国で盛行した青銅祭器である銅鐸の祖型と目される朝鮮式小銅鐸とその系統に属する品及び、銅鐸の小型品、模倣品を総称する語として使われている。その性格差の確認を措いた上で見える分布域は、九州から関東に及び、いわゆる銅鐸分布圏の外側にも広がっている。また、土坑に埋納することの多い銅鐸と異なり、住居や墓から出土する例が多い。

静岡県内出土の小銅鐸の事例は、６例確認される。その内訳は、西から浜松市伊場遺跡、袋井市愛野向山Ⅱ遺跡、静岡市駿河区有東遺跡、富士市（旧浮島村）陣ヶ沢、沼津市（旧浮島村）閑峯、三島市青木原遺跡の出土例であり、現時点で銅鐸分布圏の太平洋側東限となっている西の屋遺跡（磐田市敷地）から、５地点が東に越えて位置する。

愛野向山Ⅱ、有東、陣ヶ沢、閑峯の小銅鐸は、いずれも断面菱形または、長円形の鈕を備え、鰭を持たず、身の上位に２箇所、表裏で計４箇所に型持ち孔を持つ。鈕・身それぞれの表面に文様は、認められないなどの共通点がある。この種の小銅鐸は、滋賀県南部から南関東にかけ分布域を持ち、分布圏の重複から、三遠式銅鐸の工房で製作された可能性が指摘されている。なお、愛野向山Ⅱ例の内部には、銅鏃転用の舌が入っており、「聞かせる」機能が備わっていた（松井2004）。

これに対し、伊場例は、鰭を持つ（表裏両面の型合わせが若干上下にずれていることから、バリの可能性も指摘されている）特徴から、外縁付鈕式銅鐸または、扁平鈕式銅鐸の小型品・模倣品と見なされている（太田2005・松井2005）。

青木原例は、突線鈕式銅鐸の小型品・模倣品と見なされ、形態上の特徴は、他の静岡県内の事例と一線を期す。近似例は、身外面に綾杉文が縦・横位に巡る千葉県市原市川焼台遺跡１号小銅鐸（第25図住居覆土中より出土）が挙げられる。これは､裾内面の突帯を失っている。「聞くもの」から「見るもの」

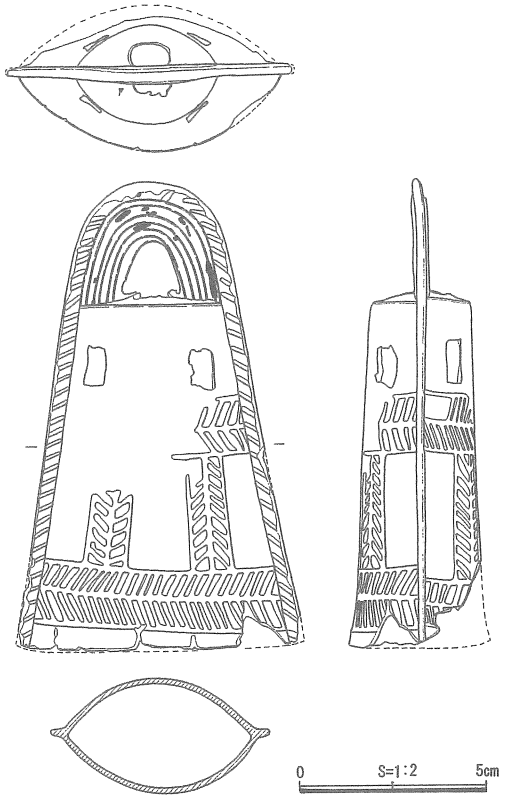
への変質、すなわち舌を用い鳴らす機能の有無を新旧の判断材料とすると、青木原例が古相に位置づけられるが、外見的特長に共通点の多い２点の制作時間差は、少ないとみられる。

今回の調査区の北側に当たる、平成17・18年度に微高地上で行われた青木原遺跡の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期に位置付けられる方形周溝墓が断片的ながら合計３基検出されており、内１基の方形周溝墓の周溝内から、箱清水式土器に比定される甕がほぼ完形の状態で出土している。当該期の中部地方との交流、人・物品の移動を窺わせる。

また、御殿川対岸側に立地する青木Ｂ遺跡では、弥生時代中期後半と後期前半、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されていて、古墳時代前期の外来系土器の受容と在地化について報告・言及がされている（渡井2002）。断続的ながら、川を挟んで南北方向に他地域との関わりを持つ人々の墓域が設定されていることになる。

これら墓域を形成した人々の居住域は、特定されていないが、生産域は、状況的に青木原・青木Ｂ遺跡の北西と南東側に広がる氾濫原がそれに当たるとみられる。

人々の移動・活動の起点・原点となる、墓域と生産域の交差部は、死と生の世界の交差部とも言え、祭器を据え置く場所として相応しいと言える。



第25図　川焼台遺跡出土１号小銅鐸

『千原台ニュータウンXXI』(2009)より転載

第２節　古代瓦の搬入経過についての考察

伊豆北地域の遺跡では、近接して古代寺院・官衙関連遺跡が無いにもかかわらず、古代瓦が出土する事例が数多くあるが、今回の青木原遺跡の調査でも包含層中より、古代瓦がプラスチックコンテナ２箱分出土した。

これらは、御殿川旧河道に落ち込んでいたもので、上流部より流下して来たものと考えられる。

出土した古代瓦のほとんどは、平瓦であったが、市ヶ原廃寺出土瓦と共通の特長を持つ軒丸瓦が１点検出されている。市ヶ原廃寺は、御殿川上流東岸側の大場川との間の微高地のほぼ中央に立地していたと想定されているので、周塀部分も含め、建物の崩落に伴った瓦の御殿川への自然流出は、考えにくい。

人為的となれば、寺の修理・建て替え時に発生した不要瓦の川への投棄が浮かび上がる。傍証になるか微妙であるが、出土瓦片の大きさは、皆、拳大か、それより小さくなっていながら、破面の流磨がそれ程発達していない個体が多い。廃棄場所への運搬を簡便にするため、細かくする破砕作業が行われた可能性が指摘される。

現地調査及び本報告書の作成にあたっては、以下の方々に御指導・教示・助言を頂いた。ここに記して御礼申し上げる。（50音順　敬称略）

芦川忠利　　土屋了介　　松井一明　　村上　隆

〈参考文献・報告書〉

芦川忠利　㈱東日　2006「第１章　発掘調査　第２節　青木原遺跡第２地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告ＸＩ』　三島市教育委員会

池田　治　2004「東日本の弥生銅釧　―帯状円環型銅釧の地域的特色と製作地推定―」
『白門考古論叢　稲生典太郎先生追悼考古論集』中央考古会・中央大学考古学研究会

池谷初恵　芦川忠利　1996『西大久保・奈良橋向遺跡　―日清プラザ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』
三島市教育委員会

岩名建太郎　小川とみ　鈴木三男　2007　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第172集
『青木原遺跡　平成9・10年度一級河川御殿川人にやさしい地域づくり河川整備事業
平成16・17・18年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

臼居直之　2000「再生される銅釧　―帯状円環型銅釧に関する一視点―」
『長野県埋蔵文化財センター紀要８』　長野県埋蔵文化財センター

太田好治　2005「伊場遺跡出土の小銅鐸」『浜松市博物館報』第17号　浜松市博物館

大橋康二　1993　考古学ライブラリー55『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

佐藤由起夫　萩野谷正宏　篠原和大　2002「第Ｉ部　各地域の様式と編年　５　遠江・駿河地域　(4)　東駿河地域」
『弥生土器の様式と編年　東海編』　加納俊介　石黒立人編　木耳社

佐野五十三　岩本　貴　1998　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第104集
『御殿川流域遺跡群Ⅳ　平成７・８年度一級河川御殿川小規模河川改良工事に伴う埋
蔵文化財発掘調査報告書　鶴喰広田・中手乱遺跡』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

杉浦幸雄　1995　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第67集
『御殿川流域遺跡群Ⅲ　平成６年度一級河川御殿川小規模河川改良工事に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書　鶴喰前田遺跡』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木敏中　2003「第３章　主要遺跡の概要　上才塚遺跡　中島Ｂ遺跡　塔ノ森廃寺　市ヶ原廃寺
伊豆国分寺跡」
「第４章県内寺院・官衙の諸様相　第１節　伊豆国と駿河国東部」
静岡県文化財調査報告書第57集『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』　静岡県教育委員会

鈴木敏中　岡本範之　前嶋秀張　池谷初恵　2004「第１章　発掘調査　第１節　中島Ｂ遺跡上舞台地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告Ⅸ』　三島市教育委員会

鈴木敏中　佐々木知子　渡井英誉　2002「第１章　発掘調査　第２節　青木Ｂ遺跡」
『三島市埋蔵文化財調査報告Ⅶ』三島市教育委員会

秩父重昭　山内昭二　鈴木敏中ほか　1983　三島市文化財調査報告第３集『中島下舞台遺跡』　三島市教育委員会

寺田光一郎　2007「第１章　試掘・確認調査　第１節　青木原遺跡第１地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告ＸⅡ』　三島市教育委員会

寺田光一郎　鈴木敏中　2009「第１章　発掘調査　第１節　青木原遺跡第４地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告ＸⅣ』三島市教育委員会

富樫雅彦　徳澤啓一　1995「小銅鐸の基礎的研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第11輯
國學院大學考古学資料館

中野晴久　1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」
『全国シンポジウム　「中世常滑焼をおって」資料集』
日本福祉大学知多半島総合研究所

蜂屋孝之　白井久美子　西川博孝　2009　千葉県教育振興財団調査報告610集
『千原台ニュータウンXXI　―市原市川焼台遺跡(上層)―』
独立行政法人都市再生機構　財団法人千葉県教育振興財団

橋本敬之　1993　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第44集
『御殿川流域遺跡群Ⅰ 平成２・３年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書　中島西原田遺跡　八反畑前田遺跡　梅名大曲田遺跡』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

1994　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集
『御殿川流域遺跡群Ⅱ 平成２・３年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋
蔵文化財発掘調査報告書　中島西原田遺跡　八反畑前田遺跡　梅名大曲田遺跡』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

原　廣志　1999「第Ⅲ章　調査の概要　第４節　遺跡関係(考古学関連)―横地氏関連遺跡群と周
の特徴について―　１）舶載陶磁器の分類について」
『横地城跡　―総合調査報告書―』　菊川町教育委員会

比田井克仁　1991「関東における「小銅鐸」祭祀について」『考古學雑誌』第86巻２号　日本考古學會

藤澤良祐　1996「中世瀬戸窯の動態」『(瀬戸市埋蔵文化財センター設立５周年記念シンポジウム
古瀬戸をめぐる中世陶器の世界　～その生産と流通～)　資料集』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

松井一明　1989「静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の小銅鐸」『考古學雑誌』第75巻２号
日本考古學會

2004「小銅鐸と銅鐸祭祀」『季刊考古学』第86号　㈱雄山閣

2005「伊場遺跡出土小銅鐸にかんするコメント」『浜松市博物館報』第17号　浜松市博物館

森　威史　武田英俊　1992『上才塚遺跡第１地点 ―中高層住宅建設に伴う発掘調査報告書―』三島市教育委員会

森　威史　山田芳治　小金澤保雄　1994『花坂島古窯址発掘調査報告書』　伊豆長岡町教育委員会

付編１　静岡県三島市青木原遺跡出土木材の樹種

小川とみ・小林和貴・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県三島市南二日町の青木原（あおきばら）遺跡から出土した近世の木材82点の樹種を調べた。青木原遺跡は標高18mほどの扇状地～沖積平野に相当する位置にあり、御殿川の河川改修工事に伴って発掘されたものである。それらの材は曲物、椀、柄杓や桶樽類の栓など（容器類）が44点、箸が３点、下駄が14点、土木材、部材がが７点、その他傘の轆轤、刀の鞘、木彫像、紡錘車、将棋の駒、自在鉤など様々な木器類が14点である。これらの材から18もの樹種が同定された。これらの樹種の識別の根拠となった形質について略記し、2006年度に報告した青木原遺跡出土の中・近世の木材の結果も合わせて用材等について考察を試みた。

同定された樹種

１　モミ属　Abies　　マツ科

写真図版Ⅰ:１a～c（木材番号12867）

垂直・水平両樹脂道とも持たない、年輪が明瞭な針葉樹材。仮道管は整然と並び、早材から晩材への移行は緩やかでスギに似る。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁に多くの単穿孔（モミ型壁孔）がみられる。分野壁孔は小型のスギ型で、一分野に２から４個ある。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

我が国に分布するモミ属には北海道のトドマツから、亜高山帯のアオモリトドマツ、シラベ、冷温帯のウラジロモミ、暖温帯のモミがあり、材構造は互い似よく似ていて、材構造での樹種の識別は出来ないが、本州、四国、九州の低山地から山地帯に広く分布するモミ Abies firma Siebold et Zucc. がもっとも普通なものである。モミは成長が早く、幹がまっすぐに立つので大材が得易く、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多いようである。当遺跡出土のモミ属材は曲げ物の蓋３点、箸１点と、枘のある部材１点、杭１点であり、蓋、箸はそれぞれヒノキ、スギの代用とも言える。

２　トウヒ属　Picea　マツ科

写真図版Ⅰ:２a～c（木材番号12883）

水平・垂直の両樹脂道をもつ針葉樹材で、晩材は量多くなく、早材から晩材への移行はゆるやか。早材の仮道管径は小型で、晩材とは壁厚の変化によって区別される。放射組織の上下縁辺には放射仮道管があり、孔口の狭い有縁壁孔が見られ、その断面は角張ることからカラマツから区別される。分野壁孔はトウヒ型で小さく、１分野に２～５個ある。これらの形質からトウヒ属の材と同定した。

本州中部に分布するトウヒ属の樹木にはトウヒ、バラモミ、ハリモミなど幾つかの種があるが、量的にやや多いのはトウヒである。これらは冷温帯から亜高山帯にかけて生育することと現在でもほとんど植林はされていないことからから、奥地の天然林を伐りだして木材を商品として流通させたものと考えられる。材は木理通直、割裂性が良く、軽軟で切削加工が容易で仕上がりは美しい。本遺跡出土材は曲げ物の蓋４点と漆塗り柄杓の柄１点で、いずれもヒノキの代用と言える。

３　マツ属　Pinus　マツ科

写真図版Ⅰ:３a～c（木材番号12902）

表１　平成22年度　青木原遺跡　樹種同定一覧表

標本No.	掲載番号	取上番号	樹　種	器種１	器種２	部　位	木取り	備　考	時　期
12838	200	1972	ケヤキ	刳物	槽	①本体	横木	塗無し	近世
12839	199	4056	ケヤキ	皿		①本体	横木	塗無し	近世
12840	197	1705	ブナ属	漆椀		①本体	横木	内外赤	近世
12841	198	3683	ブナ属	漆椀		①本体	横木	内外赤	近世
12842	196	2657	ブナ属	漆椀		①本体	横木	内赤外黒家紋付	近世
12843	195	2001	ブナ属	漆薹	漆皿	①本体	横木	内外黒高台裏赤加飾	近世
12844	194	3522	ブナ属	漆薹	漆皿	①本体	横木	内赤外黒	近世
12845	207	5352	ヒノキ	栓（棒状）	下栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12846	208	194	ヒノキ	栓（棒状）	下栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12847	209	4695	ヒノキ	栓（棒状）	下栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12848	216	3463	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12849	214	4745	ヒノキ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12850	219	5320	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12851	217	5324	ヒノキ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12852	211	5331	ヒノキ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12853	221	5334	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12854	210	5339	ヒノキ	栓（台形）	上栓（小型）	①本体	削り出し	塗無し	近世
12855	220	479	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12856	215	837	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12857	213	2454	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12858	222	2498	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12859	218	3095	スギ	栓（台形）	上栓	①本体	削り出し	塗無し	近世
12860	212	3444	ヒノキ	栓（台形）	上栓（小型）	①本体	削り出し	塗無し	近世
12861	202	951	モミ属	箸		①本体	削り出し		近世
12862	201	5296	スギ	箸		①本体	削り出し		近世
12863	203	5310	スギ	箸		①本体	削り出し		近世
12864	204	2941	クリ	しゃもじ?		①本体	柾目		近世
12865	205	4094	ヒノキ	柄杓	側板	①杓部（側板）	柾目	黒漆？	近世
12866			トウヒ属		柄	②柄部	削り出し四角棒	黒漆？	近世
12867	223	149	モミ属	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目		近世
12868	233	1427	スギ	円板（薹板）	曲物薹	①本体	追い柾斜め		近世
12869	230	5341	ヒノキ	円板（薹板）	曲物薹	①本体	追い柾斜め		近世
12870	229	3428	トウヒ属	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目		近世
12871	224	2949	サワラ	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目		近世
12872	225	4454	ヒノキ	円板（薹板）	曲物薹	①本体	板目		近世
12873	227	4092①	トウヒ属	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目	4091②と同所出土	近世
12874	228	4092②	トウヒ属	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目	4092①と同所出土	近世
12875	226	3510	モミ属	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目		近世
12876	231	5344	ヒノキ	円板（薹板）	曲物薹	①本体	柾目	焦げ	近世
12877	232	25	サワラ	円板（薹板）	曲物薹	①本体	板目	黒漆？	近世
12878	238	2937	ヒノキ	漆塗円板	曲物底板	①本体	柾目	黒漆	近世
12879	236	4095	ヒノキ	円板	曲物底板	①本体	柾目		近世
12880	206	4535	サワラ	漆塗円板	曲物底板	①本体	板目	漆塗	近世
12881	237	1267	ヒノキ	円板（底板）	曲物底板	①本体	柾目		近世
12882	235	2829	モミ属	円板（底板）	曲物薹	①本体	斜め		近世
12883	239	3509	トウヒ属	円板（底板）	曲物薹	①本体	柾目		近世
12884	252	312	アカガシ亜属	有孔円板	紡錘車	①本体	斜め		近世
12885	251	3111	ヒノキ	有孔円板	紡錘車	①本体	斜め		近世
12886	234	7	イチイ	桶（側板）	桶側板	①本体	柾目	黒漆	近世
12887	258	4671	カヤ	将棋駒		①本体	斜め	飛車	近世
12888	253	202	イチイ	鞘	包丁鞘？	①本体	板目	漆塗	近世
12889	254	4164	ヒノキ	鞘	刀鞘	①本体	柾目		近世
12890	255	2822	ヒノキ	鞘	刀鞘	①本体	板目		近世
12891	259	512	サワラ	円錐状木器	一部樹皮付	①本体	丸木芯持ち	先端部削り出し	近世
12892	250	5349	コナラ節	編錘	木錘	①本体	芯持ち削り出し		近世
12893	257	840	エゴノキ属	傘轆轤	手元轆轤	①本体	芯抜き	赤黒漆塗	近世
12894	256	3235	エゴノキ属	傘轆轤	頭轆轤	①轆轤本体	芯抜き	塗無し	近世
12895			竹笹類		傘の柄	②傘の芯			近世
12896	249	4838	カエデ属	自在鉤		①本体			近世
12897	263	4693	スギ	枘材		①本体	四角棒		近世
12898	262	517	サワラ	枘材		①本体	四角棒		近世
12899	264	5378	ヒノキ	枘材		①本体	四角細棒	丸枘付	近世
12900	265	2655	ヒノキ	枘材		①本体	四角細棒枘付		近世
12901	266	3355	モミ属	枘材		①本体	四角細棒枘付		近世
12902	240	5346	マツ属	下駄（草履下駄）	草履下駄	①本体	柾目		近世
12903	241	3189	クリ	下駄（草履下駄）	草履下駄	①本体	柾目		近世
12904	242	3131	クリ	下駄（連歯下駄）	一木下駄	①本体	板目		近世
12905	243	2947	エゴノキ属	下駄（連歯下駄）	一木下駄	①本体	斜め		近世
12906	246	3049	ケヤキ	下駄（差歯下駄）	組下駄本体	①本体	板目		近世
12907			ケヤキ		前歯	②前差歯残	板目		近世
12908	245	1557	ケヤキ	下駄（差歯下駄）	組下駄本体	①本体	板目		近世
12909			ケヤキ		前歯	②前差歯残	板目		近世
12910			ケヤキ		後歯	③後差歯残	板目		近世
12911	244	3055	キハダ	下駄（差歯下駄）	組下駄本体	①本体	柾目		近世
12912			キハダ		前歯	②前差歯残	斜め		近世
12913			キハダ		後歯	③後差歯残	斜め		近世
12914	247	1879	ヒノキ	下駄（差歯下駄）	組下駄本体	①本体	板目		近世
12915	248	1754	ケヤキ	下駄（差歯）	組下駄歯	①本体	板目		近世
12916	267	1558	モミ属	杭		①本体	丸木芯持ち	加工材杭転用	近世
12917	268	2784	イヌマキ属	矢板		①本体	芯持ち削り出し		近世
12918	260	5348	ヒノキ	木彫像		①本体			近世
12919	261	1686	ヒノキ	木彫像		①本体			近世

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をともに持つ。晩材部は幅広く、早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭である。放射組織には、上下に放射仮道管があるが、細胞壁が劣化しており、鋸歯状肥厚は確認できない。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で普通一分野に一つ存在する。以上の形質より、マツ科のマツ属（複維管束亜属）の材と同定した。

三島市付近でこの出土材の候補となりうる樹種はアカマツかクロマツであるが、細胞壁の劣化によりそのいずれとも決めかねる。2006年の発掘調査報告では近世以降の杭１点がアカマツとして報告されており、今回の材もアカマツである可能性は高い。本遺跡出土材は草履下駄１点である。

4　スギ　Cryptomeria japonica (Linn. f.) D.Don　スギ科

写真図版Ⅱ：4 a～c（木材番号12850）

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急で年輪界は極めて明瞭である。樹脂細胞が晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。分野壁孔は、大型のスギ型で一分野あたり通常２個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。

スギ材は青森県南部から九州屋久島まで広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、大材が得易く、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。当遺跡出土材は桶樽の木栓８点、箸２点、曲げ物の蓋１点、ほぞのある部材１点の合計12点である。

5　ヒノキ　Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科

写真図版Ⅱ：5 a～c（木材番号12872）

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早：材から晩材への移行は急で年輪界は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪の色彩は大きく違わない。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、一分野に２個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島まで分布し、特に中部地方の山地帯に多い。その材はわが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたもので、古代の幾内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。当遺跡出土材は曲げ物の蓋、底板など、桶樽などの木栓、刀の鞘、木彫像、漆塗り柄杓の頭、紡錘車、組み下駄など23点と最も多い。

6　サワラ　Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc.　ヒノキ科

写真図版Ⅱ：6 a～c（木材番号12919）

ヒノキ同様、水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、１分野当たり普通２個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは本州中部の山地に分布し、樹高30m以上、幹径１mになる。ヒノキより成長が早く同じ幹の太さではサワラの方が樹齢が少ない。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に特に強いので桶類に、また、香りが無いので飯びつや箸に用いられる。ヒノキに比べ材質は劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は曲げ物の蓋２点（うち１点は漆塗り）、漆塗り曲物の底板１点、柄のある部材１点、「円錐状木器」１点で

ある。

7　イヌマキ属　Podocarpus　マキ科

写真図版Ⅲ：7a～c（木材番号12917）

材が均質で年輪界のはっきりしない針葉樹材で、早材から晩材への移行は大変緩やかで、晩材部がはっきりと認められない。樹脂細胞が多く、年輪内全体に均一に散在するが、スギ科やヒノキ科のもののように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることはないので、横断面では見つけにくい。また樹脂細胞の水平壁はイヌガヤと違い、薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い単列で、分野壁孔は、小型のヒノキからトウヒ型、一分野あたり１～２個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

我が国にはイヌマキ属は関東地方南部の温暖地に生育するイヌマキとさらに南方に分布するナギの２種があるが、その分布から当遺跡出土材はイヌマキと考えられる。イヌマキの材は硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強い。本遺跡出土材は矢板状1点である。

8　イチイ　Taxus cuspidate Siebold et Zucc.　イチイ科

写真図版Ⅲ：8a～c（木材番号12866）

材が均質で年輪界のハッキリしない針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞を欠き、仮道管と放射組織柔細胞のみからなる。仮道管の内壁には顕著な単独のらせん肥厚がある。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で１分野あたり２～４個ほどある。これらの形質からイチイ科のイチイの材と同定した。

イチイは北海道から九州の山地帯上部に生育する高さ15m、幹径１mにある高木で、亜高山帯には変種の矮生低木であるキャラボクがある。辺材は白く芯材は鮮やかな紅色となり光沢があって美しい材で、やや重硬だが均質で切削加工容易で仕上がりよく、彫刻、工芸材に良く用いられる。本遺跡出土材は漆塗りの包丁の鞘かと思われるもの１点と漆塗りの桶の側板１点で、いずれも特別な用途を感じさせる。

9　カヤ　Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科

写真図版Ⅲ：9a～c（木材番号12887）

年輪界の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は少ない。早材、晩材とも仮道管は整然と並び、樹脂細胞はない。仮道管の内壁には顕著な２～３本ずつまとまったらせん肥厚がある。放射組織は単列で背は低く、分野壁孔は小さなヒノキ型ないしトウヒ型で、一分野あたり２～４個ある。以上の形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イヌマキ、イヌガヤ、イチイに似るが、前二者は年輪が不明瞭で樹脂細胞が均一に散在していること、イヌガヤとイチイは仮道管内壁のらせん肥厚が２～３本づつまとまることはなく、常に単独であること、等により区別される。

カヤは本州から九州にかけての暖温帯に広く分布する針葉樹で、樹高30m、幹径１mになる高木だが、まとまって林を作ることはない。材は均質でやや重硬、弾力があり、割裂性よく切削加工が容易で光沢があり仕上がりがよく、特に優れた材質で、建築材、器具材によく用いられ、特に仏像などの彫刻材によく用いられる。当遺跡出土材は将棋駒１点で，これもカヤの特用である。

10　クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科

写真図版Ⅳ：10a～c（木材番号12903）

年輪の始めに大道管が単独で１～３層に配列し、晩材部にかけて道管は小型、断面多角形で薄壁とな

り、徐々に径を減じ、火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織は接線状～短接線状に配列する。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は対列状、あるいは柵状となる。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道南部から九州まで分布する落葉高木で、樹高25m、幹径１mに達し、また二次林に最も普遍的な樹種の一つである。材はやや硬く、割裂容易で、保存性にすぐれ、特に水湿に強い。大材が得られることもあって建築材、器具材、土木用材など実にさまざまな用途がある。当遺跡出土材は下駄２点としゃもじ１点である。

11　ブナ属 Fagus Fagaceae

写真図版Ⅳ：11a～c（木材番号12842）

小型でやや角張った道管が、単独あるいは２個複合し、均一に密に分布する散孔材で、道管径は年輪の終わりに向かってかなり小さくなる。道管の穿孔は単一あるいは横棒が14本程度の階段状である。放射組織は平伏細胞と上下端のみ直立細胞の異性で、１～14細胞幅からなり、大きな放射組織が目立つ。道管と放射組織間の壁孔は大型のレンズ状である。これらの形質からブナ科ブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州までの温帯に広く分布するブナと、主に本州の太平洋側の温帯に分布するイヌブナがあるが、材構造での区別は困難である。ブナ材は硬く緻密で割裂性はよいが保存性に劣る。イヌブナ材はブナ材より脆い。当遺跡出土材は漆器椀５点でうち２点は椀蓋である。

12　コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科

写真図版Ⅳ：12a～c（木材番号12884）

中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材である。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で比較的目立つ。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、柾目面では特有の紋様をなす。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、常緑の樹種からなる亜属で、アカガシ、シラカシ、イチイガシ、ツクバネガシなど全国の暖温帯以南に広く分布し、照葉樹林を構成している。多数の種があり、材構造での種の識別は出来ていない。材は重硬で粘りがあり、割裂困難で加工性、保存性は中くらいである。本遺跡出土材は紡錘車１点である。

13　コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

写真図版Ⅴ：13a～c（木材番号12892）

年輪のはじめに丸い大道管が間隔をあけて一列に並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁の小道管が散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状、散在状及び独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織で、後者にはしばしば結晶細胞を含む。道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形で柵状に並ぶ。以上の形質からコナラ属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には北海道南部から九州種子島までの冷温帯下部から暖温帯の二次林に広く分布するコナラ、北海道北部から九州までの冷温帯から暖温帯上部に広く分布するミズナラ、主に青森県以南の冷温帯から暖温帯に希に分布するナラガシワ、北海道から九州の冷温帯、暖温帯に分布するカシワなどがあるが、材構造での区別は困難である。コナラは幹径60㎝、樹高20mくらいになる落葉高木で、材質はやや堅く、肌目は粗い。建築材、器具材、薪炭材に用いられる。ミズナラは幹径１m、樹高30mになる落葉大高木

で、材質は大変よく、重硬で緻密なため加工は難しいが木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第1級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材など極めて広い用途がある。ミズナラ、コナラとも薪炭材、椎茸のほだ木に用いられる。当遺跡出土材は編み具の木錘1点のみである。

14　ケヤキ　Zelkova serrata Thunb.　ニレ科

写真図版Ⅴ:14a～c（木材番号12906）

年輪始めに大道管が1層に並ぶ環孔材で、晩材部には薄壁多角形の小道管が多数集まった塊が分布する。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は3～6列の多列で背はあまり高くなくほぼ同性、上下の縁に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県以南の暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径2m、樹高30mをこえる大木となる。材質に優れ、大材が得られることもあって、大きな建造物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、刳物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。特に漆器木地には縄文時代前期以降現在まで一貫して利用されてきている。当遺跡出土材は組み下駄の本体と歯の6点と槽、皿の2点である。

15　カエデ属　Acer　カエデ科

写真図版Ⅴ:15a～c（木材番号12896）

丸い小道管が単独あるいは2ないし数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管密度は低く繊維組織の部分が多い。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密にあり、顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は目立たない。放射組織は1～6細胞幅くらいで同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

カエデ属には多数の種があり、材構造は互いに似ていて区別は困難である。多くは温帯から暖帯に分布している落葉小高木～高木である。材は多くは堅硬で強靱であり、各種器具材、建築材などに用いられ、こけし材などの特用がある。当遺跡出土材は自在鉤1点であり、強靭な材質を活かした利用といえる。

16　キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科

写真図版Ⅵ:16a～c（木材番号12919）

赤褐色状を呈する遺跡出土材で、道管内にしばしば黒褐色の物質が蓄積している。大きな楕円形の道管が年輪はじめに単独あるいは2個複合して数層に配列し、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって斜め接線状の幅広いゾーンをなす環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で、やや間隔をあけて交互状に配列し、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。柔組織は周囲状であまりめだたない。放射組織は2～4細胞幅くらいの同性で、背は低く、板目面で見る輪郭が綺麗な紡錘形となる。これらの形質からキハダの材と同定した。

キハダは北海道から九州にかけての温帯に分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高20mになる。材は柔らかいが強く粘りがあり、木理が美しく加工性も容易な優秀な材である。建築物の装飾的部分、家具、各種器具材などに用いられる。樹皮の内側部分がベルベリンを含んで黄色い「黄檗」で、薬用、染料とされる。当遺跡出土材は組み下駄の本体と歯3点である。

17　エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科

写真図版Ⅵ：17a～c（木材番号12905）

小型で丸い道管が多くは放射方向に数個複合したものが年輪界に向けて徐々に径を減じながら均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は横棒の少ない階段状である。木部柔組織は晩材部で接線状を呈し、放射組織は異性で、１～４細胞幅程度である。以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクが含まれ、いずれも落葉小高木である。最も普通な樹木はエゴノキで本州から沖縄まで広く山野に分布し、材は軽く、白色均質で粘りがあり、切削加工容易で玩具などに用いられる。当遺跡出土材は傘の頭及び手元轆轤と一木下駄の３点である。

18　タケササ類　Bamboo　イネ科

写真図版Ⅵ：18a～b（木材番号12895）

横断面で、向軸側の原生木部腔と、中間にある一対の大きな後生木部道管、背軸側の篩部からなる維管束が不整に配列する木質の材であることからイネ科のタケ亜科の桿であると同定した。桿の直径が数cmを超えるのでマダケなどの竹類と思われる。本遺跡出土材は傘の柄１点である。

出土材の樹種組成

以上の同定結果を、資料番号順に表１に、用途別に表２に示した。

表２では木材の器種や形態から曲物等（曲物、桶などの側板や底、蓋材など）や桶樽（及びそれに用いる木栓）、椀、槽、柄杓などをまとめて「容器」とし、箸、下駄（組み下駄にあっては本体とその歯）、土木材、建具などの部材、「その他」の木器類に分けた。また平成18年度の青木原遺跡の報告書（静岡県埋蔵文化財研究所調査報告172集『青木原遺跡』）に掲載の結果のうち、中・近世の木材30点の結果も「2006年」の欄に合わせて示した。

表２に示すように、タケササ類を含めて82点の木材から18の樹種が同定された。最も多かったのはヒノキの23点で、次いでスギが12点、ケヤキが８点、モミ属（６点）、トウヒ属，ブナ属、サワラ（以上５点）、エゴノキ属、キハダ、クリ（以上３点）、イチイ（２点）、マツ属、イヌマキ属、カヤ、アカガシ亜属、コナラ節、カエデ属（以上１点）となっていて、全体の７割が針葉樹である。それぞれの樹種の用途は各樹種の記載の項で述べているように、それぞれの材質に合った樹種選択がなされていると言って良い。一方、青木原遺跡から出土した中・近世の木材31点について既に報告がなされており、それを表２に合わせて表示してある。既報告分（ヒノキ科としか同定できなかった１点を除いた30点）は今回の82点が全て近世であるのに対し、「中・近世」と言う事で時代幅が若干異なるが、いずれも木材が商業経済の下で流通するようになってからのことであるので、ここでは合わせて扱った。これを合わせると樹種は６種増え、そのうち針葉樹はアスナロ、イヌガヤ、カラマツ属が増えるので、針葉樹の合計は12種で全体の54％となる。

縄文時代以来、人びとは木材資源を大いに活用して生活を営んできたが、弥生時代後半以降の鉄器の普及と古代国家成立期以降の王都造営、都市建築物、寺社の大型木造建築、そして多様な生活木器類等にはコウヤマキ、ヒノキ、スギ、モミなどの天然林を伐りだして利用されてきており、その結果として樹種及び地域によって時期は少しずつ異なるものの、針葉樹の天然資源の枯渇が顕著になってきた。元々天然資源の少なかったコウヤマキは古代の始め頃までには既にまとまった木材供給は出来なくなっていたと看做され、ヒノキは平安期には消費地近くの天然資源は既に枯渇したと言える。静岡県地方では登呂遺跡や山木遺跡に見るように、もともとスギ天然林が平地にもあり、弥生～古代の遺跡はそれらを資

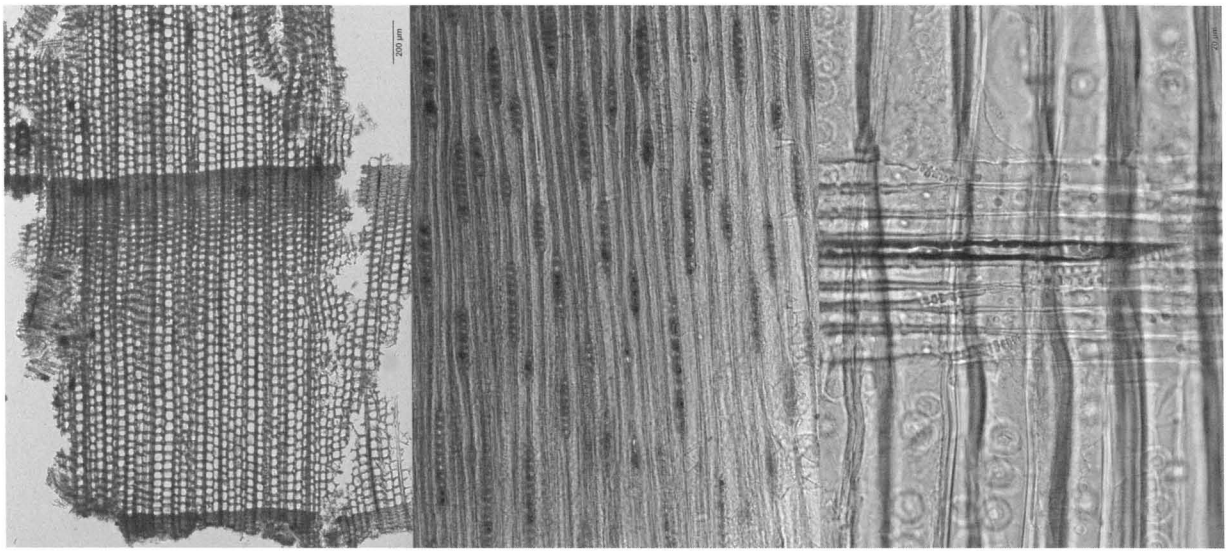
源として「スギ文化」を発展させたが、やはり古代のうちにはスギの平地～低山地の資源は枯渇したことが考えられ、中世以降はスギを中心とした造林・育林が計られてきたといえる。

このような視点から青木原遺跡で利用された針葉樹を見ると、全12種のうち、古代に最も利用されている針葉樹としてヒノキ、サワラ、スギ、モミ属の４種を挙げることが出来る。これらは天然林からの切り出しと共に人工林の生産品であることが考えられる。一方、縄文・弥生時代以来、常に利用されてきている樹種としてカヤ、イヌガヤ、イヌマキを挙げることができよう。これらは決して大量に使われることはなく、天然林あるいは集落内外に自生あるいは植栽したものを探し出して利用してきたと考えられる。これらと性格を異にするのはトウヒ属､カラマツ属である。静岡県地方ではトウヒ属（トウヒ）は中央・南アルプスの冷温帯上部から亜高山帯に生育し、カラマツ属（カラマツ）は富士山の亜高山帯などにあるもので、遺跡近くに生育していたとは言いがたいもので、中世以降の奥地林の開発（伐採）の結果、市場に登場した「新顔」の木材であったことだろう。このように、当遺跡では、近世に至っての天然及び人工林の木材利用と、奥地林開発による木材供給が合わさった形で認めることが出来たと言える。なお、本遺跡では漆塗りの桶と包丁の鞘かと思われるものにイチイ材が使われているが、一般に遺跡からのイチイ材の出土は極めて希で、「漆塗り」というある意味で特別な用途への利用の実例が明らかになった。また、マツ属は１点のみの出土で、近世の他の遺跡ではマツ類の出土例が多くなるのと大きく異なっている。マツ類の出土の増加は一般には近世における自然林の減少に代わるマツ林の拡大の結果と看做されているが、本遺跡での結果は、出土し、調べられた木材の「器種」の偏りによるものか、そもそも青木原遺跡がこの地域で未だマツ林が拡大する以前のものであることに依るのかは不明である。

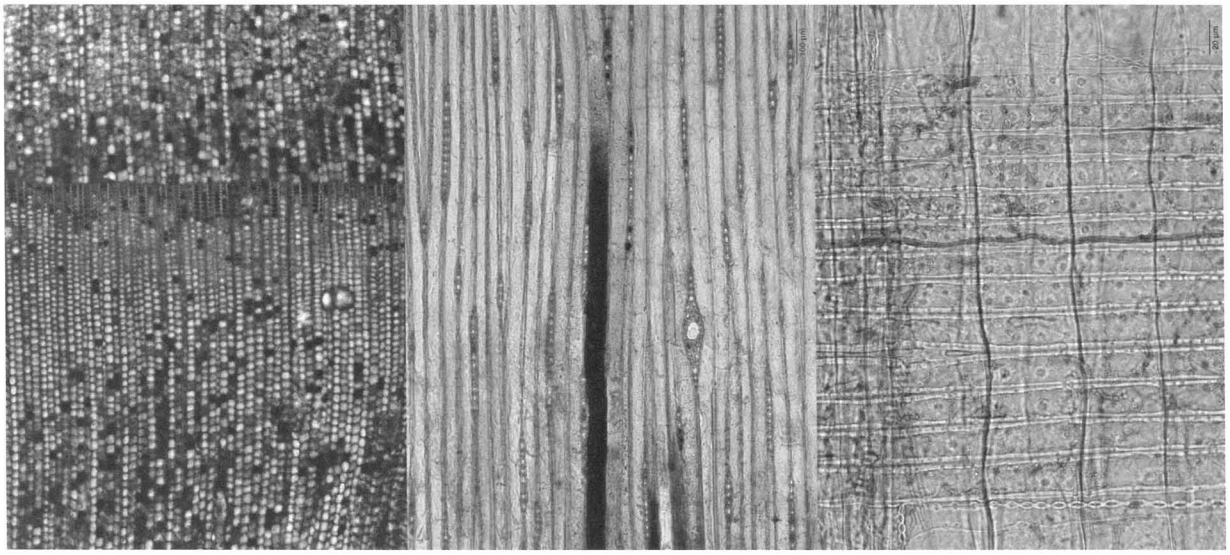
表２　青木原遺跡出土木材の樹種組成

樹　種	容　器	箸	下　駄	土木材	部　材	その他	合　計	2006年
ヒノキ	15		1		2	5	23	9
スギ	9	2			1		12	5
ケヤキ	2		6				8	2
モミ属	3	1		1	1		6	1
トウヒ属	5						5	2
サワラ	3				1	1	5	
ブナ属	5						5	1
エゴノキ属			1			2	3	
キハダ			3				3	
クリ	1		2				3	
イチイ	1					1	2	
カヤ						1	1	1
イヌマキ属				1			1	
マツ属			1				1	
アカガシ亜属						1	1	
カエデ属						1	1	
コナラ節						1	1	
アスナロ								2
ケンポナシ属								2
トチノキ								2
イヌガヤ								1
カツラ								1
カラマツ属								1
竹笹類						1	1	
総　計	44	3	14	2	5	14	82	30

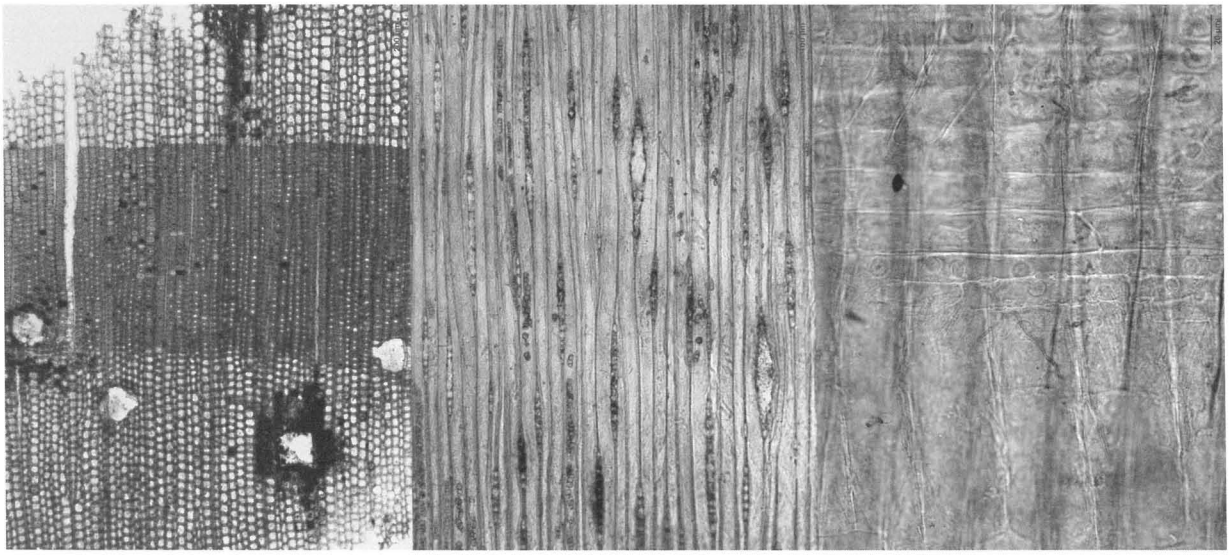
2006年結果からは「ヒノキ科」とされた1点を除いてある



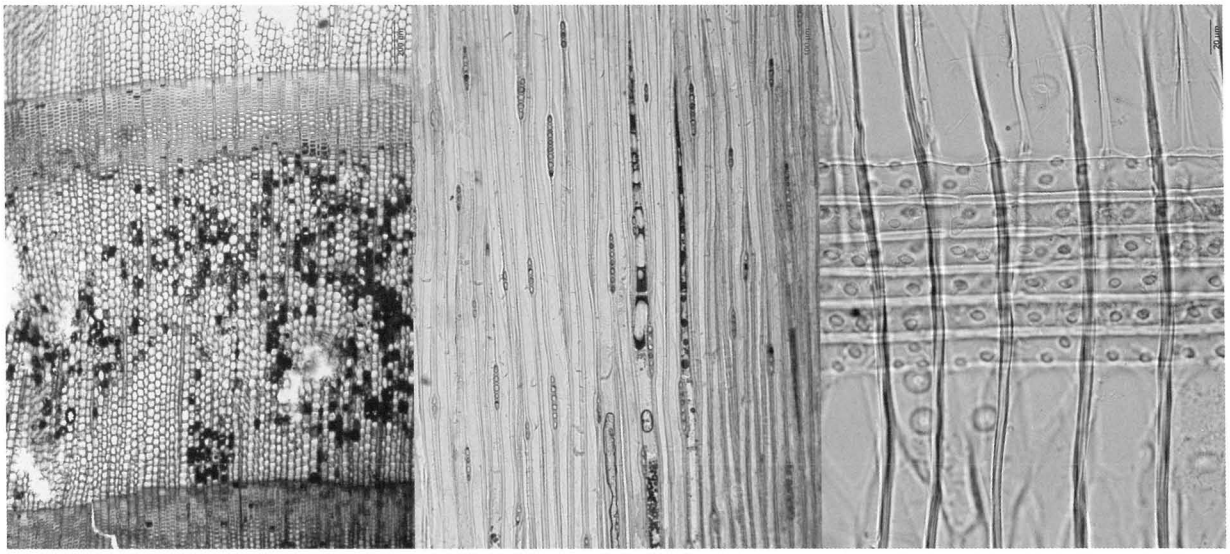
1a. モミ属 12867　木口×30.　　1b.　同　板目×60.　　1c.　同　柾目×240.



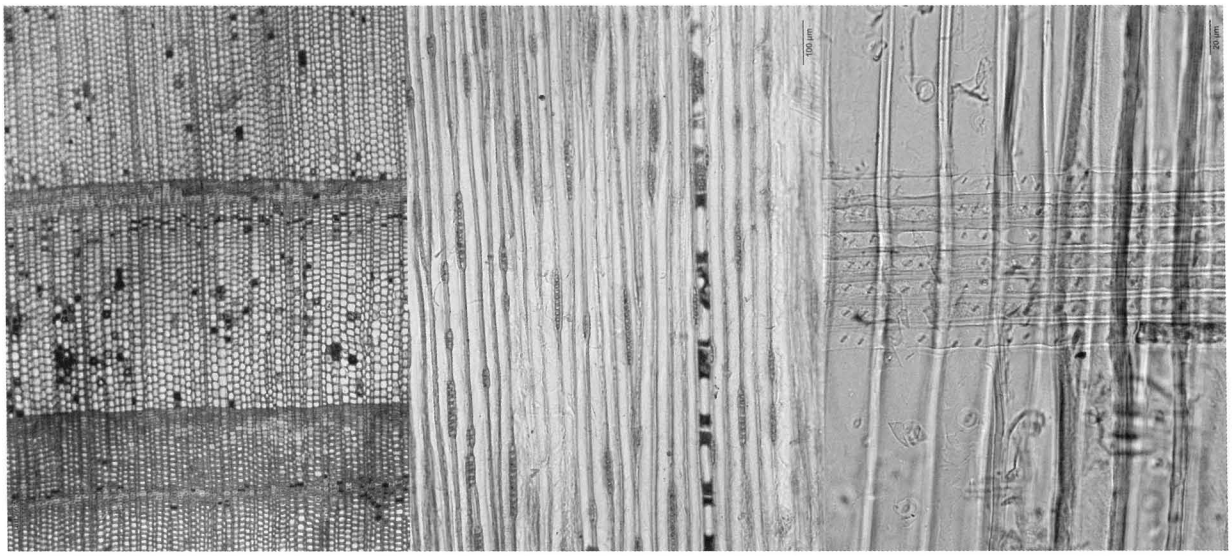
2a. トウヒ属 12883　木口×30.　　2b.　同　板目×60.　　2c.　同　柾目×240.



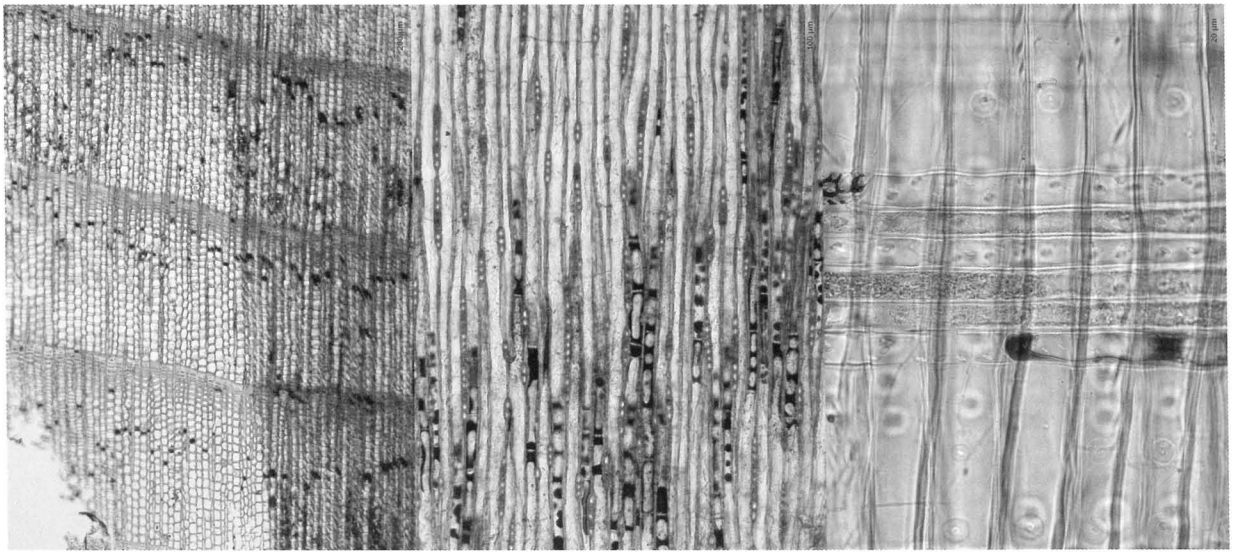
3a. マツ属 12902　木口×30.　　3b.　同　板目×60.　　3c.　同　柾目×240.



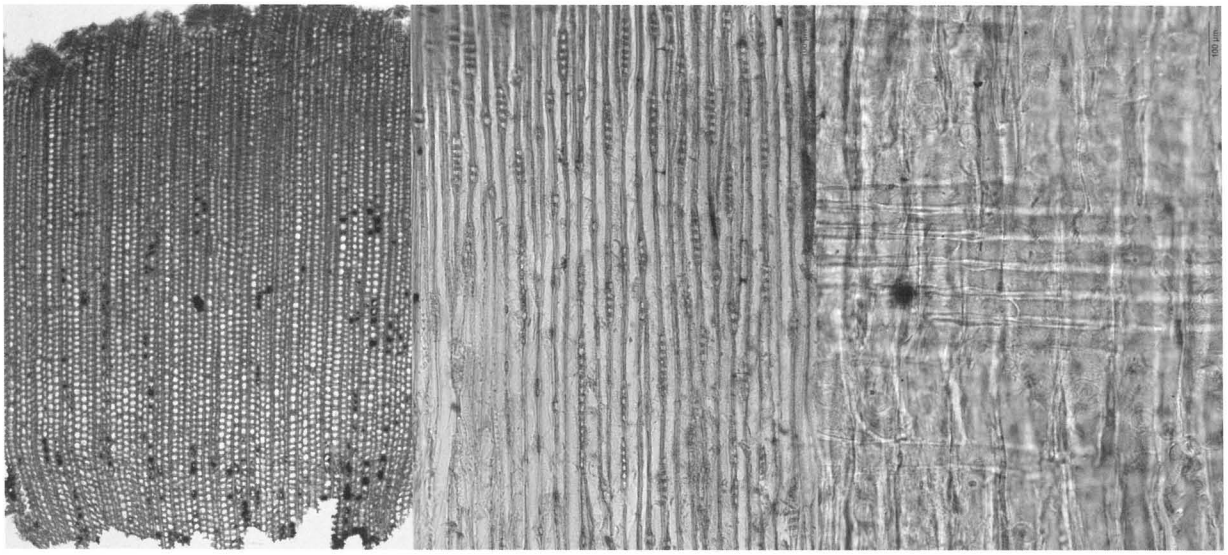
4a. スギ 12850　木口×30.　　4b.　同　　板目×60.　　4c.　同　　柾目×240.



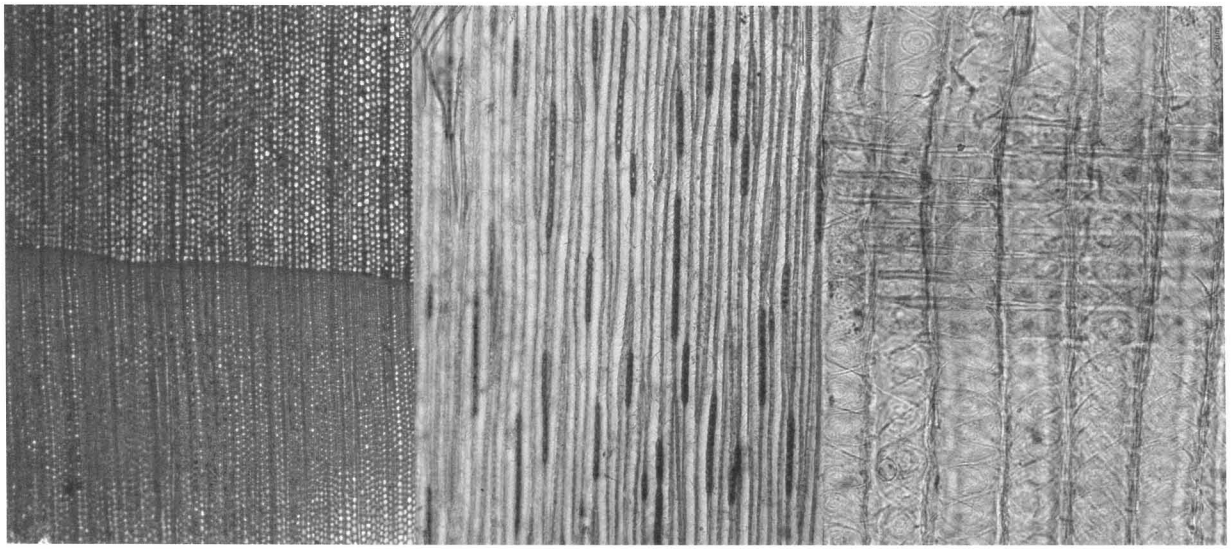
5a. ヒノキ 12872　木口×30.　　5b.　同　　板目×60.　　5c.　同　　柾目×240.



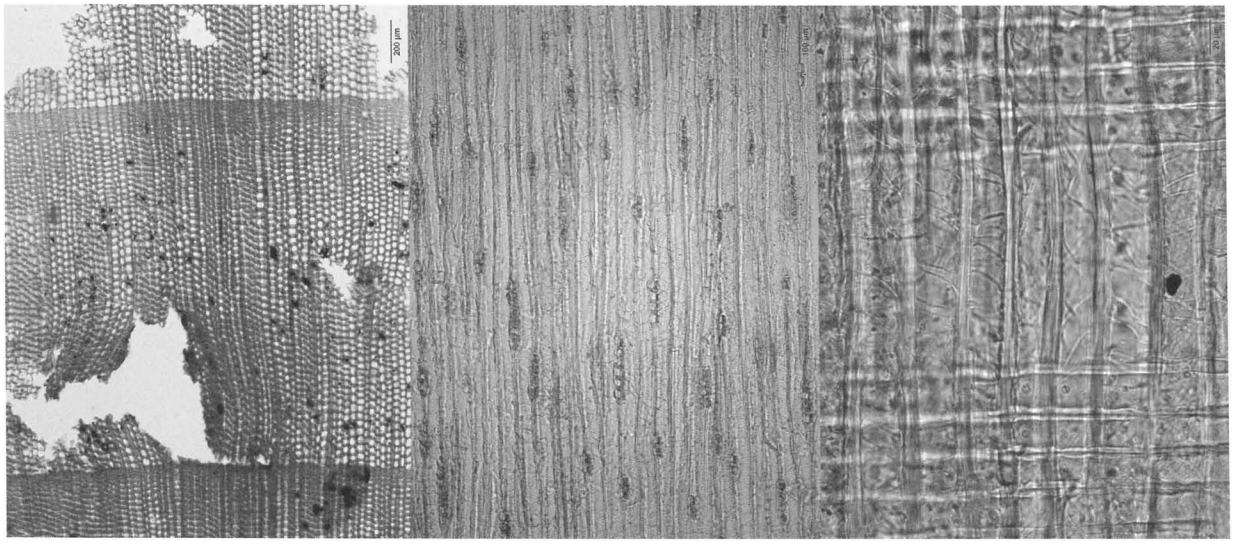
6a. サワラ 12919　木口×30.　　6b.　同　　板目×60.　　6c.　同　　柾目×240.



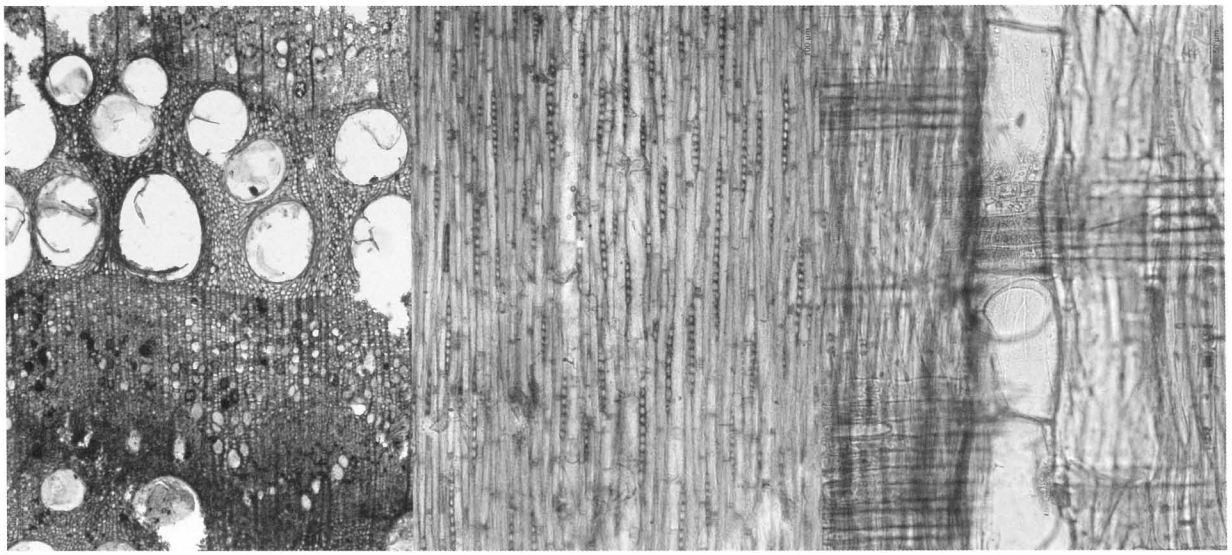
7a. イヌマキ属 12917　木口×30.　　7b.　同　　板目×60.　　7c.　同　　柾目×240.



8a. イチイ 12886　木口×30.　　8b.　同　　板目×60.　　8c.　同　　柾目×240.

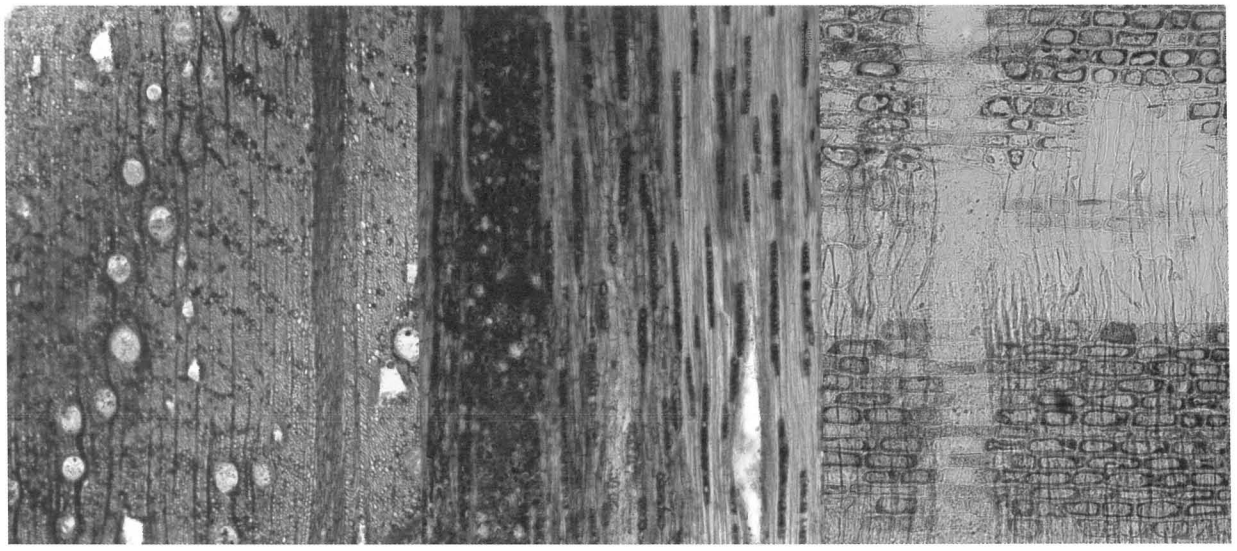


9a. カヤ 12887　木口×30.　　9b.　同　　板目×60.　　9c.　同　　柾目×240.

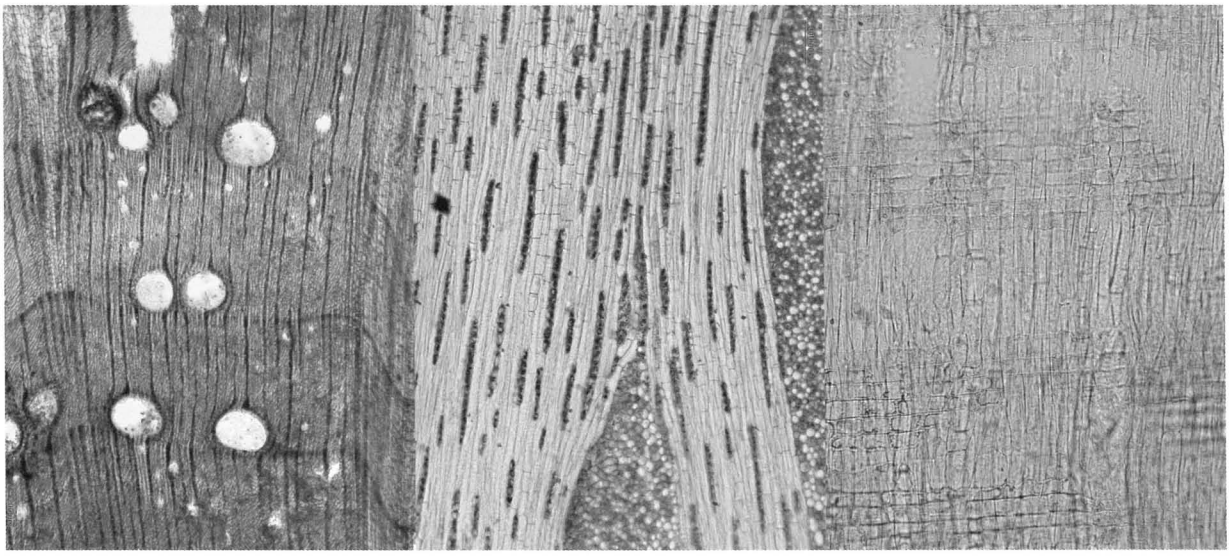


10a. クリ 12903　木口×30.　　10b.　同　　板目×60.　　10c.　同　　柾目×120.

11a. ブナ属 12842　木口×30.　　11b.　同　　板目×60.　　11c.　同　　柾目×120.

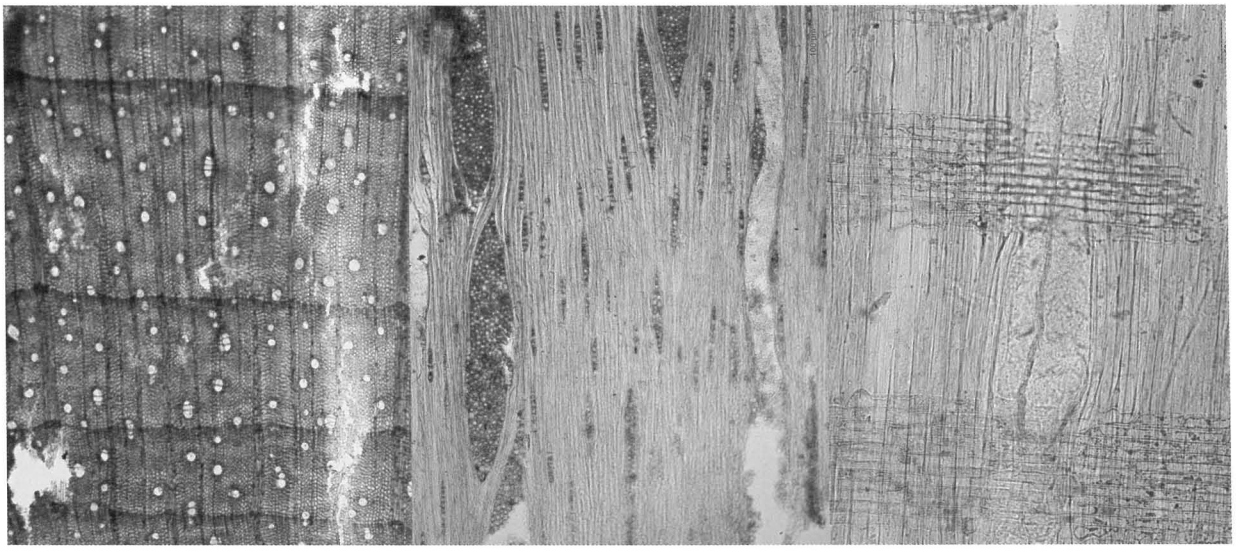


12a. アカガシ亜属 12884　木口×30.　　6b.　同　　板目×60.　　6c.　同　　柾目×120.

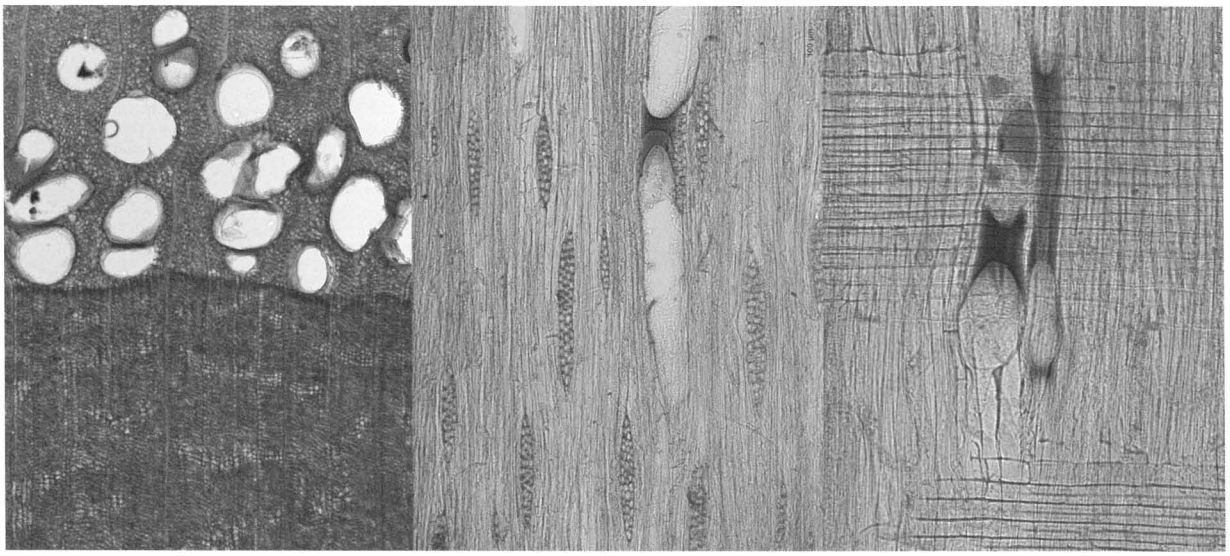


13a. コナラ節 12892　木口×30.　　13b.　同　板目×60.　　13c.　同　柾目×120.

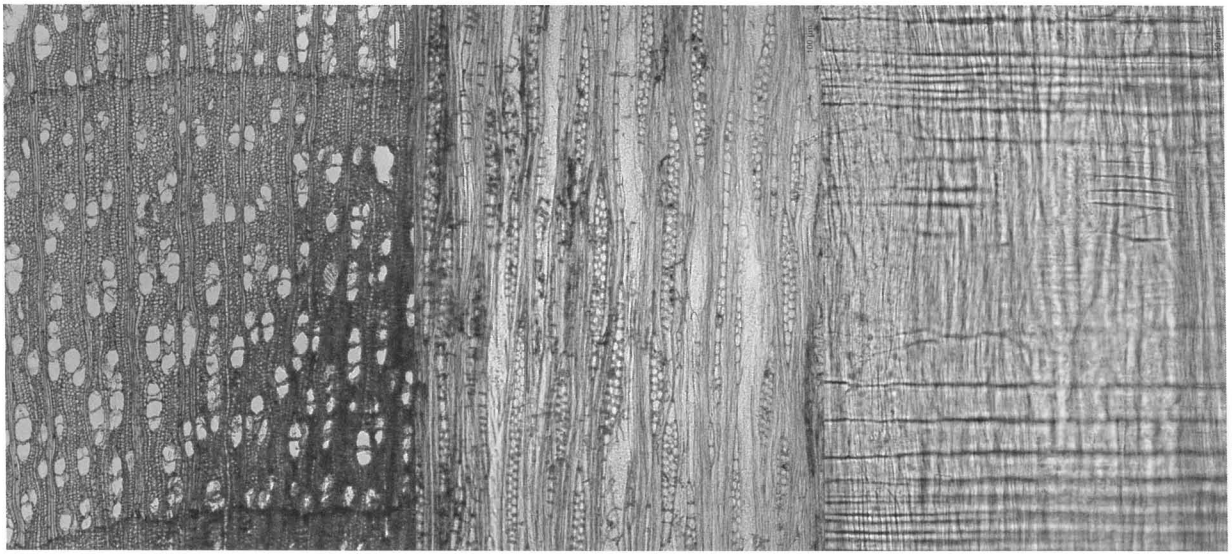
14a. ケヤキ 12906　木口×30.　　14b.　同　板目×60.　　14c.　同　柾目×120.



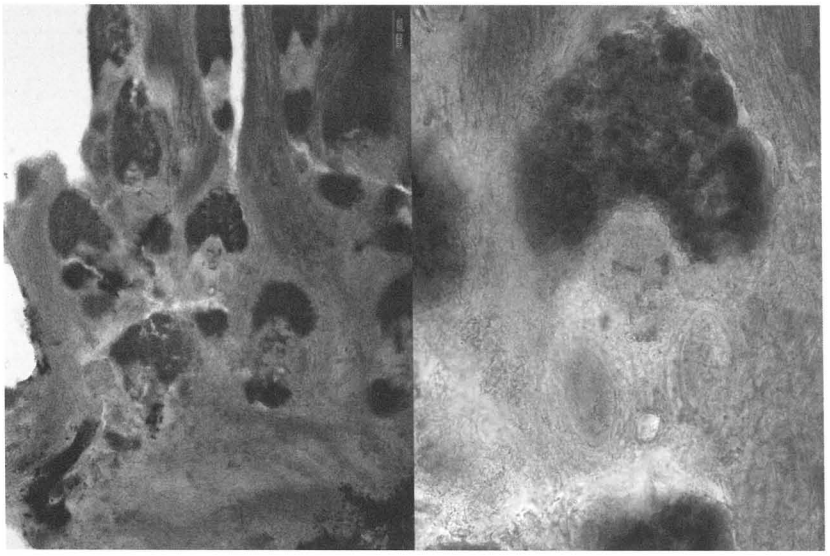
15a. カエデ属 12896　木口×30.　　15b.　同　板目×60.　　15c.　同　柾目×120.



16a. キハダ 12919　木口×30.　　16b.　同　　板目×60.　　16c.　同　　柾目×120.



17a. エゴノキ属 12905　木口×30.　　17b.　同　　板目×60.　　17c.　同　　柾目×120.



18a. タケササ類 12895　木口×30.　　18b.　同　　木口×120.

付編２　青木原遺跡の自然科学分析

金井　慎司（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

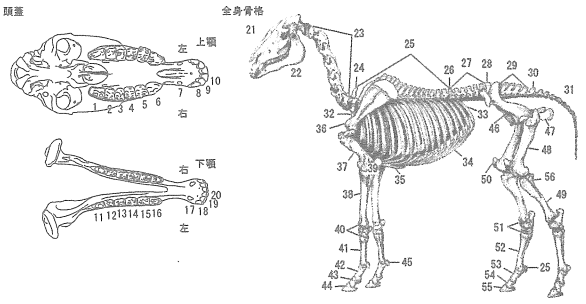
青木原遺跡(静岡県三島市南二日町に所在)は、三島・沼津平野の東部を北西～南東方向に走る御殿川中流域の左岸に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代～古代の住居群などが検出されている。今回、調査区内から出土した動物骨について、その種類を明らかにして当時の動物利用などに関する資料を得ることにした。

１．試　料

試料は、発掘調査段階で取り上げられた骨13点（骨１～13)、歯牙41点（歯１～41）である。大半は１試料中に１点の骨あるいは歯牙片があるが、中には複数点の破片が含まれる場合がある。試料はいずれも水漬き状態である。なお、試料の詳細については結果と併せて表示する。

２．分析方法

試料を肉眼で観察し、種類・部位を同定する。写真撮影後、蒸留水にエタノールを少量加えた溶液で保管する。なお、計測は、デジタルノギスを使用する。なお、骨格各部位の名称は、ウマを例として図１に示す。



1. 上顎第３後臼歯　2. 上顎第２後臼歯　3. 上顎第１後臼歯　4. 上顎第４前臼歯　5. 上顎第３前臼歯
6. 上顎第２前臼歯　7. 上顎犬歯（雄のみ）　8. 上顎第３門歯　9. 上顎第２門歯　10. 上顎第１門歯
11. 下顎第３後臼歯　12. 下顎第２後臼歯　13. 下顎第１後臼歯　14. 下顎第４前臼歯　15. 下顎第３前臼歯
16. 下顎第２前臼歯　17. 下顎犬歯（雄のみ）　18. 下顎第３門歯　19. 下顎第２門歯　20. 下顎第１門歯
21. 頭蓋　22. 下顎骨　23. 頸椎　24. 第一胸椎　25. 胸椎
26. 最後位胸椎　27. 腰椎　28. 最後位腰椎　29. 仙骨　30. 第一尾椎
31. 尾椎　32. 第一肋骨　33. 最後位肋骨　34. 軟肋骨　35. 剣状軟骨
36. 肩甲骨　37. 上腕骨　38. 橈骨　39. 尺骨　40. 手根骨
41. 中手骨　42. 指骨（基節骨）　43. 指骨（中節骨）　44. 指骨（末節骨）　45. 基節骨種子骨
46. 鎖骨　47. 坐骨　48. 大腿骨　49. 脛骨　50. 膝蓋骨
51. 足根骨　52. 中足骨　53. 趾骨（基節骨）　54. 趾骨（中節骨）　55. 趾骨（末節骨）
56. 膝骨

図１　ウマの骨格　（全身骨格は、加藤・山内，2003に加筆）

３．結　果

確認された骨は、いずれも哺乳類であり、ヒト、イヌ、ウマ、ニホンジカ、ウシに同定された(表１)。同定結果を表２に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

表１　検出動物分類群の一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
哺乳綱	Class Mammalia
サル目(霊長目)	Order Primates
ヒト科	Family Hominidae
ヒト	Homo sapiens
ネコ目(食肉目)	Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	Canis familiaris
ウマ目(奇蹄目)	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	Equus aballus
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	Cervus nippon
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	Bos taurus

＜骨１;取上番号4368＞　頭蓋骨とみられる破片である。ヒトの可能性もあるが、詳細不明である。

＜骨２;取上番号1017＞　イヌの頭蓋骨である。破片となっている。左右上顎骨が比較的良好な状態で残り、左上顎骨では第４前臼歯から第２後臼歯までが、右上顎骨では第４前臼歯と第１・２後臼歯が植立する。

＜骨３;取上番号127＞　ウマ/ウシの胸椎である。切断されるが、切断面は新しい。

＜骨４;取上番号4201＞　イヌの第２頚椎である。ほぼ完存する。

＜骨５;取上番号2070＞　ウマの左大腿骨である。両端が欠損する。

＜骨６;取上番号2439＞　大型獣類の四肢骨片である。酸化鉄が沈着顕著である。

＜骨７;取上番号3217＞　獣類の四肢骨片である。酸化鉄の沈着が顕著である。

＜骨８;取上番号3218＞　ニホンジカの右中足骨である。３片あるが、同一骨である。

＜骨９;取上番号3288＞　獣類の四肢骨片である。

＜骨10;取上番号3996＞　獣類の四肢骨片である。

＜骨11;取上番号4958＞　ヒトの右大腿骨である。

＜骨12；取上番号1329＞　種類、部位ともに不明である。
＜骨13；取上番号4639＞　ウマ/ウシの椎骨片である。切断されているが、切断面は新しい。
＜歯１；取上番号410＞　ウマの右上顎第２後臼歯である。臼歯高76㎜前後を計る。
＜歯２；取上番号706＞　ウマの歯牙片である。
＜歯３；取上番号709＞　ウマの門歯である。
＜歯４；取上番号869＞　ウシの左上顎第３後臼歯である。破損する。
＜歯５；取上番号1174＞　ウマの右上顎第２後臼歯である。臼歯高64㎜前後を計る。
＜歯６；取上番号1318＞　ウマの歯牙片である。
＜歯７；取上番号1392＞　ウマの歯牙片である。
＜歯８；取上番号1490＞　ウマの歯牙片である。
＜歯９；取上番号1548＞　ウマの右下顎第２門歯である。破片である。
＜歯10；取上番号1859＞　ウマの右上顎第２前臼歯（歯10）20.
＜歯11；取上番号1911＞　ウマの左下顎歯牙片である。
＜歯12；取上番号1921＞　ウマの上顎歯牙片である。
＜歯13；取上番号1928＞　ウマの歯牙片である。
＜歯14；取上番号1965＞　ウマ右上顎第３後臼歯である。
＜歯15；取上番号1997＞　ウマの歯牙片である。
＜歯16；取上番号2204＞　ウマの左下顎第２後臼歯である。臼歯高67㎜前後を計る。
＜歯17；取上番号2256＞　ウマの左上顎第３後臼歯である。臼歯高38㎜前後を計る。
＜歯18；取上番号2342＞　ウマの歯牙片である。
＜歯19；取上番号2434＞　ウマの左上顎第４前臼歯である。臼歯高32㎜前後を計る。
＜歯20；取上番号2569＞　ウマの左上顎第４前臼歯である。臼歯高42㎜前後を計る。
＜歯21；取上番号2578＞　ウマの歯牙片である。
＜歯22；取上番号2801＞　ウマの右上顎歯牙である。
＜歯23；取上番号2855＞　ウマの右上顎歯牙である。
＜歯24；取上番号3022＞　ウマの右下顎歯牙である。第１後臼歯の可能性がある。
＜歯25；取上番号3784＞　ウシの左下顎第３後臼歯である。
＜歯26；取上番号3794＞　ウマの右下顎第４前臼歯である。臼歯高35㎜前後を計る。
＜歯27；取上番号3799＞　ウマの歯牙片である。
＜歯28；取上番号3818＞　ウマの右下顎第２後臼歯である。臼歯高32.1㎜を計る。
＜歯29；取上番号3871＞　ウマの左下顎第１後臼歯である。臼歯高39.6㎜を計る。
＜歯30；取上番号4054＞　ウマの右上顎第４前臼歯である。臼歯高51㎜前後を計る。
＜歯31；取上番号4271＞　ウマの左上顎第２後臼歯である。
＜歯32；取上番号4346＞　ウマの左下顎第４前臼歯である。臼歯高42.9㎜を計る。
＜歯33；取上番号4430＞　ウマの右上顎第４前臼歯である。臼歯高28.9㎜を計る。
＜歯34；取上番号4588＞　ウマの左上顎第３後臼歯である。
＜歯35；取上番号4853＞　ウマの門歯である。
＜歯36；取上番号4877＞　ウマの左上顎第３後臼歯である。
＜歯37；取上番号4903＞　ウマの右下顎第３前臼歯である。臼歯高76㎜前後を計る。
＜歯38；取上番号5193＞　ウマの右下顎歯牙である。
＜歯39；取上番号5138＞　ウマの右下顎第３後臼歯である。臼歯高36.6㎜を計る。

表２　骨同定結果

	取上番号	種　類	部　位	左	右	部　分	数　量	備　　考	推定年齢
骨１	4368	ヒト?	頭蓋骨			破片	1		
骨２	1017	イヌ	頭蓋骨			破片	多数		
			上顎骨	左		P^4-M^2部	1	P^4-M^2植立	
					右	P^4部	1	P^4植立	
						M^{1-2}部	1	M^{1-2}植立	
骨３	127	ウマ/ウシ	胸椎			破片	1	新しい切断	
骨４	4201	イヌ	第２頸椎			ほぼ完存	1		
骨５	2070	ウマ	大腿骨	左		両端欠	1		
骨６	2439	大型獣類	四肢骨			破片	1	他破片3+有,酸化鉄が沈着顕著	
骨７	3217	獣類	四肢骨			破片	1	酸化鉄顕著	
骨８	3218	ニホンジカ	中足骨		右	両端欠	3	同一骨	
骨９	3288	獣類	四肢骨			破片	1		
骨10	3996	獣類	四肢骨			破片	1		
骨11	4958	ヒト	大腿骨		右	破片	1	他破片13+有	
骨12	1329	不明	不明			破片	1		
骨13	4639	ウマ/ウシ	椎骨			破片	1	新しい切断	
歯１	410	ウマ	上顎歯牙		右	M^2　破損	1	臼歯高76±	４歳程度?
歯２	706	ウマ	歯牙			破片	1		
歯３	709	ウマ	門歯			破片	1		
歯４	869	ウシ	上顎歯牙	左		M^3　破損	1		
歯５	1174	ウマ	上顎歯牙		右	M^2　破損	1	臼歯高64±	４～５歳程度?
歯６	1318	ウマ	歯牙			破片	1		
歯７	1392	ウマ	歯牙			破片	1		
歯８	1490	ウマ	歯牙			破片	1		
歯９	1548	ウマ	下顎歯牙		右	I_2	1		
歯10	1859	ウマ	上顎歯牙		右	P^2　破片	1		
歯11	1911	ウマ	下顎歯牙	左		破片	1		
歯12	1921	ウマ	上顎歯牙			破片	1		
歯13	1928	ウマ	歯牙			破片	1		
歯14	1965	ウマ	上顎歯牙		右	M^3　破片	1		
歯15	1997	ウマ	歯牙			破片	1		
歯16	2204	ウマ	下顎歯牙	左		M_2	1	臼歯高67±	４歳程度?
歯17	2256	ウマ	上顎歯牙	左		M^3	1	臼歯高38±	10歳程度?
歯18	2342	ウマ	歯牙			破片	1		
歯19	2434	ウマ	上顎歯牙	左		P^4	1	臼歯高32±	12～13歳程度?
歯20	2569	ウマ	上顎歯牙	左		P^4	1	臼歯高42±	９～10歳程度?
歯21	2578	ウマ	歯牙			破片	1		
歯22	2801	ウマ	上顎歯牙		右	破片	1		
歯23	2855	ウマ	上顎歯牙		右	M^3	1		
歯24	3022	ウマ	下顎歯牙		右	破片	1	M_1?	
歯25	3784	ウシ	下顎歯牙	左		M_3	1		
歯26	3794	ウマ	下顎歯牙		右	P_4	1	臼歯高35±	11歳程度?
歯27	3799	ウマ	歯牙			破片	1		
歯28	3818	ウマ	下顎歯牙		右	M_2	1	臼歯高32.1	13～14歳
歯29	3871	ウマ	下顎歯牙	左		M_1	1	臼歯高39.6	10歳
歯30	4054	ウマ	上顎歯牙		右	P^4	1	臼歯高51±	６～７歳程度?
歯31	4271	ウマ	上顎歯牙	左		M^2	1		
歯32	4346	ウマ	下顎歯牙	左		P_4	1	臼歯高42.9	８～９歳
歯33	4430	ウマ	上顎歯牙		右	P^4	1	臼歯高28.9	14歳
歯34	4588	ウマ	上顎歯牙	左		M^3	1		
歯35	4853	ウマ	門歯			破片	1		
歯36	4877	ウマ	上顎歯牙	左		M^3	1		
歯37	4903	ウマ	下顎歯牙		右	P_3	1	臼歯高76±	３歳程度?
歯38	5193	ウマ	下顎歯牙		右	破片	1		
歯39	5138	ウマ	下顎歯牙		右	M_3	1	臼歯高36.6	10～11歳
歯40	5127	ウマ	下顎歯牙	左		M_3　破片	1		
歯41	5353	ウマ	歯牙			破片	1		

注）I：門歯　P：前臼歯　M：後臼歯

＜歯40；取上番号5127＞　ウマの左下顎第３後臼歯である。

＜歯41；取上番号5353＞　ウマの歯牙片である。

４．考　察

検出された骨は、ヒト、イヌ、ウマ、ウシに同定された。いずれも部分的にしか出土しておらず、さらに解剖学的な位置を保っていないことから、周辺から流れ込んできたと考えられる。ただし、摩滅が顕著でない点を考慮すると、比較的近傍から流れ込んだ可能性もある。ヒトは、右大腿骨のみの出土で

あった。出土地点近傍の墓域から流れ込んだ可能性がある。ニホンジカは、当時、狩猟の対象となっており、食糧資源の他、皮や骨・角などが利用されていたと推定される。また、イヌ、ウマ、ウシは、当時、人間の生活に密接に関係していたと思われる。中でも最も多く出土したウマは、右上顎第３後臼歯が4本確認されることから（表３）、少なくとも４個体存在していたと推定される。また、破損している歯牙が多いが、西中川ほか（1991）を参考に臼歯高から年齢を推定すると、おおよそ３～４歳程度、6～7歳程度、10歳程度、14歳程度のウマが含まれていると考えられる。

一方、出土した地点をみると、見かけ上平面的なまとまりが捉えられているが（図２において点線で囲んだ部分)、まとまりごとに出土した骨の中でウマの年齢に統一性がみられない（表３）。これは、骨が他箇所から流れ込んだことに由来するとみられる。

ところで御殿川流域では、これまで発掘調査に伴って出土した骨について調査が既に行われており、ウマが主体となることが明らかにされている（金子,1994,1995)。これらの調査では、比較的形質を保った骨が出土しており、トカラ馬程度の小型馬やこれよりやや大きい御崎馬との中間的な個体が多いことが明らかにされている。今回、ウマの大きさを推定できる部位が出土していないが、ウマが多く出土する点で共通する。おそらく、本地域では、こうした家畜の利用が定常的にあったと思われ、それを裏付ける資料である。

表３　ウマ出土歯牙の部位別数量

	右										左									
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P2	P3	P4	M1	M2	M3
上顎	2	2		2		1											2		1	4
下顎	1	1		1	1				1								1	1	1	2

引用文献

加藤　嘉太郎・山内　昭二, 2003, 新編　家畜比較解剖図説　上巻.養賢堂, 315p.

金子　浩昌,1994,静岡県三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集
御殿川流域遺跡群Ⅱ　平成２・３年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲田遺跡, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 249-285.

金子　浩昌,1995,三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体.静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第67集
御殿川流域遺跡群Ⅲ　平成6年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
鶴喰前田遺跡, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 164-170.

西中川　駿・本田　道輝・松元　光春,1991,古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究.
平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書, 99p.

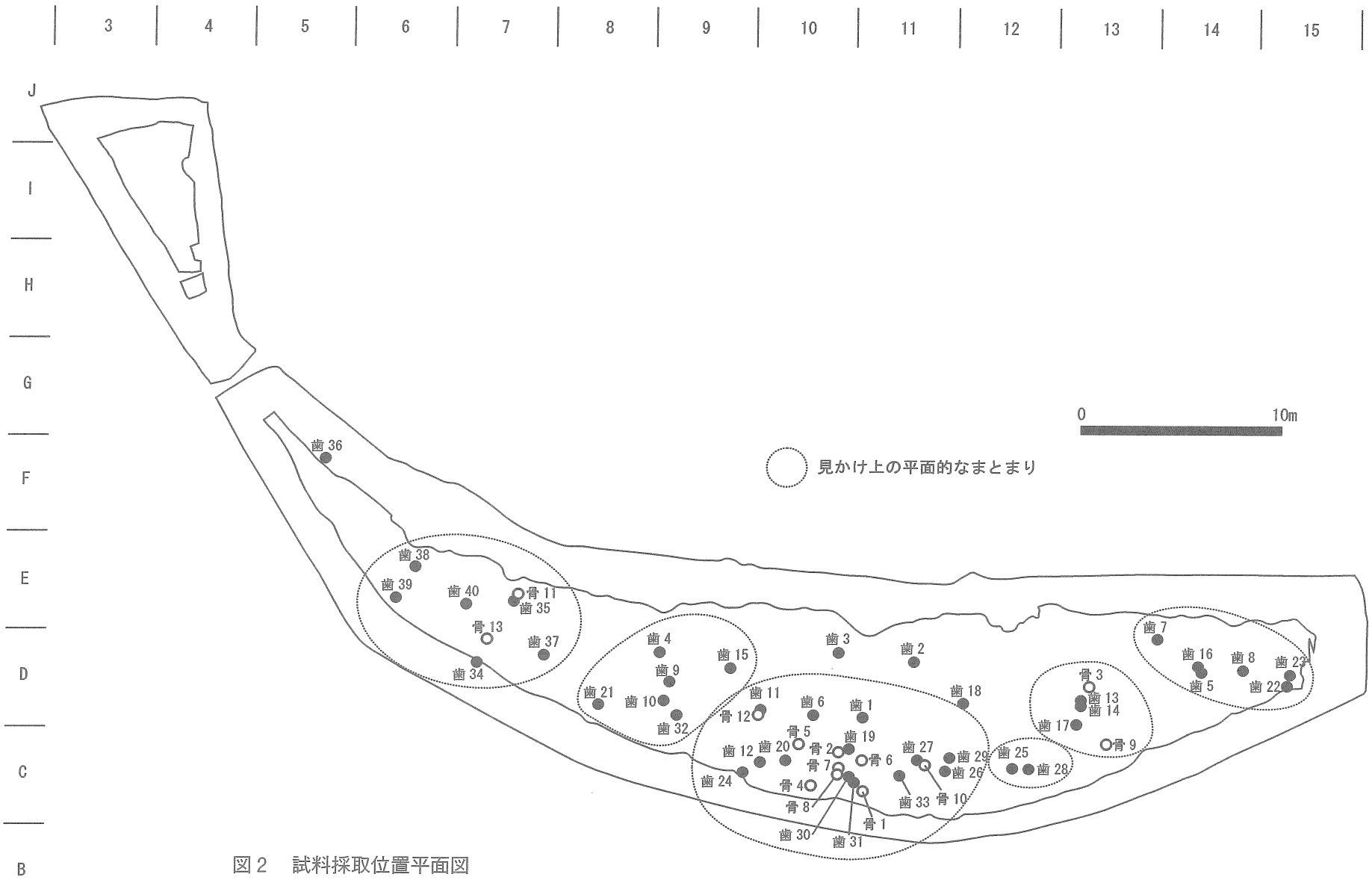


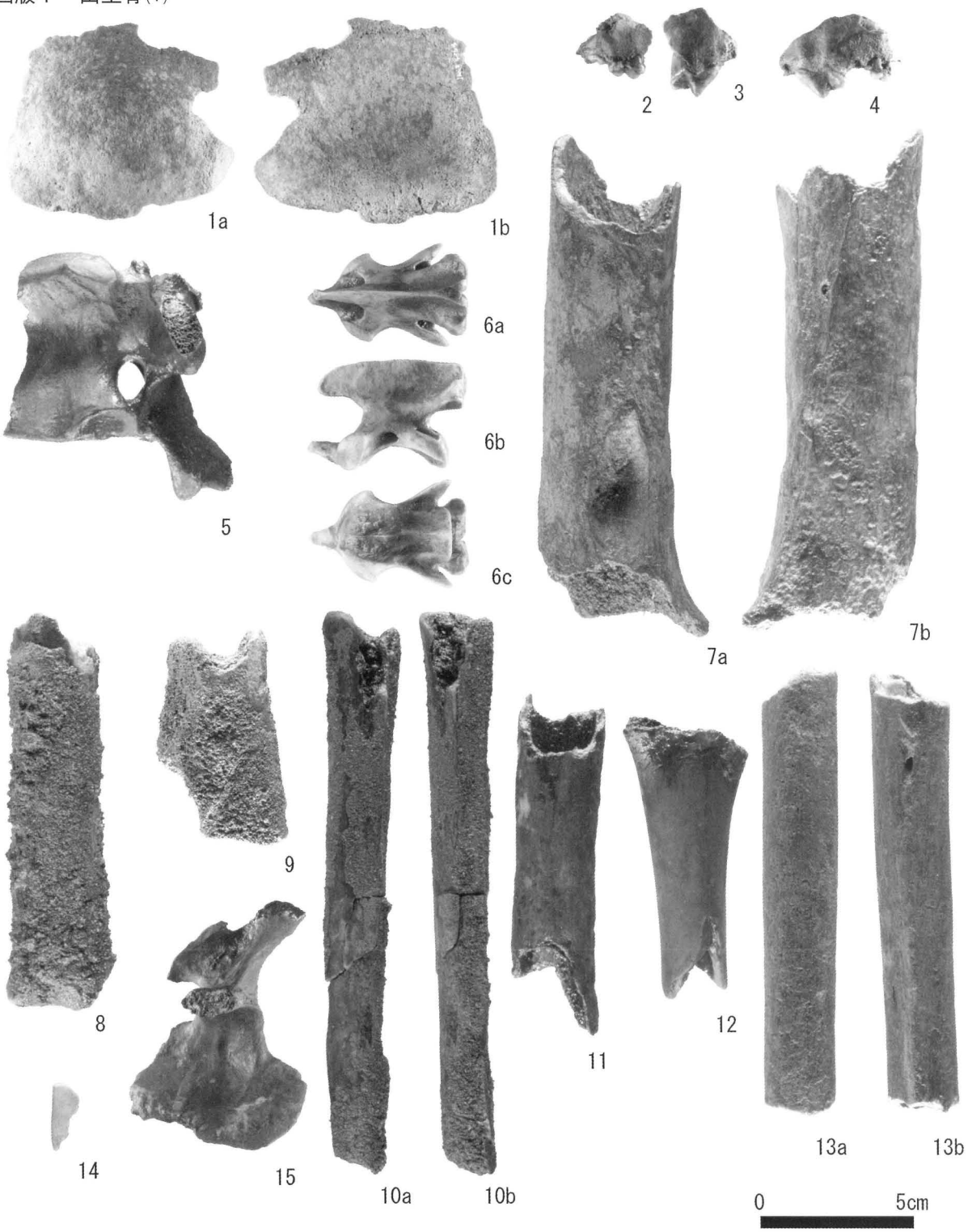
図２　試料採取位置平面図

表４　平面まとまり別出土状況

	取上番号	種　類	部　位	左	右	部　分	数　量	備　　考	推定年齢
歯38	5193	ウマ	下顎歯牙		右	破片	1		
歯39	5138	ウマ	下顎歯牙		右	M_3	1	臼歯高36.6	10～11歳
歯40	5127	ウマ	下顎歯牙	左		M_3　破片	1		
骨13	4639	ウマ/ウシ	椎骨			破片	1	新しい切断	
骨11	4958	ヒト	大腿骨		右	破片	1	他破片13+有	
歯34	4588	ウマ	上顎歯牙	左		M^3	1		
歯35	4853	ウマ	門歯			破片	1		
歯37	4903	ウマ	下顎歯牙		右	P_3	1	臼歯高76±	3歳程度?
歯21	2578	ウマ	歯牙			破片	1		
歯４	869	ウシ	上顎歯牙	左		M^3　破損	1		
歯９	1548	ウマ	下顎歯牙		右	I_2	1		
歯10	1859	ウマ	上顎歯牙		右	P^2　破片	1		
歯32	4346	ウマ	下顎歯牙	左		P_4	1	臼歯高42.9	8～9歳
歯15	1997	ウマ	歯牙			破片	1		
歯11	1911	ウマ	下顎歯牙	左		破片	1		
歯24	3022	ウマ	下顎歯牙		右	破片	1	M_1?	
歯12	1921	ウマ	上顎歯牙			破片	1		
歯20	2569	ウマ	上顎歯牙	左		P^4	1	臼歯高42±	9～10歳程度?
歯６	1318	ウマ	歯牙			破片	1		
骨12	1329	不明	不明			破片	1		
骨５	2070	ウマ	大腿骨	左		両端欠	1		
骨４	4201	イヌ	第２頸椎			ほぼ完存	1		
骨２	1017	イヌ	頭蓋骨			破片	多数		
			上顎骨	左		P^4-M^2部	1	P^4-M^2植立	
					右	P^4部	1	P^4植立	
						M^{1-2}部	1	M^{1-2}植立	
骨７	3217	獣類	四肢骨			破片	1	酸化鉄顕著	
骨８	3218	ニホンジカ	中足骨		右	両端欠	3	同一骨	
歯19	2434	ウマ	上顎歯牙	左		P^4	1	臼歯高32±	12～13歳程度?
歯１	410	ウマ	上顎歯牙		右	M^2　破損	1	臼歯高76±	4歳程度?
歯30	4054	ウマ	上顎歯牙		右	P^4	1	臼歯高51±	6～7歳程度?
歯31	4271	ウマ	上顎歯牙	左		M^2	1		
骨６	2439	大型獣類	四肢骨			破片	1	他破片3+有,酸化鉄が沈着顕著	
骨１	4368	ヒト?	頭蓋骨			破片	1		
歯33	4430	ウマ	上顎歯牙		右	P^4	1	臼歯高28.9	14歳
歯27	3799	ウマ	歯牙			破片	1		
骨10	3996	獣類	四肢骨			破片	1		
歯26	3794	ウマ	下顎歯牙		右	P_4	1	臼歯高35±	11歳程度?
歯29	3871	ウマ	下顎歯牙	左		M_1	1	臼歯高39.6	10歳
歯25	3784	ウシ	下顎歯牙	左		M_3	1		
歯28	3818	ウマ	下顎歯牙		右	M_2	1	臼歯高32.1	13～14歳
歯17	2256	ウマ	上顎歯牙	左		M^3	1	臼歯高38±	10歳程度?
歯13	1928	ウマ	歯牙			破片	1		
歯14	1965	ウマ	上顎歯牙		右	M^3　破片	1		
骨３	127	ウマ/ウシ	胸椎			破片	1	新しい切断	
骨９	3288	獣類	四肢骨			破片	1		
歯７	1392	ウマ	歯牙			破片	1		
歯16	2204	ウマ	下顎歯牙	左		M_2	1	臼歯高67±	4歳程度?
歯５	1174	ウマ	上顎歯牙		右	M^2　破損	1	臼歯高64±	4～5歳程度?
歯８	1490	ウマ	歯牙			破片	1		
歯22	2801	ウマ	上顎歯牙		右	破片	1		
歯23	2855	ウマ	上顎歯牙		右	M^3	1		
歯36	4877	ウマ	上顎歯牙	左		M^3	1		
歯２	706	ウマ	歯牙			破片	1		
歯３	709	ウマ	門歯			破片	1		
歯18	2342	ウマ	歯牙			破片	1		
歯41	5353	ウマ	歯牙			破片	1		

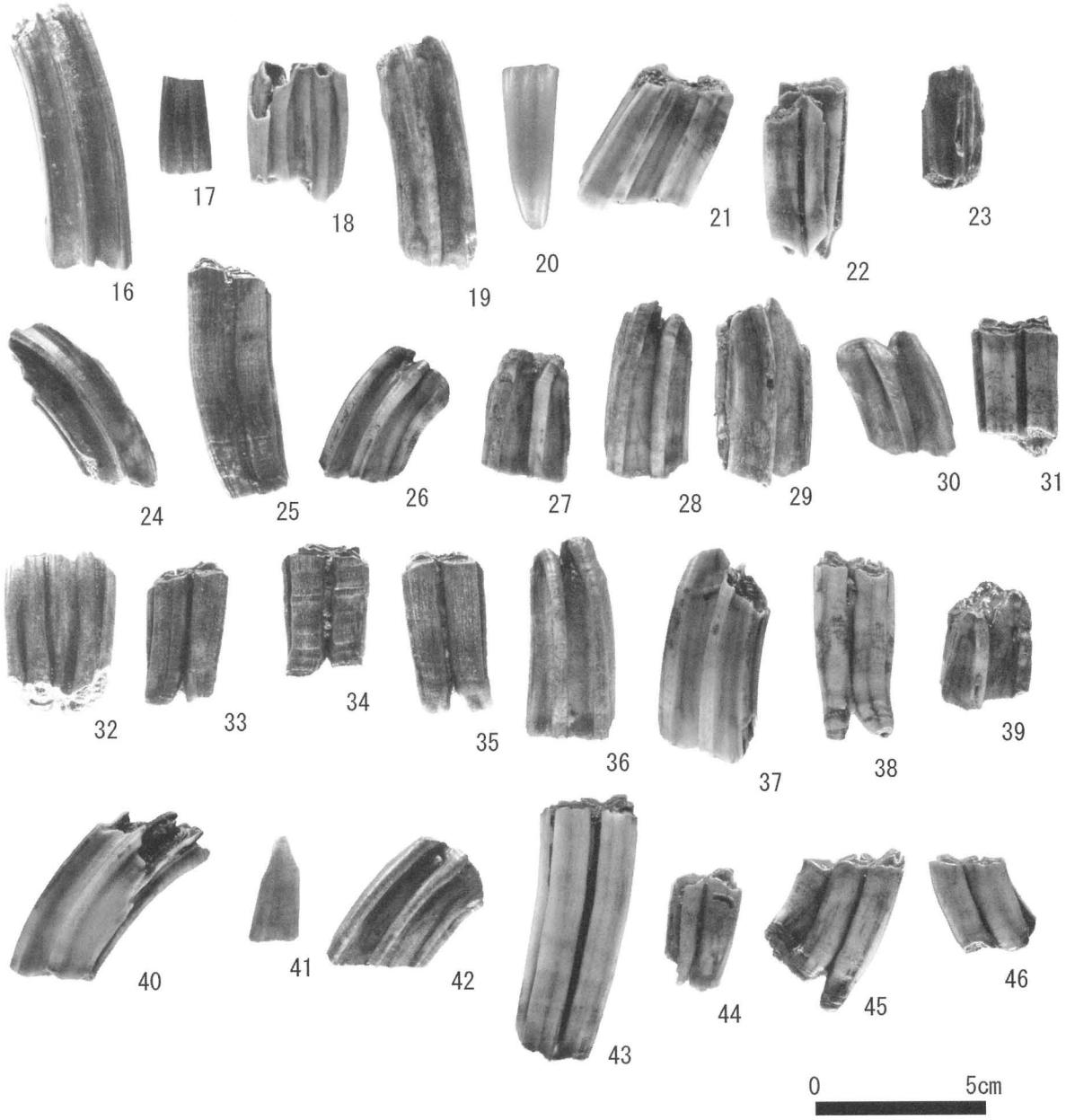
注）I:門歯　　P:前臼歯　　M:後臼歯

図版１　出土骨(1)



1. ヒト？頭蓋骨(骨１;取上番号4368)
2. イヌ右上顎骨P4部(骨2;取上番号1017)
3. イヌ右上顎骨M1-2部(骨２;取上番号1017)
4. イヌ左上顎骨P4-M2部(骨2;取上番号1017)
5. ウマ/ウシ胸椎(骨３;取上番号127)
6. イヌ第2頚椎(骨4;取上番号4201)
7. ウマ左大腿骨(骨５;取上番号2070)
8. 大型獣類四肢骨(骨6;取上番号2439)
9. 獣類四肢骨(骨７;取上番号3217)
10. ニホンジカ右中足骨(骨8;取上番号3218)
11. 獣類四肢骨(骨９;取上番号3288)
12. 獣類四肢骨(骨10;取上番号3996)
13. ヒト右大腿骨(骨11;取上番号4958)
14. 不明(骨12;取上番号1329)
15. ウマ/ウシ椎骨(骨13;取上番号4639)

図版２　出土骨(2)

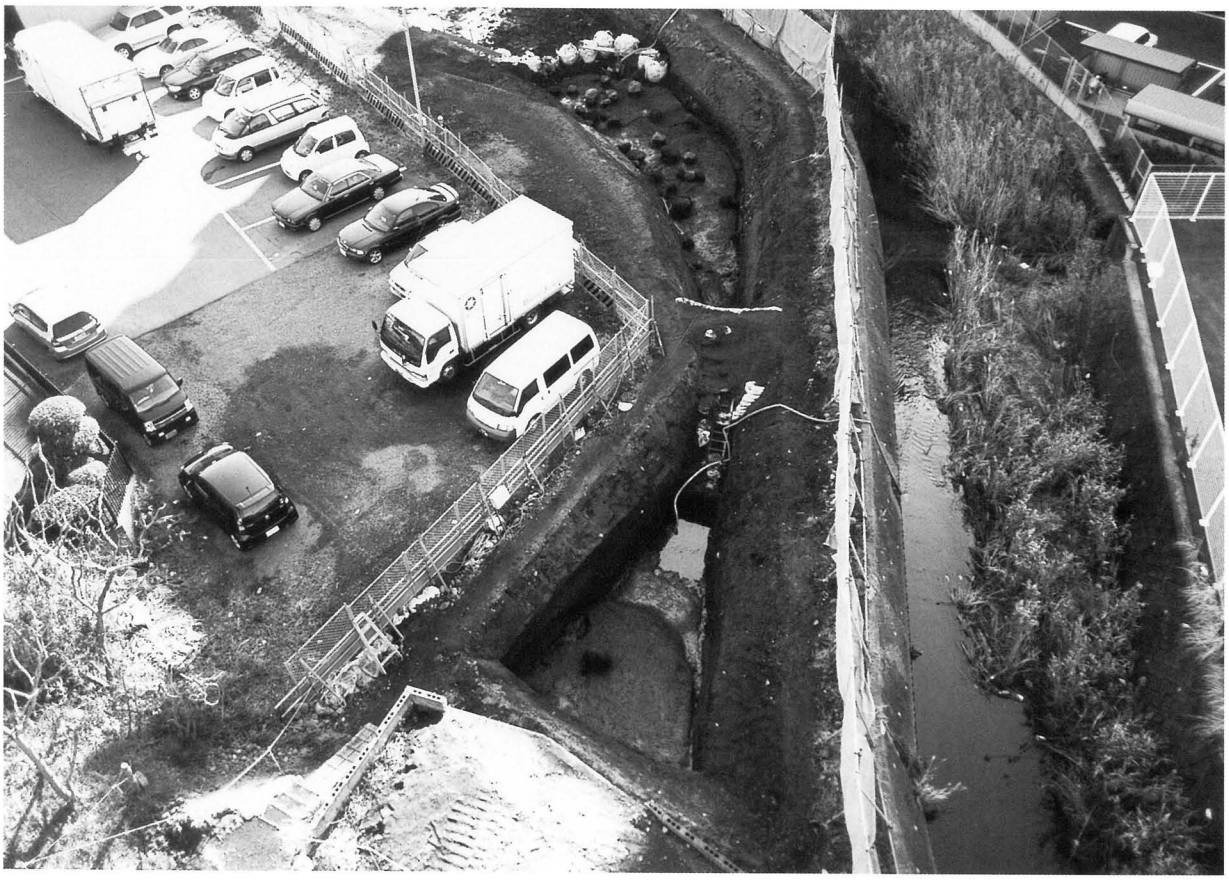


16.　ウマ右上顎第３後臼歯（歯１;取上番号410）
17.　ウマ門歯（歯３;取上番号709）
18.　ウシ左上顎第３後臼歯（歯４;取上番号869）
19.　ウマ右上顎第２後臼歯（歯５;取上番号1174）
20.　ウマ右下顎第２門歯（歯９;取上番号1548）
21.　ウマ右上顎第2前臼歯（歯10;取上番号1859）
22.　ウマ左下顎歯牙（歯11;取上番号1911）
23.　ウマ上顎歯牙（歯12;取上番号1921）
24.　ウマ右上顎第３後臼歯（歯14;取上番号1965）
25.　ウマ左下顎第２後臼歯（歯16;取上番号2204）
26.　ウマ左上顎第３後臼歯（歯17;取上番号2256）
27.　ウマ左上顎第４前臼歯（歯19;取上番号2434）
28.　ウマ左上顎第４前臼歯（歯20;取上番号2569）
29.　ウマ右上顎歯牙（歯22;取上番号2801）
30.　ウマ右上顎歯牙（歯23;取上番号2855）
31.　ウマ右下顎歯牙（歯24;取上番号3022）
32.　ウシ左下顎第３後臼歯（歯25;取上番号3784）
33.　ウマ右下顎第４前臼歯（歯26;取上番号3794）
34.　ウマ右下顎第２後臼歯（歯28;取上番号3818）
35.　ウマ左下顎第１後臼歯（歯29;取上番号3871）
36.　ウマ右上顎第４前臼歯（歯30;取上番号4054）
37.　ウマ左上顎第２後臼歯（歯31;取上番号4271）
38.　ウマ左下顎第４前臼歯（歯32;取上番号4346）
39.　ウマ右上顎第４前臼歯（歯33;取上番号4430）
40.　ウマ左上顎第３後臼歯（歯34;取上番号4588）
41.　ウマ門歯（歯35;取上番号4853）
42.　ウマ左上顎第３後臼歯（歯36;取上番号4877）
43.　ウマ右下顎第３前臼歯（歯37;取上番号4903）
44.　ウマ右下顎歯牙（歯38;取上番号5193）
45.　ウマ右下顎第３後臼歯（歯39;取上番号5138）
46.　ウマ左下顎第３後臼歯（歯40;取上番号5127）

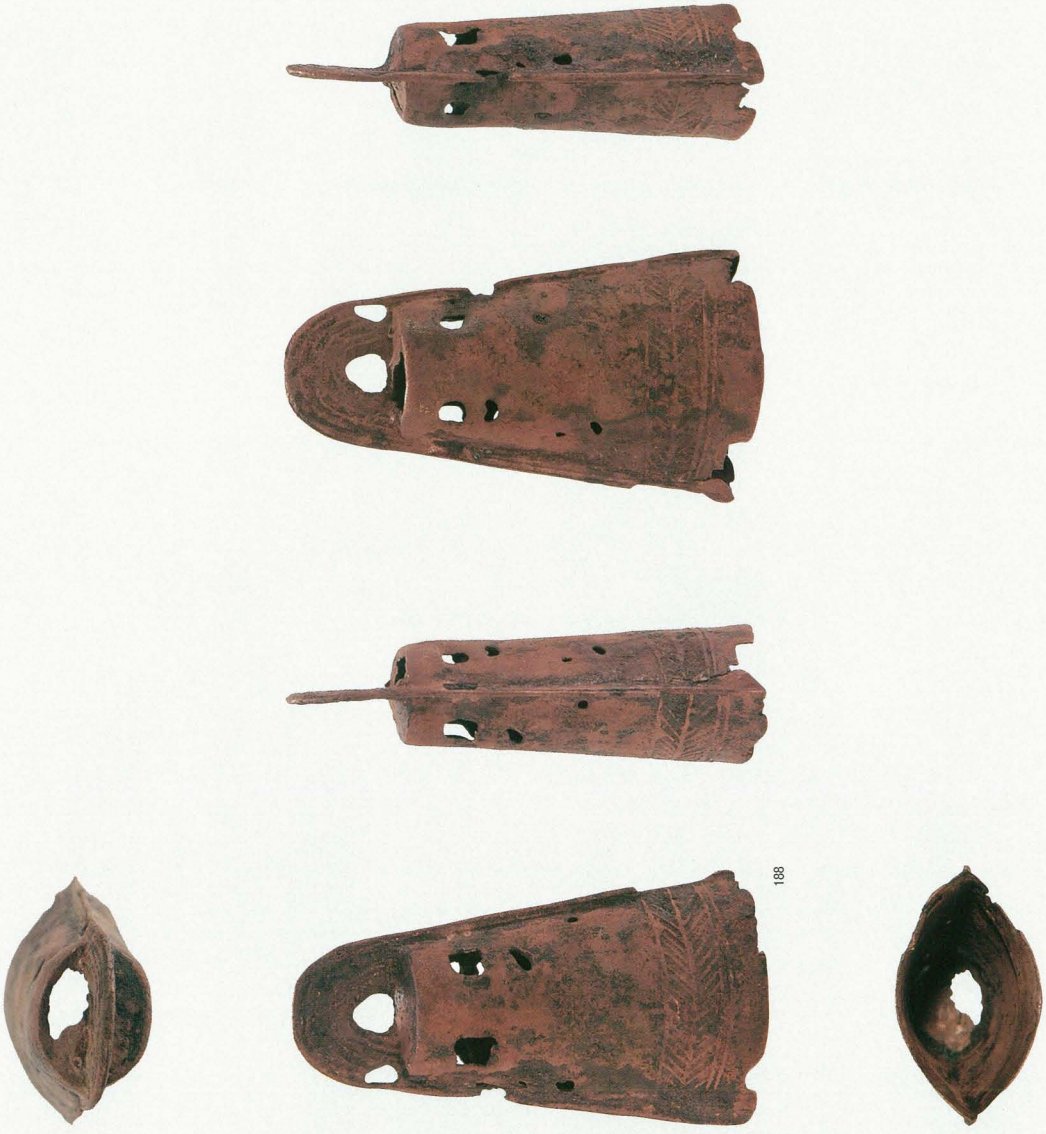
写　真　図　版

図版 1

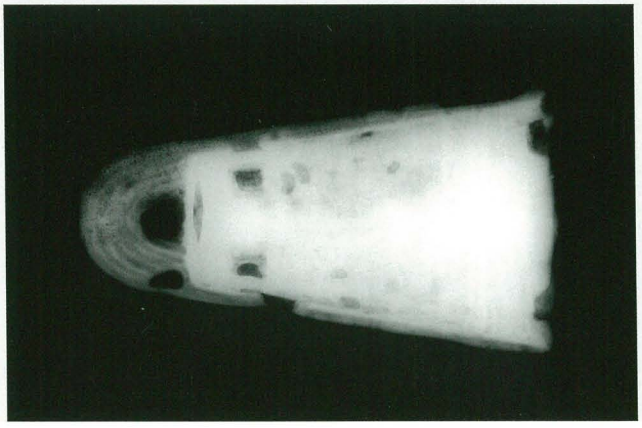
1. 調査区南東部（西側より撮影）



2. 調査区北西部（北西側より撮影）



188



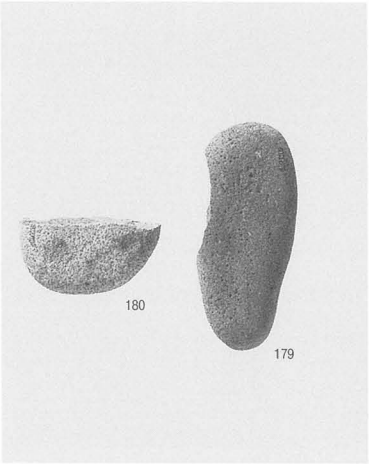
（X線写真）

小　銅　鐸

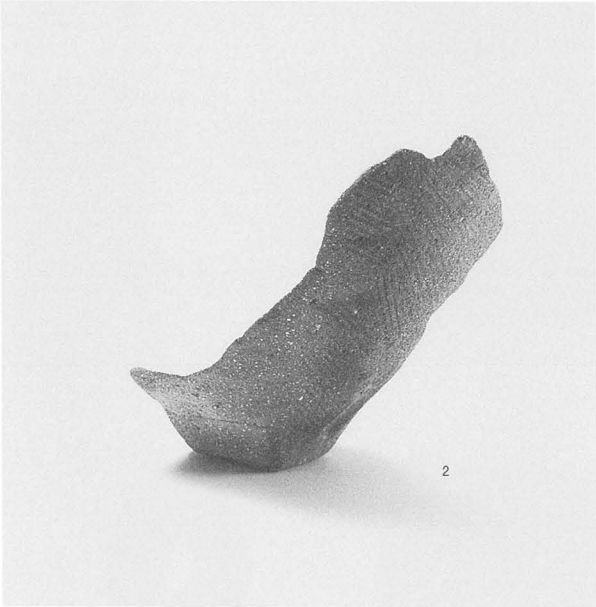
図版 3

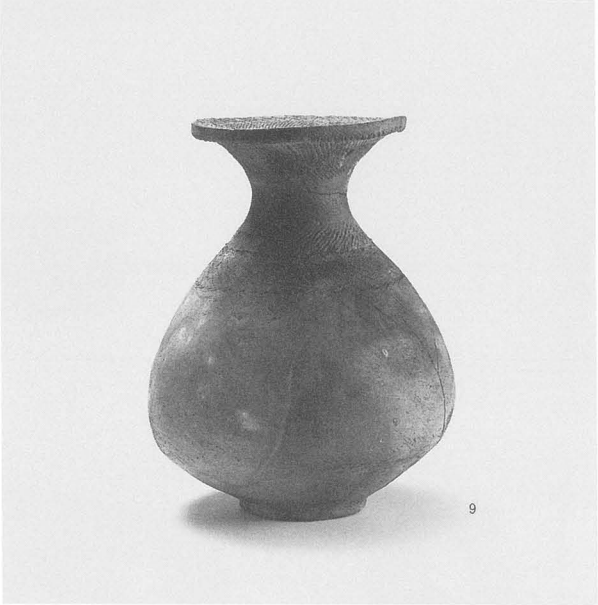
1. 銅釧再加工品

2. 縄文土器

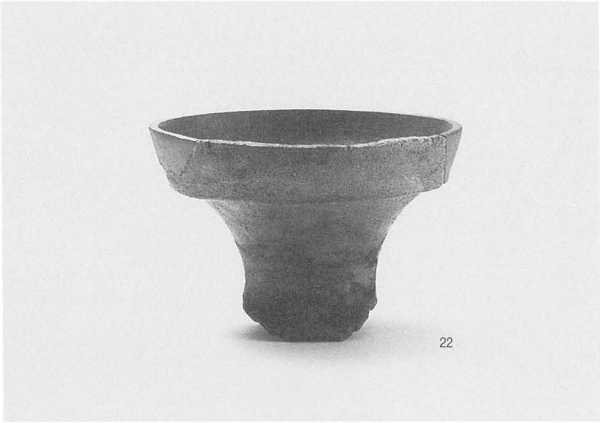


3. 敲　石





4. 弥生土器（壺）

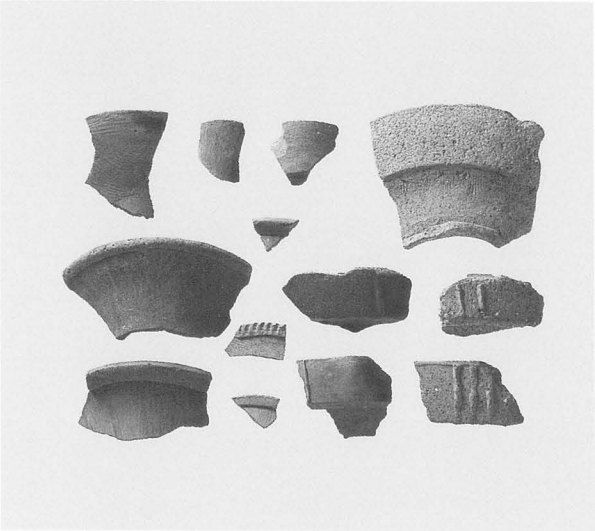


弥生土器・土師器（壺・小型壺・鉢）

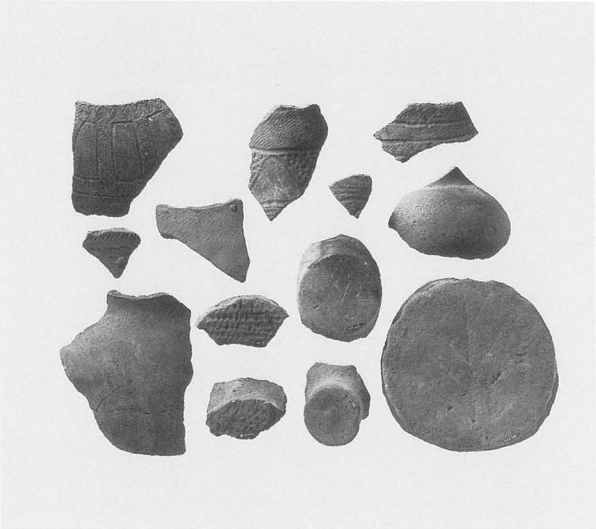
図版 5

1. 弥生土器・土師器（壺・台付甕集合）

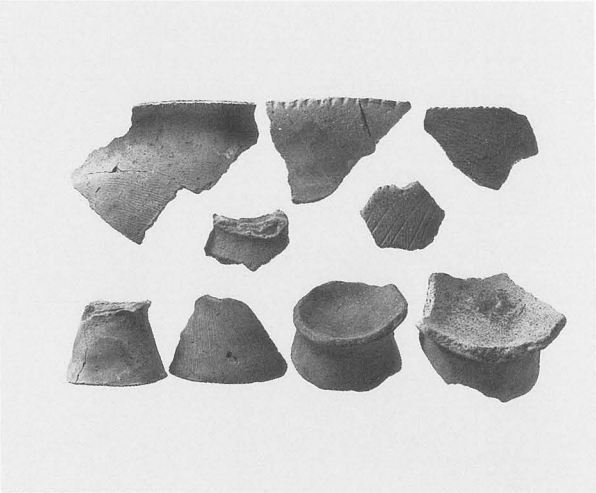
2. 弥生土器・土師器（高坏集合）



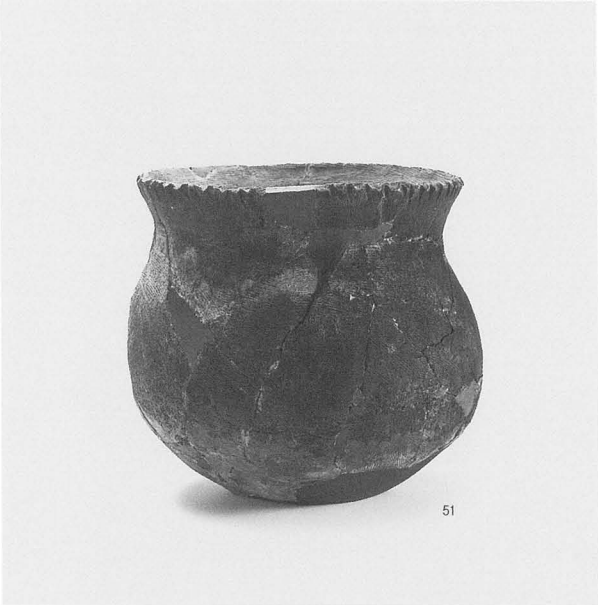
壺（口縁部）



壺（頸～底部）

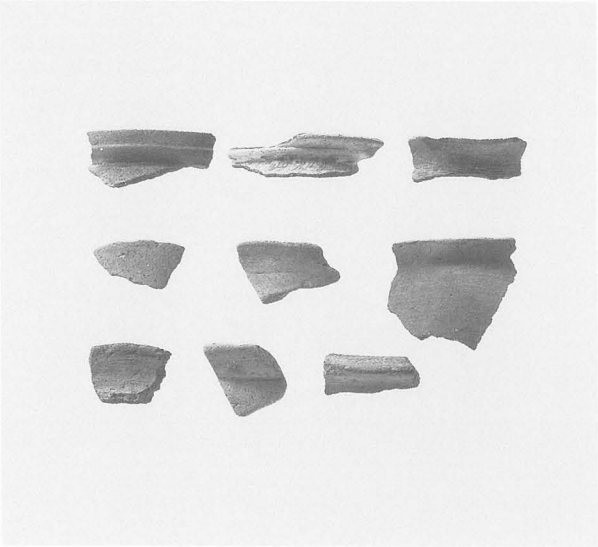


台　付　甕

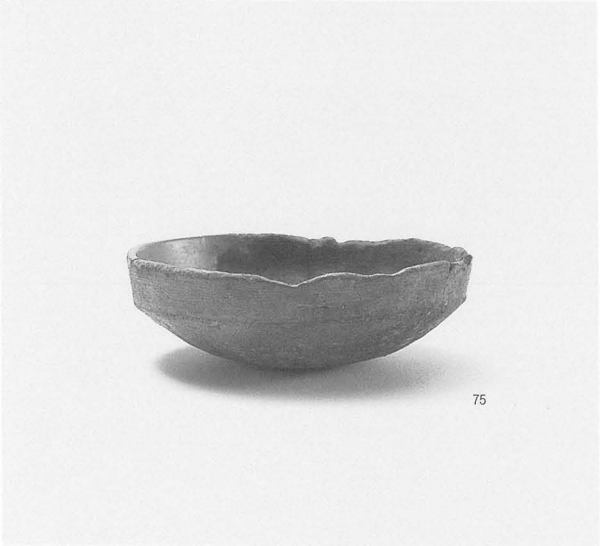


弥生土器・土師器（壺・高坏・台付甕）

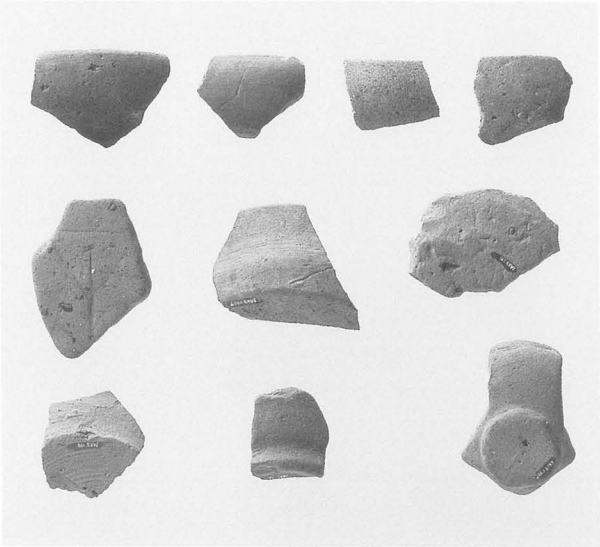
図版７



1．土師器（甕）



2．土師器（坏）



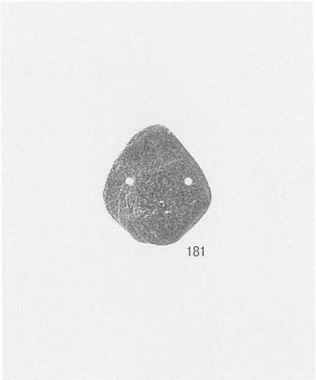
3．土師器（坏・柱状高台）

4．須恵器（坏蓋）

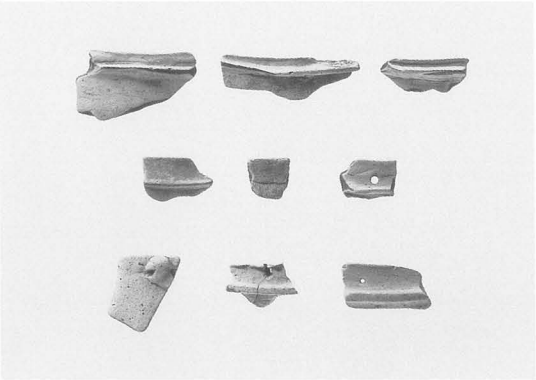
5．須恵器・灰釉陶器・山茶碗（坏・碗類）

6．須恵器（壺・甕類）

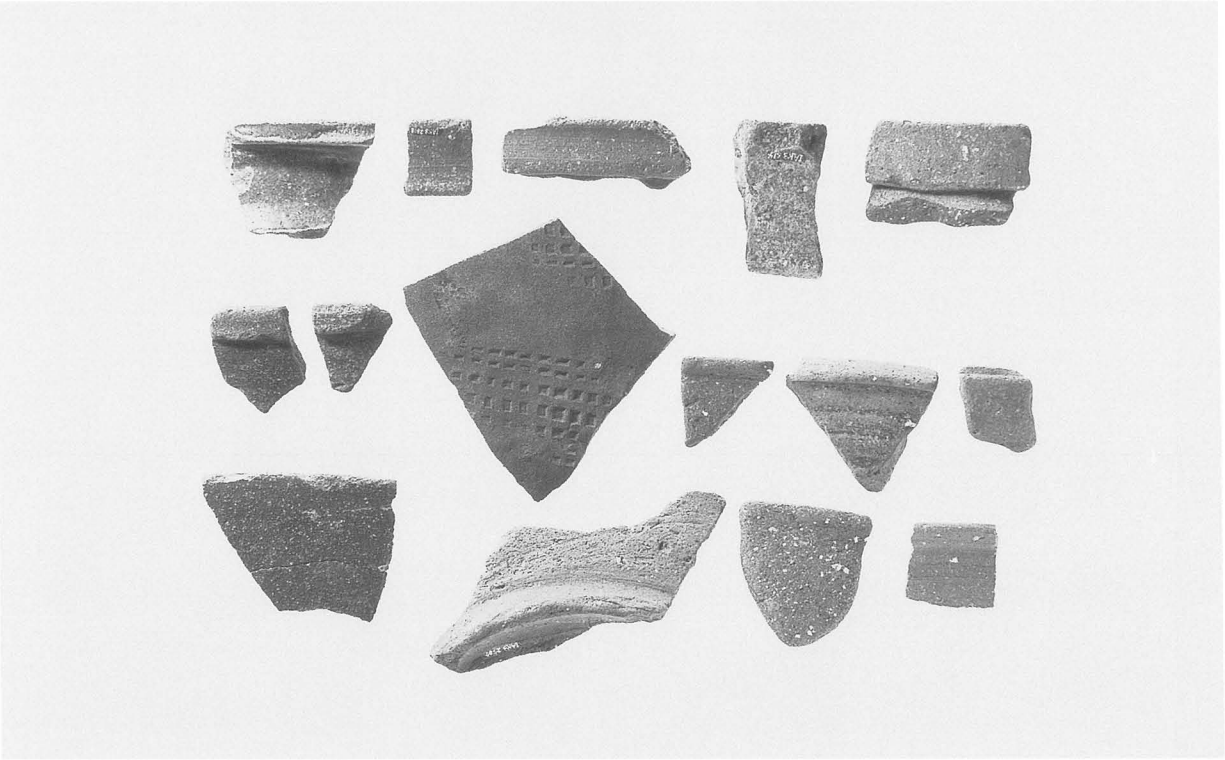
1．管　玉



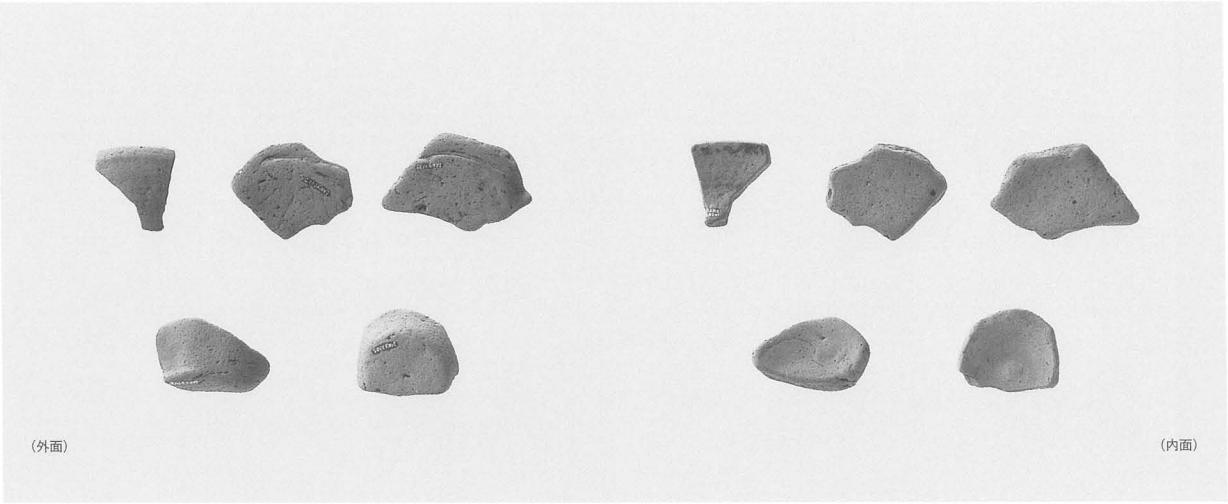
2．石製模造品



4．中世煮沸具（鍋・羽釜）



3．中世常滑産炻器

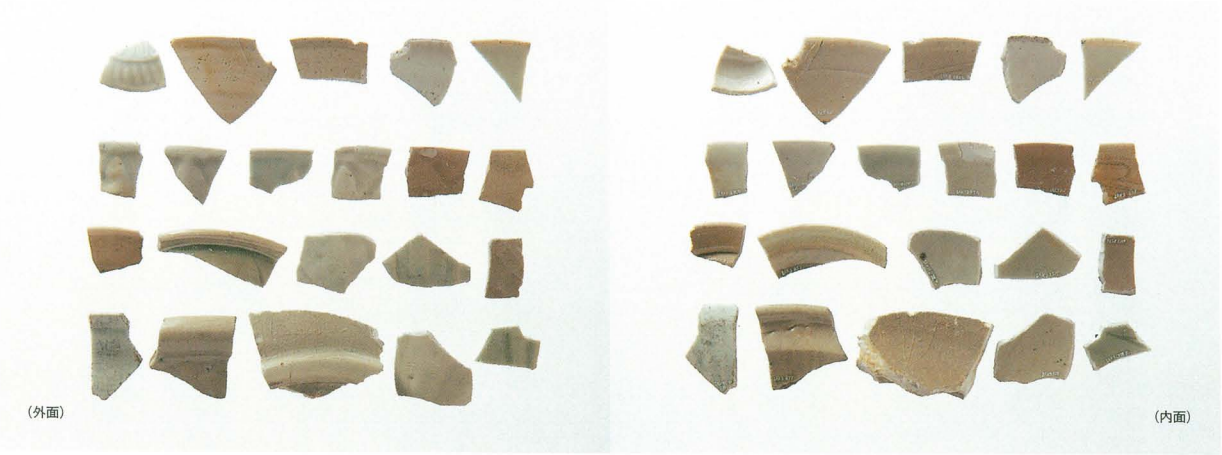


5．かわらけ皿類

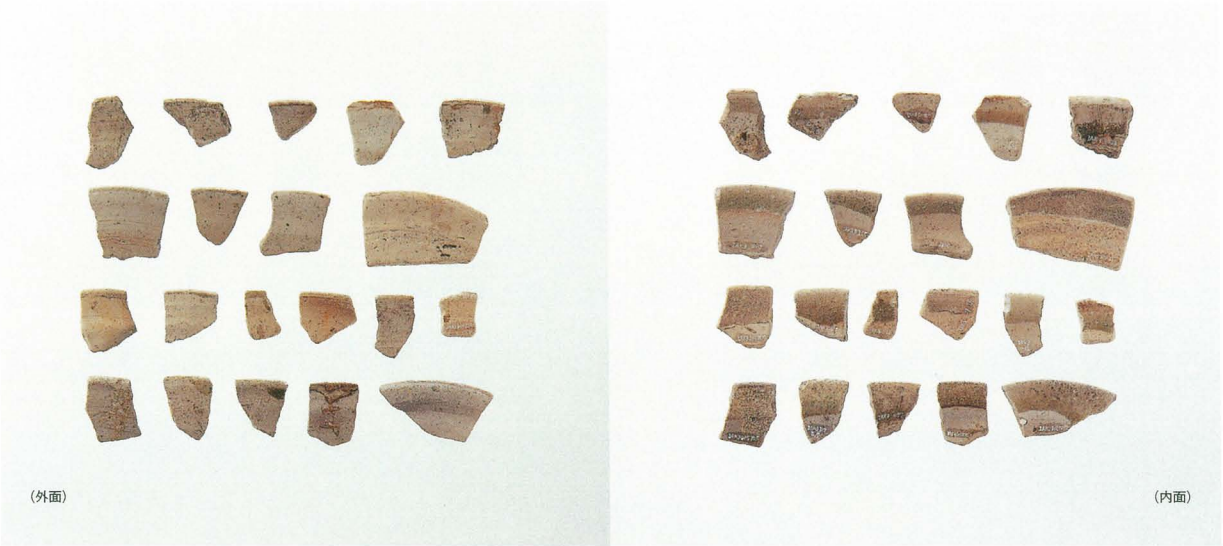
図版 9

1. 古代瓦集合

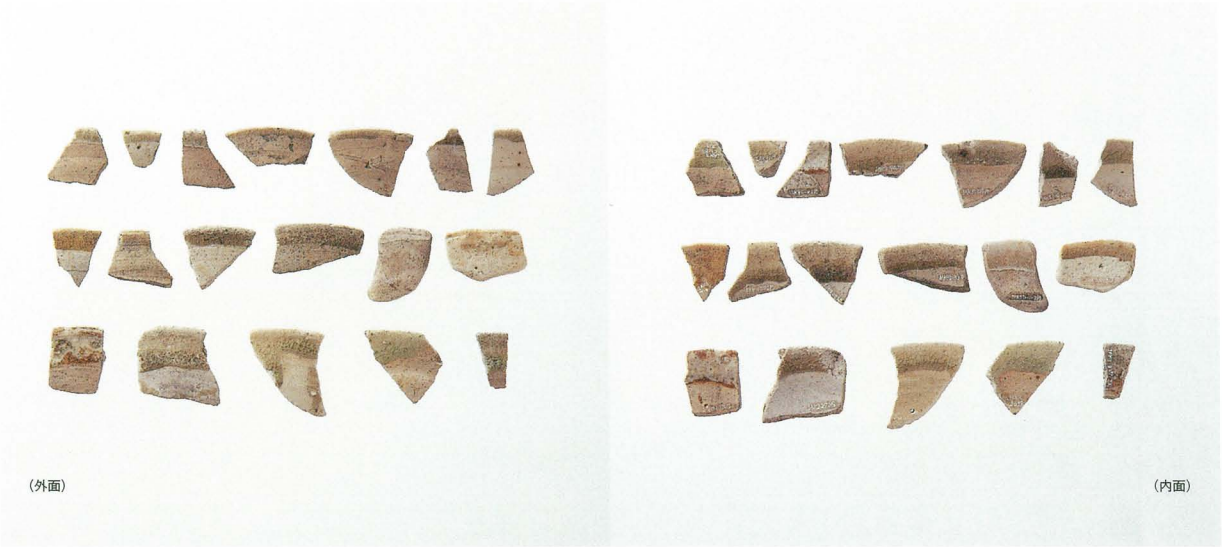
2. 古　代　瓦



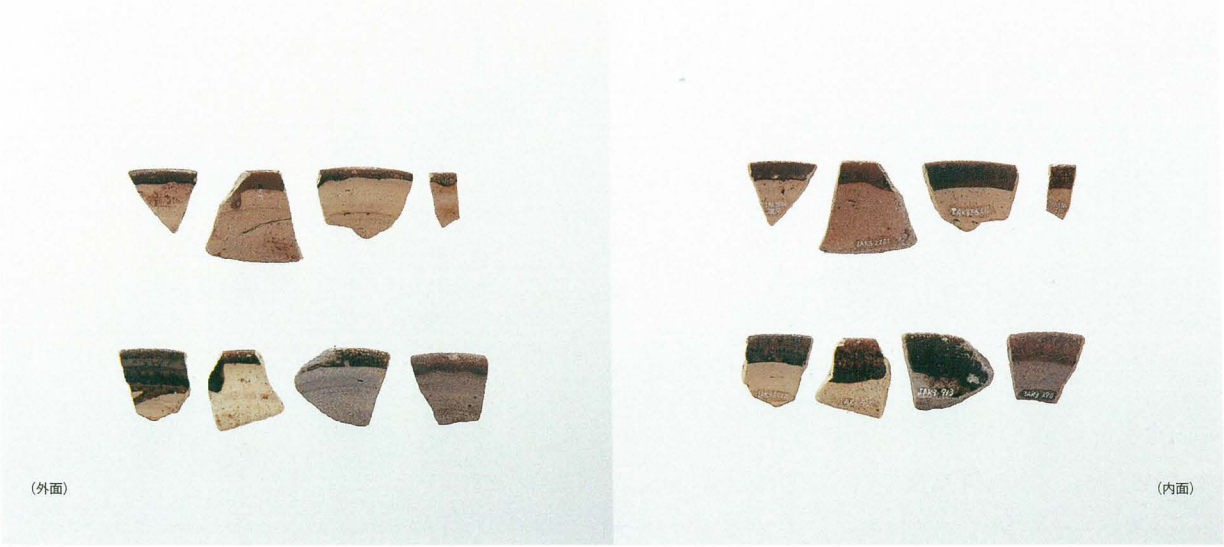
3. 中世輸入磁器



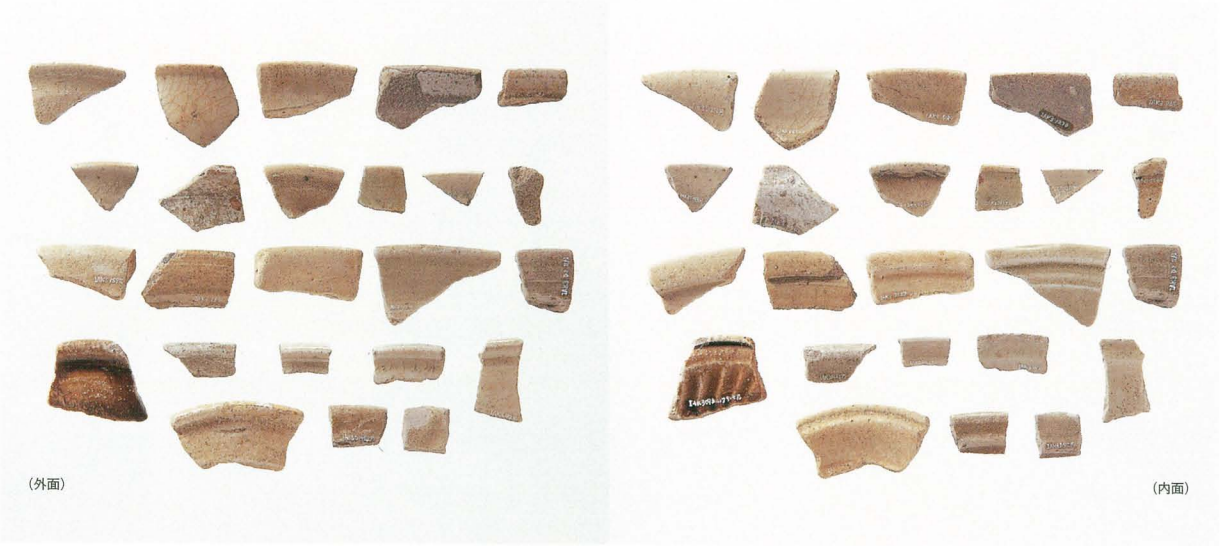
1. 中世瀬戸・美濃系陶器（縁釉皿　灰釉塗布１）



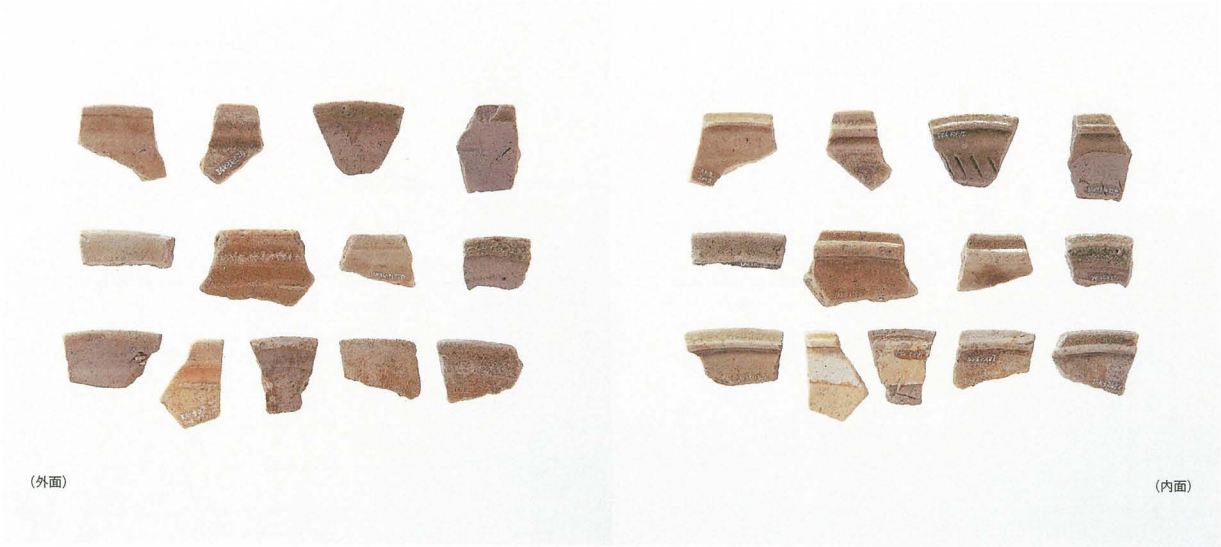
2. 中世瀬戸・美濃系陶器（縁釉皿　灰釉塗布２）



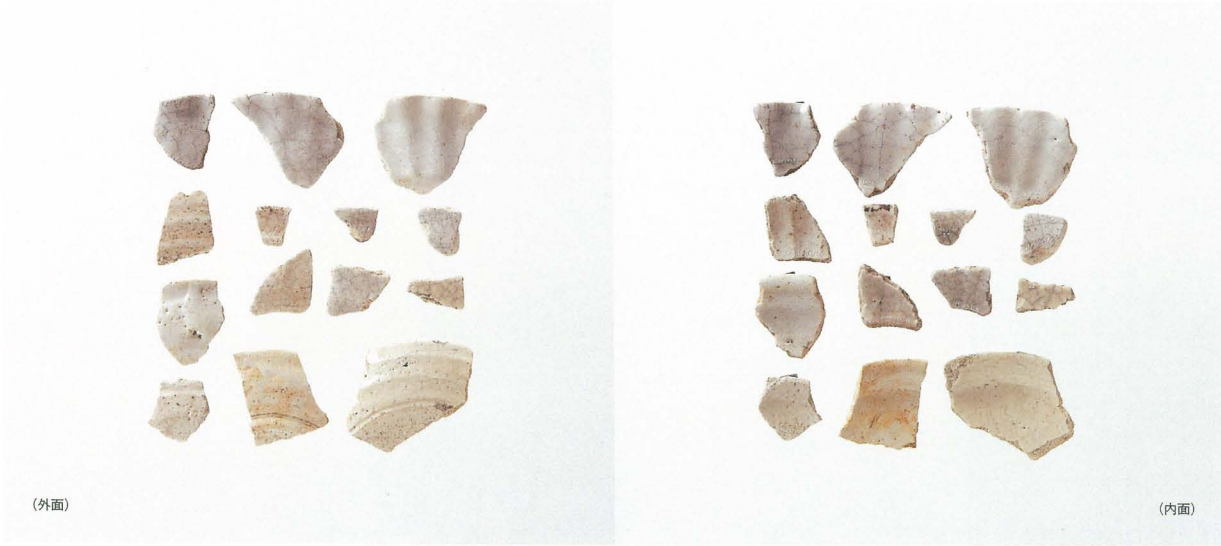
3. 中世瀬戸・美濃系陶器（縁釉皿　鉄釉塗布）



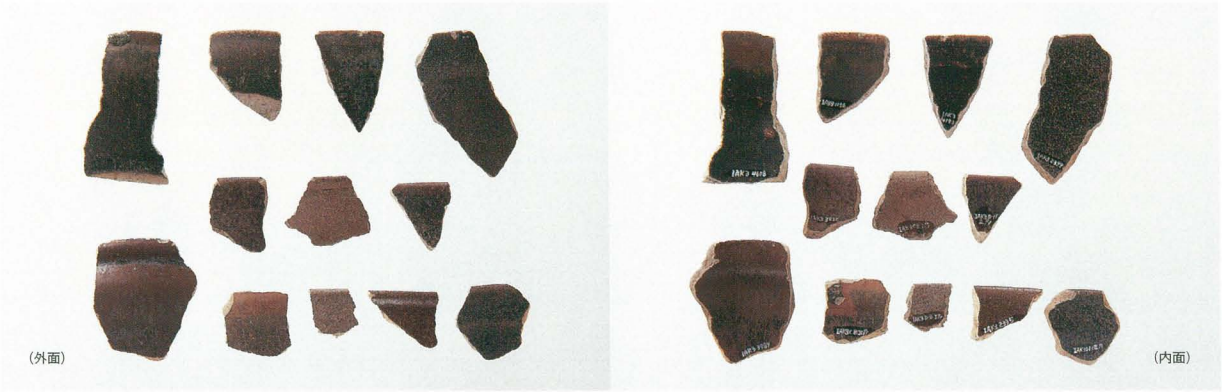
1. 中世瀬戸・美濃系陶器（折縁皿）



2. 中近世瀬戸・美濃系陶器（御皿）



3. 中世瀬戸・美濃系陶器（皿類　志野釉塗布）



1. 中近世瀬戸・美濃系陶器（天目碗）

2. 中近世瀬戸・美濃系陶器（擂鉢）

3. 近世瀬戸・美濃系陶器（鉢類・片口・灯明皿）

4. 中近世瀬戸・美濃系陶器（壺・花瓶類）・瓦器

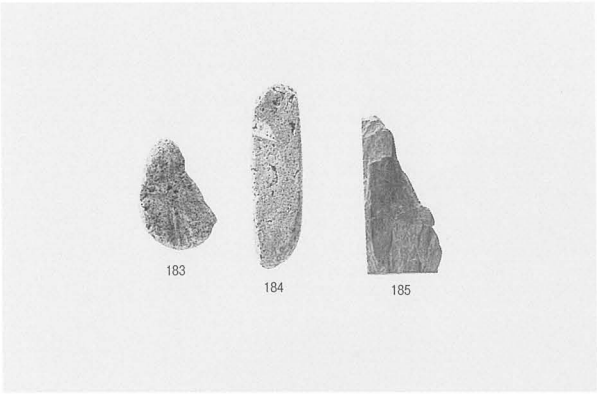
1. 近世瀬戸・美濃系陶器（腰錆碗・香炉・灰落とし）

2. 近世瀬戸・美濃系陶器（仏餉具）

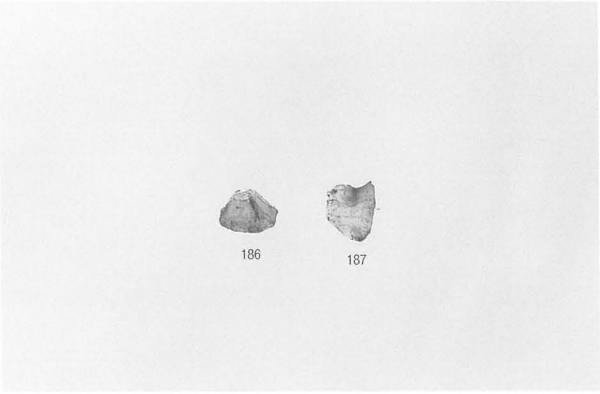
3. 近世瀬戸・美濃系陶器（瓶類）

4. その他の近世陶器（鉢類・輪禿皿）

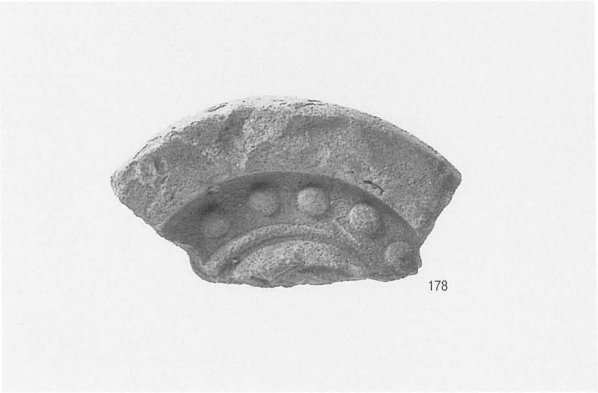
5. 肥前系磁器



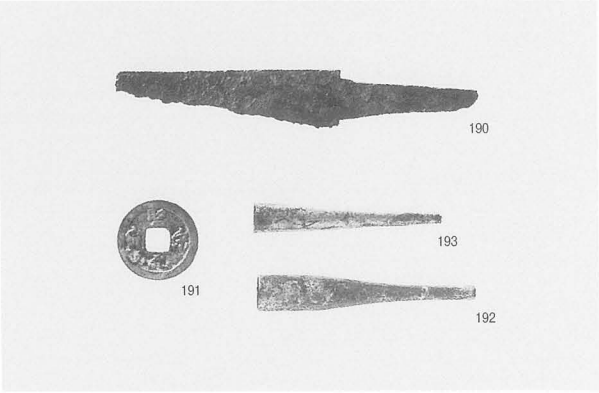
1．石器（砥石・硯）



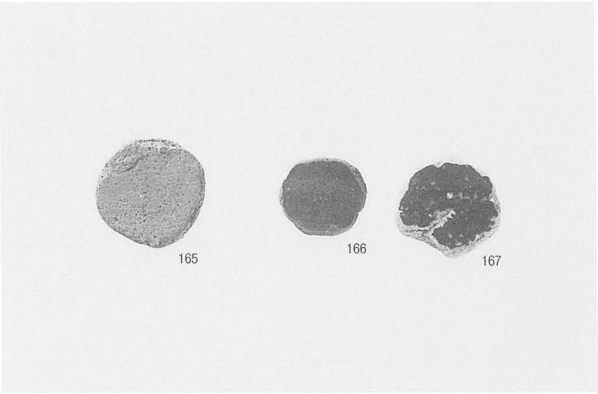
2．石器（火打石）



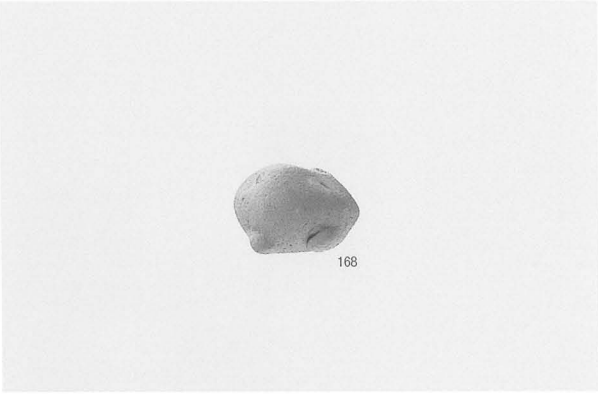
3．近世・近代瓦



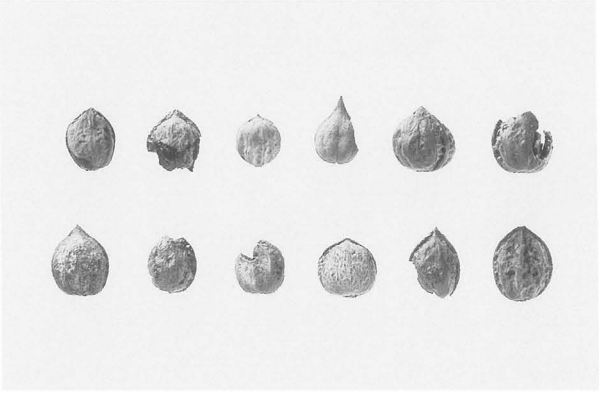
4．金属製品（刀子・銭貨・煙管）



5．土製品（土器片加工円盤）



6．土製品（土人形）

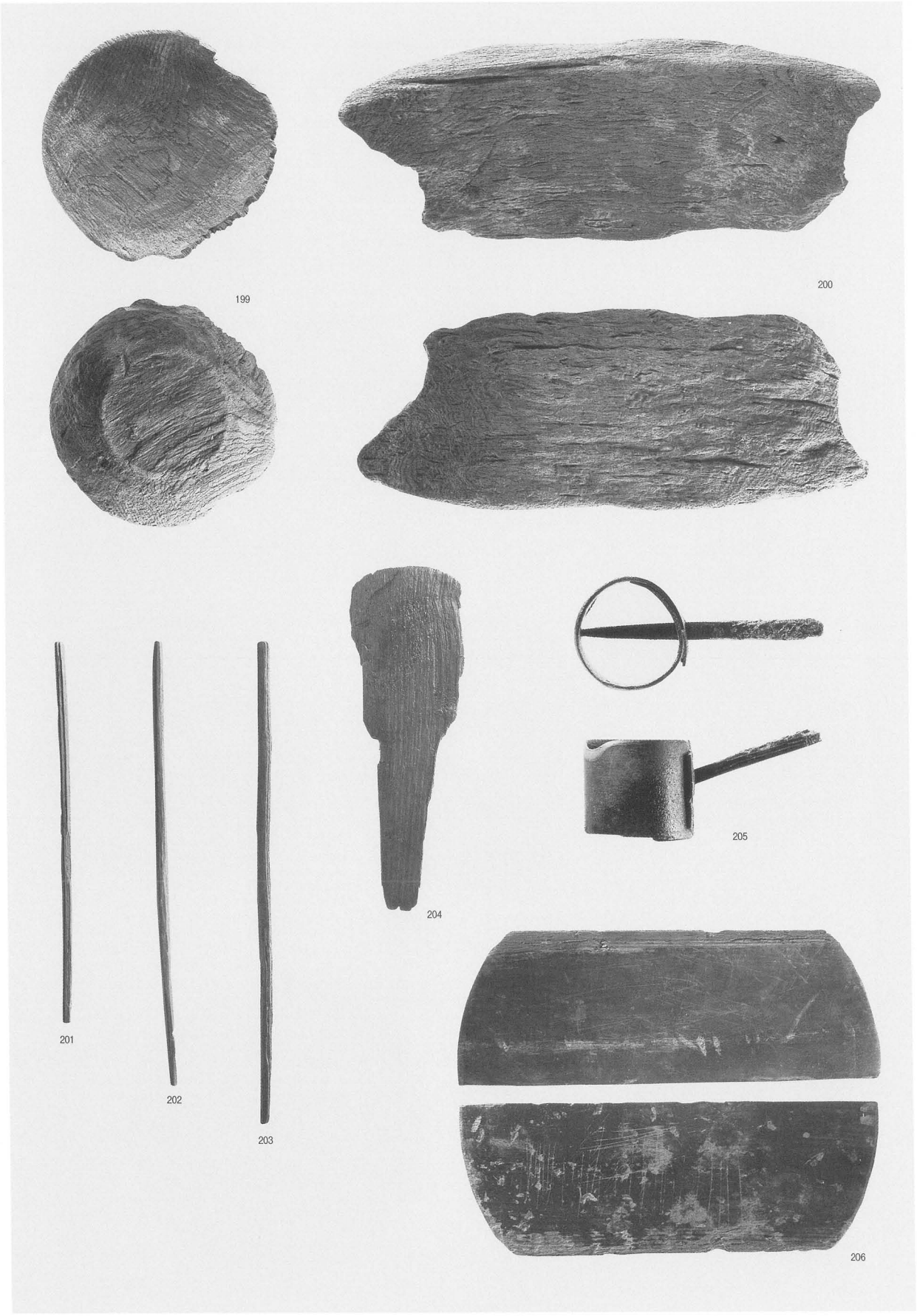


7．種子（胡桃）

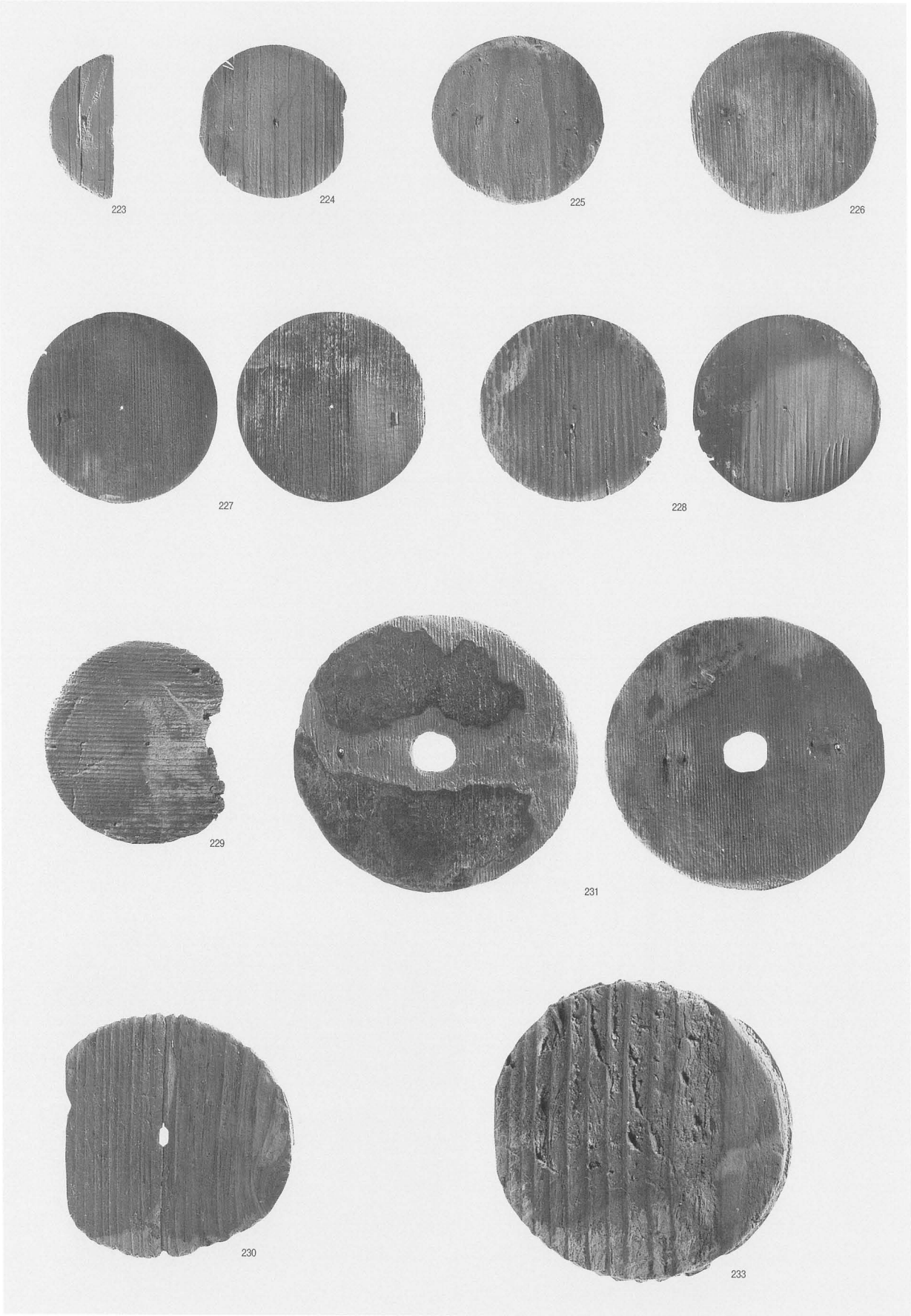
8．種子（桃または、梅）

1. 漆製品集合

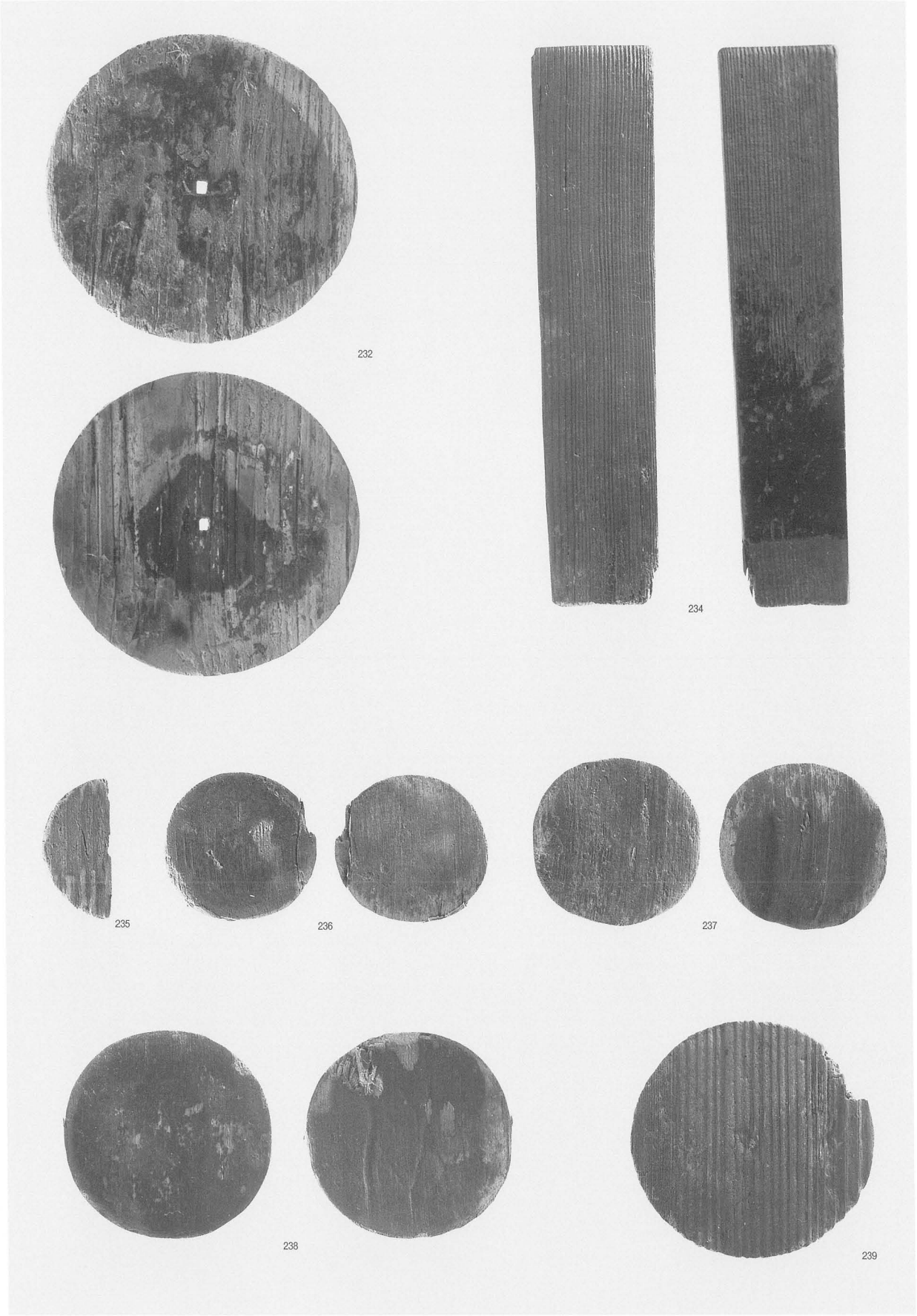
2. 栓　集　合



木製品（容器･食事具）

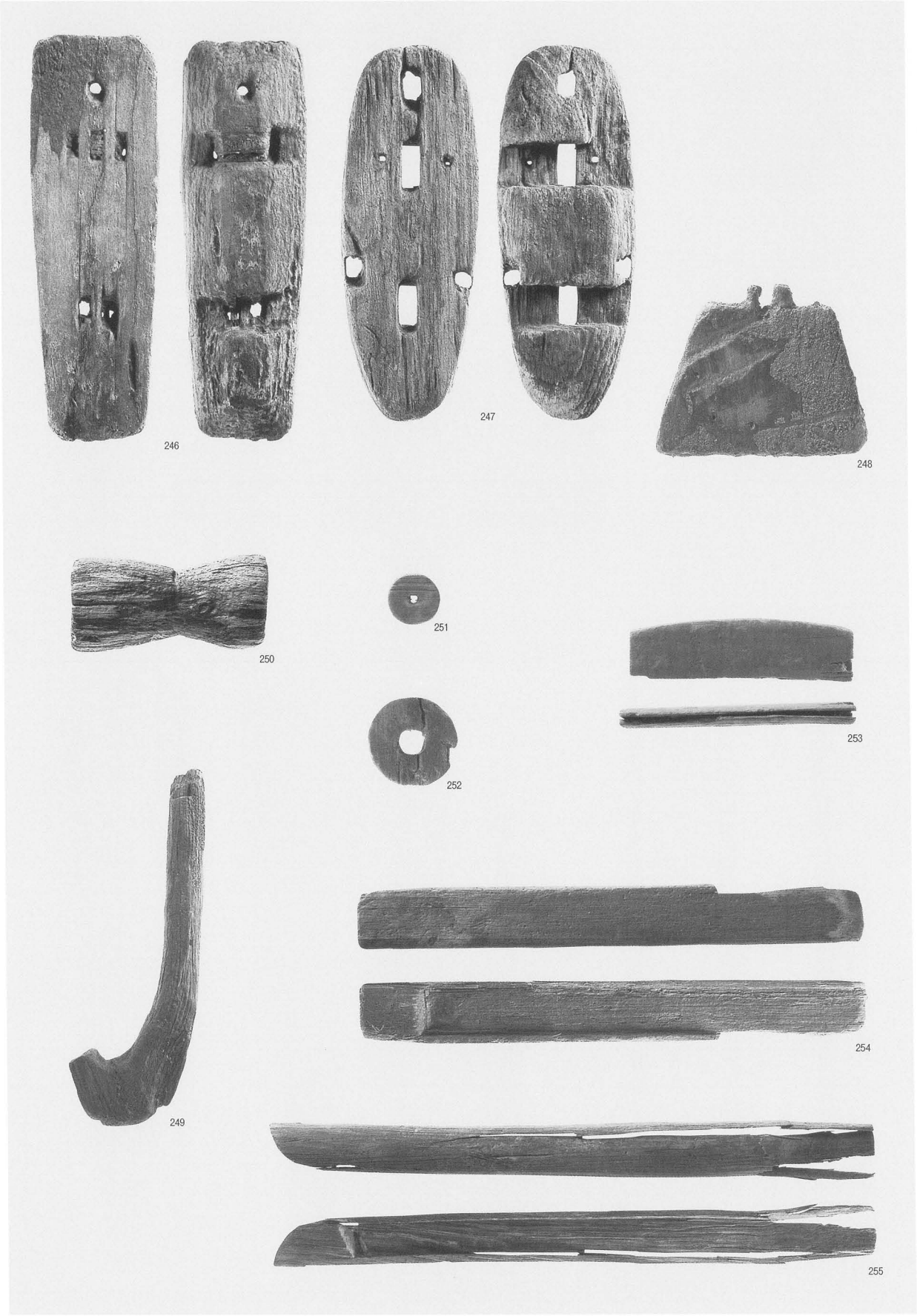


木製品（蓋板1）

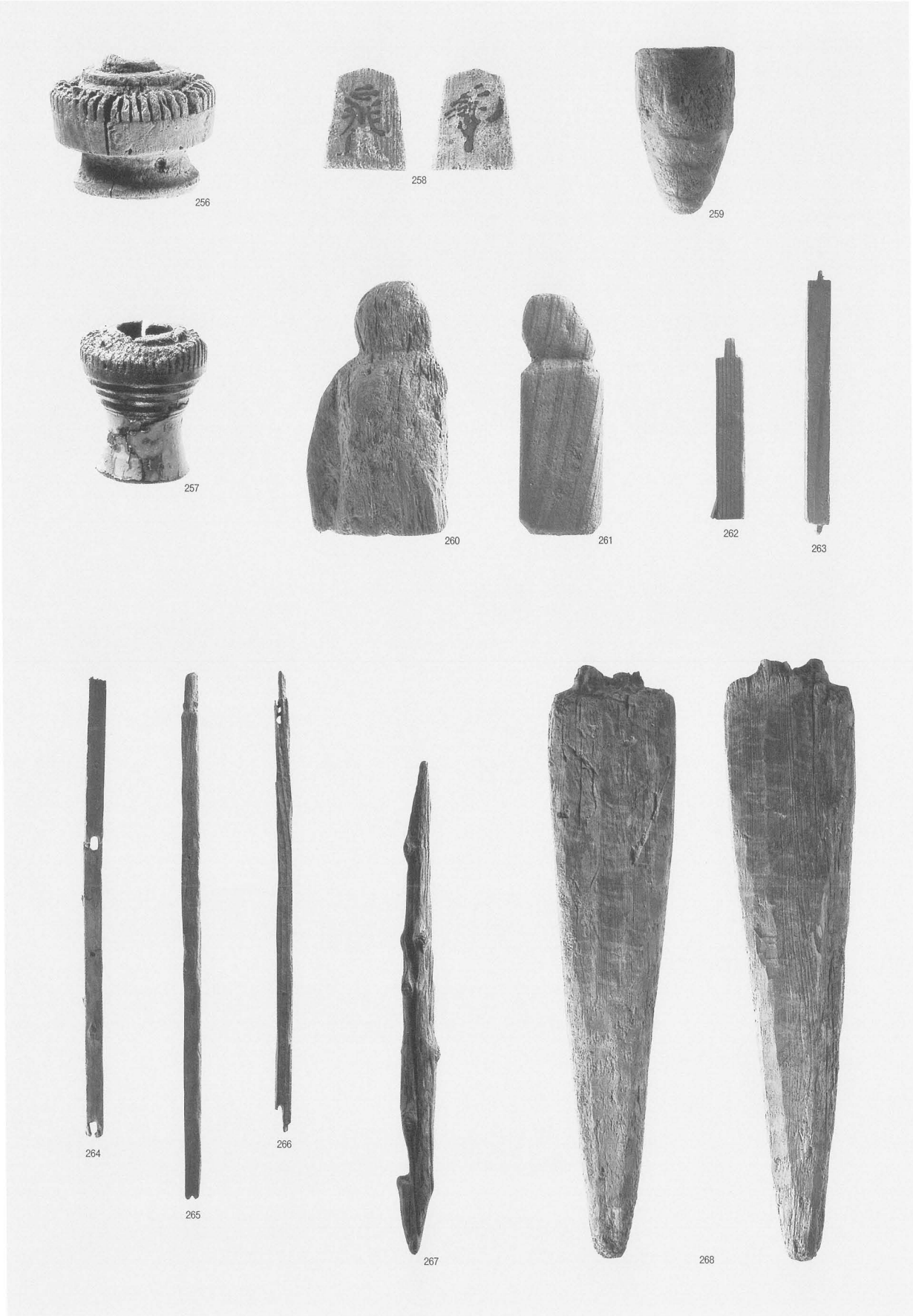


木製品（蓋板2・側板・底板）

木製品（下駄１）



木製品（下駄２・その他の木製品１）



木製品（その他の木製品２・部材類）

報 告 書 抄 録

ふりがな	あおきばらいせき
書名	青木原遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第244集
編著者名	岩名建太郎　小川とみ　小林和貴　鈴木三男　金井慎司
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL054-262-4261　FAX054-267-0521
発行年月日	2011年3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あおきばら 青木原	しずおかけん 静岡県 みしまし 三島市 みなみふつかまち 南二日町 626-4	22206	368	35° 6′ 19″ （日本測地系） 35° 6′ 31″ （世界測地系）	138° 55′ 29″ （日本測地系） 138° 55′ 17″ （世界測地系）	20090618 ～ 20100226	629.45	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
青木原	散布地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世 近世 近代	杭列	土器（弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、炻器、陶磁器） 瓦、 石器（磨敲石） 金属製品（小銅鐸、銅釧再加工品、刀子、銭貨、煙管） 木製品（漆椀、下駄） 石製品（石製模造品、管玉、火打石）	小銅鐸の出土は、静岡県内６例目。鰭を備え、外面に文様を持つ三遠式銅鐸の小型模造品で、同様の出土例は、千葉県で報告されている。

要約	青木原遺跡は、三島扇状地上を流れる御殿川蛇行帯間の微行地から河岸部に当たる。埋没した旧河道中より、弥生時代から近世・近代に至る遺物が出土した。この内、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される小銅鐸は、当該地域と他地域との交流を考える上で重要な資料である。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第244集

青　木　原　遺　跡　Ⅱ

平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年３月10日発行

編集発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒420-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
ＴＥＬ（054）262-4261㈹
ＦＡＸ（054）262-4266

印 刷 所　株式会社 ニシガイ
〒424-0946　静岡県静岡市清水区本町12-6
ＴＥＬ（054）352-2188㈹